

図・本館

自己関係づけに関する研究

-青年期における妄想的観念-

金子一史

名古屋大学図書



11378078

目次

第1章 自己関係づけ研究の概観	3
1-1 はじめに	3
1-2 社会心理学領域における自己意識からのアプローチ	6
1-2-1 自己意識と関係念慮との関連	
1-2-2 自己意識と被注察感	
1-2-3 日本における一般青年の妄想的観念に対する社会心理学的アプローチ	
1-2-4 社会心理学的アプローチの課題	
1-3 精神障害者の妄想に対する心理学的アプローチ	13
1-3-1 帰属過程におけるバイアス	
1-3-2 確率推論におけるバイアス	
1-3-3 情報処理過程におけるバイアス	
1-3-4 心の理論における障害	
1-4 全体的目的	28
1-4-1 一般青年における妄想的観念と精神障害者の妄想との連続性	
1-4-2 アナログ研究	
1-4-3 本論文における全体的目的	
第2章 自己関係づけを測定する尺度の作成	35
2-1 自己関係づけ尺度の作成 [研究1]	35
2-1-1 問題と目的	
2-1-2 方法	
2-1-3 結果	
2-1-4 考察	
2-2 改訂版自己関係づけ尺度の作成 [研究2]	45
2-2-1 問題と目的	
2-2-2 方法	
2-2-3 結果	
2-2-4 考察	
第3章 青年期心性としての自己関係づけ	50
3-1 発達の視点からみた自己関係づけ [研究3]	50

3-1-1	問題と目的	
3-1-2	方法	
3-1-3	結果	
3-1-4	考察	
3-2	自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との 関連 [研究4]	62
3-2-1	問題と目的	
3-2-2	方法	
3-2-3	結果	
3-2-4	考察	
第4章	臨床群における自己関係づけ	72
4-1	本章の問題と目的	72
4-2	臨床群を対象とした自己関係づけに関する調査[研究5]	72
4-2-1	方法	
4-2-2	結果	
4-3	考察	76
第5章	総括的討論	81
5-1	本研究で得られた結果のまとめ	81
5-2	本論文の成果と討論	82
5-3	今後の課題	86
引用文献		89
付録		100
あとがき		107

第1章 自己関係づけ研究の概観^{註1}

1-1 はじめに

他者の何でもない行動やしぐさを自分に向けられたものと感じ、自分に関連づけて物事を被害的に判断することは、一般生活の中でも珍しい事ではない。誰でも、自分が恥ずかしいことをしたり、対人場面で失敗したりしたときには、周囲の視線が気になったりするものである。その際、「あそこで2～3人が集まって小声で話をしているのは、自分の事を言っているのではないだろうか」とか「部屋に入ったらみんなが笑っていたけれど、あれは自分のことを笑っていたのだろうか」とか「こちらから話しかけたのに返事をしてくれないなんて、あの人は私を無視しているのだろうか」などと考えることは、十分あり得ることである。人前で恥をかいたり失敗をした後には、思い違いかもしれないとは感じながらも、周りの人が自分をあざ笑っているかのように感じるものである。このように、軽い被害妄想的な思考は、一般生活を営んでいる中で頻繁に体験されていると考えられる。なにも、精神障害者のみに見られるわけではない。

近年、一般青年においても、上記のような被害妄想的な観念を体験しているという指摘が相次いで報告されている（Fenigstein & Venable, 1992；丹野・石垣・杉浦, 2000）。丹野ら（2000）は、妄想的観念の主題を包括的に測定するために、妄想観念チェックリストを作成した。かれらは、妄想的観念を“妄想ほどの強さはない観念で、自分が苦しめられている、迫害されている、または不当に扱われているという疑念”としたDSM-IVの定義を採用している。そして、予備調査から作成した妄想観念チェックリストを、一般大学生に施行した。その結果、疎外観念7項目中のいずれかの体験を認めた一般大学生の割合は98.4%であり、被害観念7項目中のいずれかの体験を認めた一般大学生の割合は75.0%であった。また、彼らは精神科医に一般大学生の体験頻度を予想させ、一般大学生は精神科医の予想よりも妄想的観念を高頻度に体験していることを示した。

^{註1}本章は、金子一史 2001 妄想的観念および妄想に関する研究の概観 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），48，163-174. を加筆・修正したものである。

以上のように、一般青年であっても、軽い被害妄想的な観念は高頻度で体験している。ところが、これらの一般青年における軽い被害妄想的思考を取り扱った研究は少ない。本研究では、一般青年における被害妄想的な観念を取り扱う。その意義としては、以下の4点をあげることができる。

第1点は、青年期の理解促進につながる点である。青年期は自己への関心が高まる時期であると言われ、それに伴い自意識過剰になりやすいことが知られている。自己が他者からどのように評価されているかについて気になったり、過去の対人場面などでの失敗をくよくよと考えて、自己嫌悪に陥ったりする。そのような中で、他者の言動を被害妄想的に自己に結びつけて考えてしまうことは、頻繁におこると考えられる。これまで、実証的には対人恐怖的心性（永井，1998）などの視点から、青年期にアプローチした研究は存在するものの、被害妄想的観念の視点から青年期にアプローチした研究は存在しない。被害妄想的な観念を検討することは、これまでの青年期研究に新たな視点を提供する可能性がある。

第2点は、社会心理学における自己研究に新たな知見を加える可能性がある点である。被害妄想的な観念は、他者と自己との間で発生する。つまり、被害妄想的な観念は、自己と他者との関わりという社会的な関係を前提としている。よって、被害妄想的な観念を検討することは、自己と他者との関係、つまり社会的関係を取り扱うことになる。よって、自己と他者との関係を取り扱っている社会心理学研究にも、新たな知見を加える可能性がある。

第3点は、精神障害者を対象としてきた今までの妄想研究に、新たな視点を与える可能性がある点である。これまで、精神障害者に見られる妄想は、健常者との非連続性が強調されてきた。ところが近年、精神障害者に見られる妄想と、健常者に見られる妄想的観念との間に一定の連続性を想定するスペクトラム説の立場をとる研究が見られるようになってきた（笠原・藤縄，1978；丹野ら，2000など）。精神障害者に見られる妄想と、健常者に見られる妄想的観念との間に連続性を認めるならば、健常者に見られる妄想的観念について検討することは、妄想研究に新たな視点をもたらす可能性がある。

第4点は、軽度な精神障害の症状それ自体が、臨床的介入として重要になる点である。本研究で取り扱う軽い被害妄想的な観念は、妄想に比べれば、本人や周囲の者が疲労困惑することは少ない。だからといって、見過ごすことはできな

い。なぜなら、軽い被害妄想的な観念から、より重篤な妄想に発展する可能性もあるからである。軽い不適応の状態が、後の重い不適応の前兆であったという場合もあり、軽い不適応の段階で介入などを行うことは、後の重い不適応状態を防ぐことにつながる。よって、軽い被害妄想的な観念を取り扱うことは、大変重要といえる。

以上の点から、本論文では一般青年における軽い被害妄想的思考を取り扱う。その際、一般青年が体験している軽い被害妄想的思考の中でも、自己関係づけに焦点を当てて検討する。自己関係づけとは、「自己には関係ないかもしれない他者の言動を、自己に被害的に関係づける傾向」と、本論文では定義する。

そして、本論文の第1の目的は、一般青年における自己関係づけの実態を明らかにすることである。本論文の第2の目的は、臨床群における自己関係づけの実態を明らかにすることである。本論文の第3の目的は、一般青年と臨床群の自己関係づけを同時に検討し、一般青年における妄想的観念および精神障害者の妄想に対して、新たな視点を提供することである。

そこで本章では、自己関係づけに関連する研究を概観する。自己関係づけに関連する研究の中で、実証的な心理学的手法を用いて取り扱ったものは、以下の2つのアプローチに大きく分類できる。

第1のアプローチは、一般青年の妄想的観念を対象としたものである。第1のアプローチは、一般青年の中で妄想的観念傾向の高い人に注目して検討している研究をさす。これらの研究の多くは、社会心理学領域における自己意識理論を基盤にしている。自己意識理論を一般青年における妄想的観念に適用して、その特徴に迫ろうという研究である。

第2のアプローチは、精神障害者における妄想を対象としたものである。第2のアプローチは、実際に妄想を持っている精神障害者を対象にして、妄想の心理学的特徴に迫ろうとする研究をさす。これらの研究は、妄想を持っている精神障害者に対して様々な心理学的実験や質問紙調査を行っている。その際、対照群として一般健常人を被験者に設定して、臨床群と対照群の差異を検討している。これらのアプローチは、1980年代の後半から注目を集め始め、1990年代に入って盛んになり、現在も研究報告が増加し続けている分野である（レビューとして、Garety & Freeman, 1999）。この背景には、一般心理学で発展してきた様々な

理論を、今まで理解不可能と考えられていた精神障害の症状である妄想に適用することで、妄想に対する新たな知見を獲得し、ひいては精神障害者の理解を促進しようとするねらいがある。適用される理論としては、社会心理学領域における Higgins(1987)の自己不一致理論 (self-discrepancy theory) や、発達心理学領域における心の理論 (theory of mind) などがある。

以下では、2つのアプローチそれぞれについて、概観を述べる。そして、一般青年にみられる妄想的観念と精神障害者にみられる妄想との間に、連続性が仮定できるかという問題について述べる。それらをふまえて、本論文が依って立つアナログ研究アプローチについて論述する。そして最後に、本論文における目的を述べる。

1-2 第1のアプローチ：社会心理学領域における自己意識からのアプローチ

自己意識理論は、社会心理学の領域で盛んに研究されている概念である。自己への注意の焦点付けを系統的に研究したのは、Duval & Wicklund (1972) が最初であるといわれている。彼らは、人の注意の対象は、自分自身に向けられているか外的環境に向けられているかのいずれかであると仮定した。そして、人の注意は環境と自己との間を行き来しているが、条件によっては自己に向けられた注意が高まるとしている。自己に注意が高まる刺激としては、他人から見つめられたり、鏡やテレビに映る自分の姿を見たり、録音した自分の声を再生して聞くなどがある。そして、これらの刺激を用いて実験的に操作を行い、自己に注意が向けられた状態での被験者の様々な活動を検討した。それらの結果を総合して、自己客体視理論 (Objective Self-Awareness Theory) を提唱した。

その後、実験的に操作を行うことで状態的な自己への注意の焦点付けを検討するだけでなく、特性的に自己に注意を向けやすい傾向の人を測定するために、自己意識尺度 (Self-consciousness scale) が作成された (Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)。自己意識尺度が作成されたことにより、自己に注意を向けやすい人か、それとも自己に注意をあまり向けない人かという個人差の測定が可能となった。

さて、自己意識尺度においては、自己意識は私的自己意識と公的自己意識の2側面でとらえられる。私的自己意識とは、自己の感情や態度や思考などの、内的

で他人は直接知ることができないような私的側面に注意を向けやすい傾向である。公的自己意識とは、自己の容姿や振る舞い方や自己が他者にどう見られているかを意識しやすい傾向である (Table 1-1) 。Fenigstein et al. (1975) 以後、自己意識尺度を使用した研究は精力的に行われており、自己意識に関する知見は現在も蓄積されつつある。これまでの研究の中で主なものをあげると、私的自己意識の高い人は私的自己意識の低い人に比べて、自己評価が正確であり (Schier, Buss, & Buss, 1978)、自分の態度や信念をより正確に認知するので、態度と行動の一致度が高く (Carver, 1975)、感情反応がより強化される (Schier & Carver, 1977) ことなどが示されている。一方、公的自己意識の高い人は公的自己意識の低い人に比べて、自己が人にどう思われているか気になるので、同調行動が起こりやすくなり (Duval, 1976)、他者の意見や考え方に敏感であり、他者からの評価に不安や恐怖をいだきやすいと言われている。

自己意識理論の立場から一般青年の妄想的観念を検討しているものには、Fenigsteinの一連の研究がある (Fenigstein, 1984; Fenigstein & Venable, 1992; Fenigstein, 1995)。

Table 1-1 自己意識尺度の項目の例

私的自己意識
自分の動機や気持ちをいつも分析している
常に自分自身を理解しようと心がけている
自分の感情や気持ちに注意を払っていることが多い
公的自己意識
自分が人にどのように見られるかを意識している
自分の外見には気を配っている
出かける前には必ず鏡を見る

1-2-1 自己意識と関係念慮との関連

Fenigstein (1984) は、自分自身が他者の注意や批判の対象となっていると思いきむ認知的歪みを自己標的バイアス (self-as-target bias) として、自己意識との関連を検討した。その結果、自己を社会的対象として捉える傾向の強い人、つまり公的自己意識の高い人は、他者の行動が自己に関係しているという推論を

避けることが難しいとしている。

Fenigstein (1984)の実験3では場面想定法を使用した。自分と登場人物の対人状況に関する仮想場面を被験者に提示して、登場人物の行動が自己を標的としているものかどうかをたずねた。使用した仮想場面の例の一つは、知人と挨拶をせずに廊下ですれ違った場面であり、被験者にその状況を想像するように求めた。そして、知人が考え事に夢中で気づかなかったのか、知人が自分との会話を避けようとしていたのかの2通りの理由が提示され、それぞれどの程度あてはまると思うか被験者に回答を求めた。その結果、公的自己意識の高い被験者は、公的自己意識の低い被験者に比べて、有意に他者の行動が自己に向けられていると捉えやすいことを示した。また、Fenigstein (1984)の実験2では被験者グループの中から1人を、楽しいあるいは楽しくない見本実験の被験者として、無作為に選んだと告げた後、その人物が自分である可能性を推定させている。その結果、公的自己意識の高い被験者は公的自己意識の低い被験者に比べて、実験者に見本実験の被験者として選ばれると推測しやすいことを示した。

また、Fenigstein & Venable (1992)は、一般的な人における妄想的観念をパラノイアとして検討している。Fenigstein & Venable (1992)のパラノイアは、精神障害における臨床疾患としてのパラノイアをさしておらず、普段の一般生活において体験される妄想的観念を意味している。Fenigstein & Venable (1992)は、パラノイアの特徴として、自己関係づけをその一つにあげている。その他にパラノイアの特徴として、疑い深さ、他者に対する不信感や脅威、悪意や敵意を他人に見いだしやすいことをあげている。そしてこのパラノイア思考は、妄想性障害のある者や妄想性人格障害のある者だけに見られるものではなく、一般健常者にも見られるとしている。彼らは、パラノイア思考を測定するために、MMPIから抜粋した全20項目からなるパラノイア尺度を作成した。そして公的自己意識・私的自己意識・社会的不安の3因子からなる自己意識尺度 (Fenigstein et al., 1975) と共に一般大学生に試行した。その結果、私的自己意識得点を統計的に統制した後の、パラノイア尺度得点と公的自己意識得点との偏相関は.45と統計的に有意な正の値を示した。これに対し、公的自己意識得点を統計的に統制した後の、パラノイア尺度得点と私的自己意識得点との偏相関は.15であった。この結果から、パラノイアに関連しているのは、公的自己意識であるとした。

1-2-2 自己意識と被注察感

パラノイアのその他の特徴として被注察感がある。誰かに見られている感じや他者が自分に特に注目しているという考えは、パラノイアの特徴としてあげられる。そこで、Fenigstein & Venable (1992)は、被注察感と自己意識との関係を検討した。公的自己意識の高い人は、他者から自己がどのように見られているかを気にしやすいので、直接的な証拠がなくても、自己が他者の観察の対象になっていると推測しやすいと予測した。Fenigstein & Venable (1992)の第2実験では、被験者に双方向性のある鏡の前で、待機させたりアナグラム課題を行わせたりした。仮説では、公的自己意識の高い人は見られたり観察されている感じを多く認めやすいと想定された。実験の結果、公的自己意識の高い人は公的自己意識の低い人に比べて、部屋にいる間、観察されていると感じやすいことが示された。

またFenigstein & Venable (1992)の第3実験では、状態的な自己意識が実験的に操作された。彼らは、被験者に物語を作成するように求めた。被験者は、物語に使用する単語のリストを渡された。実験群は「I, my, me, mine, myself」などの1人称の単語が含まれていた。対照群は、1人称の単語の部分のみ全て3人称の単語に置き換えられたリストを渡された。1人称の単語を使用する実験群では、3人称の単語を使用する対照群よりも、自己に関連する単語を使用することによって状態的な自己意識が高まるように操作した。課題は双方向性のある鏡の前で行われた。その結果、実験群は対照群よりも、課題遂行中に誰かに見られていると感じやすかった。以上の結果から、自己に注意を向けるほど、自己が他者の注目の対象となっていると感じやすいとしている。

これらの一連の結果から、Fenigstein (1995)は自己意識とパラノイアとの関連を以下のように述べている。つまり、公的自己意識の高い人は、自己を社会的な対象としてみなす傾向が強い。よって、他者の行動が自己に関係していると考えを避けることが困難である。そのような自己に関連づける推論はパラノイア思考の特徴であり、自己意識と妄想的観念との明確な関連が示唆されるとしている。

1-2-3 日本における一般青年の妄想的観念に対する社会心理学的アプローチ

日本において一般青年における被害妄想的な思考を取り扱ったものは、丹野ら（2000）がある。丹野ら（2000）は、妄想観念チェックリスト（Delusional Ideation Checklist: DICL）を作成して、一般青年の妄想的観念を検討した。妄想観念チェックリストは、妄想の主題的側面のアセスメントを目的として開発された。この背景には、確信度・訂正可能性・内容の正誤などの妄想の形式的な側面に対するアセスメントは研究が蓄積されつつあるのに対し、妄想の内容が被害的な内容なのか、それとも誇大的な内容なのかという、妄想の主題のアセスメントは少ないことがあげられる。DSM-IV（APA, 1994）では、妄想やパラノイアに関連した障害として、妄想型分裂病・妄想性人格障害・妄想性障害の3つがある。妄想型分裂病については、妄想主題についてはほとんど触れられていない。また、妄想性人格障害については被害妄想について記載があるのみで、それ以外の妄想主題についての記載はない。DSM-IVの妄想性障害では、色情型・誇大型・嫉妬型・被害型・身体型・混合型の6つが列挙されているが、それらの主題間の関係については記載がない。このように、妄想の主題間の関係は不明点が多く、十分整理されていない問題がある（丹野ら, 2000）。また、妄想的観念の主題を測定しているものとして、Fenigstein & Venable (1992)のパラノイア尺度がある。しかし、様々な主題の中でも被害観念しか扱っておらず、その他の誇大的観念・微小観念などの被害観念以外の主題を扱っていないという問題があった。

丹野ら（2000）の妄想観念チェックリストは全42項目で、負の感情価を持つ24項目と、正の感情価を持つ18項目から構成される。丹野ら（2000）は一般大学生308名に妄想観念チェックリストを実施し因子分析を実行した。その結果、負の感情価を持つ24項目から、疎外観念・微小観念・被害観念・加害観念の4つの主題を抽出した。正の感情価を持つ18項目から、庇護観念・自己肯定観念・被好意観念・他者操作観念の4主題を抽出した。これらの観念の各尺度内の1項目以上で「たまにある」または「よくある」と答えた被験者の割合を体験率として算出している。その結果、庇護観念の体験率が40.9%であることを除くと、他の観念の体験率は66.9%~98.4%と全般に高い割合を示していた。特に、疎外観念・微小観念・加害観念の体験率はそれぞれ98.4%, 94.2%, 94.2%といずれも

高い割合を示した。

また、これらの各観念と、Fenigstein & Venable (1992)のパラノイア尺度との相関を算出している。その結果、負感情尺度においては、.32～.49の有意な中程度の正の相関関係が見られた。ところが、正感情尺度においては、他者操作観念とパラノイア尺度との間に.15と弱い正の相関が得られたのみで、その他の観念とパラノイア尺度との相関は有意とはならなかった。

丹野ら (2000) の意義としては、以下の点が上げられよう。第1に、一般健常人の妄想的観念を測定した点である。一般健常人の妄想的観念を直接取り扱った研究はFenigstein & Venable (1992)の研究があるものの、これまでの知見は少なかった。丹野ら (2000) による妄想観念チェックリストを使用することにより、今後、一般青年の妄想的観念の研究が、より一層促進されると期待される。

第2に、妄想的観念を負の感情を持つものと正の感情を持つものに分類し、その両方の概念を扱っていることである。Fenigstein & Venable (1992)のパラノイア尺度は、被害観念と誇大観念に限られているという問題があった。これに対し、妄想観念チェックリストは正の感情価を含む8つの観念を扱っており、より妄想的観念を包括的に測定できる利点がある。

第3に、妄想観念チェックリストから得られた結果、「自己-他者図式」を提案している。自己-他者図式とは、自己と他者との関係と、陽性・陰性感情を考慮に入れて妄想的観念を構造化し図示したものである。各妄想的観念の主題を、他者から自己への方向にあてはまるもの（負の感情観念では疎外観念と被害観念、正の感情観念では庇護観念と被好意観念）と、自己から他者への方向にあてはまるもの（負の感情観念では加害観念、正の感情観念では他者操作観念）と、自己完結にあてはまるもの（負の感情観念では微小観念、正の感情観念では自己肯定観念）に整理分類している。

しかし、丹野ら (2000) の問題として以下の点が上げられる。第1に、項目内容が曖昧である点である。例えば、被害観念尺度の質問項目には「私は誰かに利用されているのではないか、という疑い」という項目がある。この項目に見られるように、ほとんどの質問項目の語尾は「疑い」「考え」「感じ」という表現が使用されている。これらの表現は曖昧さが伴う。妄想的観念の高い体験率は、これらの語尾の曖昧さによる影響もあると考えられる。

第2に、尺度項目の妥当性の問題がある。尺度名とそれに対応する項目の内容が、かけ離れている部分がある点である。例えば、「人とうまくつきあえる力があるという感じ」という質問項目は他者操作観念の項目とされている。しかし、人とうまくつきあえる力があると感じることが、すなわち他者操作観念になるというのは論旨が飛びすぎている。人とうまくつきあえるというのは、実際にそのようなスキルを持っていると考えるのが妥当である。すると、「人とうまくつきあえる力があるという感じ」という項目は、妄想的観念を測定しているというよりは、対人スキルを測定していると考えの方が自然である。この他にも、自己肯定観念尺度のなかに「私は何でも自信があるという感じ」という項目がある。これも妄想的観念を測定しているというよりは、自尊心を測定していると考えのが自然であると思われる。実際、各下位尺度の構成概念妥当性はFenigstein & Vanable (1992)のパラノイア尺度との相関を測定しているのみである。臨床専門家に評定を求める方法で内容的妥当性を検討しているものの、各下位尺度それぞれの構成概念妥当性についての検討は不十分である。

以上の問題を含んでいるものの、丹野ら(2000)の研究の意義は大きい。妄想観念チェックリストをきっかけとして、一般青年を対象とした妄想的観念に関する研究の進展が望まれる。

1-2-4 社会心理学的アプローチの課題

これらの社会心理学的アプローチの今後の課題の一つは、臨床群での検討である。一般青年を対象とした研究結果が、臨床群にどの程度一般化できるかについての知見が求められている。Smari, Stefansson, & Thorgilsson (1994)は、Fenigstein & Vanable (1992)のパラノイア尺度と自己意識尺度を臨床群に施行した。その結果、パラノイア尺度と私的自己意識との関連がみられたが、パラノイア尺度と公的自己意識との関連はみられなかった。一般大学生を被調査者としたFenigstein & Vanable (1992)の報告では、パラノイア尺度と関連しているのは公的自己意識であった。したがって、Smari et al. (1994)の結果は、Fenigstein & Vanable (1992)の結果とは矛盾している。このように、一般青年を対象とした研究結果が、臨床群に一般化できない場合もある。したがって、一般青年を対象とした研究結果の臨床群への一般化については、慎重な検討が必要とされ

る。

Fenigstein & Vanable (1992)と矛盾した結果を得た点に関して、Smri, Stefansson, & Thorgilsson (1994) は公的自己意識の尺度項目は精神分裂病者には適切ではない可能性を指摘している。公的自己意識尺度は「出かける前には必ず鏡を見る」や「自分の外見には気を配っている」などの項目から構成されている。一般に精神分裂病者はこれらの自己の外見にはあまり注意を向けないことが知られている。よって、Fenigstein et al. (1975) の公的自己意識尺度を使用して精神分裂病の障害を持つ人の公的自己意識を測定しようとするならば、全体的に低い値となることが予測できる。ところが、精神分裂病の障害を持つ人は、一般に他者の評価に敏感であるとの指摘がある(昼田, 1989)。他者の評価に敏感であることは、公的自己意識が高いことを意味する。このように、精神分裂病者の自己意識のあり方は、一般健常人とは異なっている可能性がある。よって、Fenigstein et al. (1975) の項目が精神分裂病者にも適応可能であるかは、慎重に検討する必要があると思われる。

1-3 第2のアプローチ：精神障害者の妄想に対する心理学的アプローチ

これまで、精神分裂病などに見られる妄想や妄想性障害に見られる妄想は、病理の指標として捉えられてきた。そのため、記述精神病理学や精神分析学では妄想研究が盛んに行われており、レビュー論文もいくつか見られる(例えば、阿部・宮本, 1994; 笠原・藤縄, 1978; 関根, 1992など)。ところが、精神病理学者や精神分析学者に比べて、一般心理学者が、精神障害者に見られる妄想に注目する機会は少なかった。この理由として、妄想は、一般健常人の思考過程からは極端にかけ離れており、一般健常人を対象として蓄積してきた一般心理学の理論では、妄想は理解不可能であると考えられていたからであるように思われる。つまり、精神障害者に見られる妄想は、一般健常人による正常な思考の過程とは質的に異なっているとされてきた(Bentall, 1994)。

ところが、1980年代の後半から、精神障害者が持つ妄想に対して、心理学的なアプローチが試みられるようになってきた。この背景には、Maher (1974) やStrauss (1969) の指摘による影響がある。

Strauss (1969) は、精神分裂病者に半構造化面接をおこなった。その結果、全ての患者について妄想・幻覚を「ある・なし」の2段階で評定することは、様々な困難が伴った。これは、半構造化面接によって質問が適切に行われ、応答があり、十分な情報が得られたにもかかわらず、症状が存在したかどうか判然とできなかったケースが多かったからである。そして、妄想を「ある・なし」の2分法で考えるのではなく、連続スペクトラム上の位置で考える事が有益であるとした。

また、Maher (1974) は、妄想は異常な知覚の合理的な解釈であると主張した。妄想を持っている人は、生物学的な変化に基づく知覚の異常があり、過度に生々しい感覚入力状態になっているとした。色彩の生々しさがいつもより増して経験されたり、背景の雑音が優勢になってしまうために聴覚刺激に選択的に注意を向けることが難しくなっている可能性がある」と指摘している。

一般に、精神病理学では、妄想気分を体験した後に妄想が出現することが知られている。妄想気分とは、周囲の全てが新しい意味を帯び、不気味で、何かが起ころうとしているという体験である（小見山, 1993）。妄想気分は妄想の前段階と考えられている。また妄想気分は「世界が破滅する」というような世界没落体験ないし世界破滅感へと発展することがある。Bentall (1994) は、妄想気分を経験することはとても苦痛であることを考慮し、妄想気分を説明するために妄想を作り出す可能性を指摘している。

Maher(1974)によると、妄想とは、自己に起こっている体験を説明しようとする試みであり、出来事を意味づけようとする試みであるとしている。つまり、異常知覚体験を解釈するための合理的な推論の結果、妄想を導き出すとしている。ヤスパース (1913)は妄想を、心理学的に了解不可能な真性妄想と、心理学的に了解可能な妄想的観念とに分けて概念化している。これらの古典的な妄想に対する見解と、Maher(1974)の妄想に対する見解は、明らかに異なっている。

しかし、Maher(1974)の見解には、批判もある。Garety & Freeman (1999) は、知覚の異常が見あたらない場合でも妄想を持つ場合があることを指摘している。また、妄想患者の推論や帰属過程には、一般対照群と比較すると異なっているという報告が多いことを指摘している。また、知覚の異常だけでは、妄想の説明には不十分であるという指摘もある(Lyon, Kaney, & Bentall,

1994). これらの批判があるものの, Maher (1974) と Strauss (1969) の指摘以後, 精神障害者の妄想に対する心理学的アプローチが増加することとなった. この背景には, 一般健常人の正常な観念から, 精神障害者に見られる妄想を, 連続したスペクトラムとして捉える見方が支持されてきたことがある. よって, 正常な信念獲得の立場から心理的プロセスを検討することは, 妄想的観念を理解する上で有益であるとの指摘が多くなされるようになってきた (Bentall, Kaney, & Dewey, 1991; Kaney & Bentall, 1989; Lyon et al., 1994). また, 妄想は理解不可能ではなく, 伝統的心理学的モデルでの理解可能性を示唆する多くのエビデンスが報告されている (Kinderman & Bentall, 1998). これらの結果, 精神障害者に見られる妄想は, 理解不可能ではなく, 一般健常人に見られる様々な認知的バイアスが過度な形となって表れているという見方が提出されるようになってきた.

1-3-1 帰属過程におけるバイアス

自己奉仕バイアス

それでは, 妄想には, どのような認知的バイアスが過度な形となって表れているのであろうか. その一つとして, 帰属過程におけるバイアスをあげることができる. 1980年代後半から, イギリスのリバプール大学のBentallらを中心としたグループは, 原因帰属理論を用いて, 精神障害者の妄想を扱った. その結果, 妄想を持つ精神障害者には, ネガティブな事象は外的に帰属し, ポジティブな事象は内的に帰属する自己奉仕バイアス (self-serving bias; Taylor, 1983) が存在することを一貫して示した (Candido & Romney, 1990; Kaney & Bentall, 1989; Kaney & Bentall, 1992; Kinderman & Bentall, 1997b).

妄想を持つ精神障害者の原因帰属過程を検討するために, 帰属スタイル質問紙 (Attributional Style Questionnaire: 以下ASQと略す) が, 多くの研究において使用されている (Bentall & Kany, 1989; Candido & Romney, 1990; Kaney & Bentall, 1989). ASQは, もともと抑うつ傾向の人の認知過程を調べるために開発されたものである (Peterson, Semmel, Von Baeyer, Abramson, Metalsky, & Seligman, 1982). 6個の肯定的な仮想場面と, 6個の否定的な仮想場面から構成されている. 肯定的な仮想場面の例としては, 「あなたは給料が上がった」

などがある。否定的な仮想場面の例としては、「あなたはデートに行ったが、うまくいかなかった」などである。回答者は、そうなった仮想場面の理由を1つ記述するように求められる。そして、その記述について、3つの次元から7段階で評定するように求める。3つの次元とは、①内的か（自分の内的な要因のせいかわ、もしくは状況や他者などの外的な要因のせいかわのどちらかに帰属される程度）②安定的か（将来もその理由が起こるであろう程度）③全般的か（原因が質問紙に記述されている以外の出来事にも影響を及ぼす程度）の3つである。肯定的な仮想場面と否定的な仮想場面のそれぞれについて、3つの次元の得点が算出される。つまり、肯定的内的得点、肯定的安定的得点、肯定的全般的得点、否定的内的得点、否定的安定的得点、否定的全般的得点の6下位尺度が構成される。ASQを用いた研究では、抑うつ的な人は、否定的な出来事を過度に内的で全般的で安定的とみなしやすいたことが示されている。一方、被害妄想を持つ人は抑うつ患者や一般対照群に比べて、否定的な出来事を過度に外的で全般的で安定的とみなしやすく、肯定的な出来事を過度に内的で全般的で安定的とみなしやすいたことが示されている(Candido & Romney, 1990; Kaney & Bentall, 1989; Lyon et al., 1994).

妄想患者における自己奉仕バイアスの存在は、随伴性判断課題の実験結果からも示されている。Kaney & Bentall (1992) は、コンピューターによって提示されるゲームにおいて、自己の勝ち負けの結果がどの程度自分で統制可能であったか、被験者に見積もるように求めた。ゲームの勝ち負けの比率はあらかじめ実験者によってプログラムされていた。その結果、一般対照群は、勝ち条件の時は自己の統制を現実より不当に高く見積もり、負け条件の時は自己の統制を現実より不当に低く見積もっていた。この自己奉仕バイアスは、妄想患者において、より顕著に認められた。

以上のように、妄想患者は抑うつ患者や一般対照群に比べて、ネガティブな事象は外的に帰属し、ポジティブな事象は内的に帰属する自己奉仕バイアスが一貫してみられている。これらの自己奉仕バイアスは、一般的な人において広く確認されており (Musson & Alloy, 1988), 肯定的な自己概念を保つためであるとされている (Ross & Nisbett, 1991; Tennen & Herzberger, 1987)。よって、肯定的な自己概念を保持するために一般の人に見られる自己奉仕バイアスが、過度の

形となったものが被害妄想なのではないかとの指摘がある (Bentall, 1994) .

ASQの問題点

しかし、ASQには問題点も指摘されている。その一つは、ASQの信頼性が低いことである。特に内的次元における信頼性の低さが報告されている。そのため、研究者によっては、肯定的事象と否定的事象を両方使用して、合成変数として使用している研究者もいる。加えて、ASQでは内的-外的領域を、主として自分が原因で起こったか、それとも他者の原因や偶然によって起こったかの1次元で測定していた。しかし、このような原因帰属は困難であるという指摘がある

(White, 1991) . Kaney & Bentall (1989) は、Levenson(1974)の「内的・偶然・強力な他者」の3つの次元で原因帰属を調べた結果、妄想患者は対照群に比べて、偶然の次元よりも、強力な他者の次元に原因帰属する傾向があることを見出している。つまり、妄想患者が外的な原因帰属を行う際には、外的次元の中でも、偶然要因よりも他者の要因に帰属させやすいことが示唆される。ASQで妄想患者の原因帰属を検討するならば、これらの妄想患者と一般健常人の違いは判別できないことになり、問題となる。

内的-外的（他者および状況）帰属質問紙

そこで、これらのASQにおける問題点を解決するために、Kinderman & Bentall (1996a) は、内的-外的（他者および状況）帰属質問紙 (The Internal, Personal and Situational Attributions Questionnaire: 以下IPSAQと略)を作成した。IPSAQは、帰属スタイルを測定するために広く用いられているASQを元にしてしている。特に、妄想患者の帰属スタイルを調べることを目的として開発された。構成内容としては、16項目のpositiveな状況と、16項目のnegativeな状況が想定されている。そして、それぞれの状況について、相手のとった行動のもっともらしい理由を一つ記述することが求められる。記述された回答は、内的か

(internal: 回答者に関連した理由か) , 外的他者か (personal-external: 登場人物以外に関連した理由か) , もしくは外的状況か (situational-external: その場の状況や偶然に関連した理由か) のいずれにあてはまるかを、被験者に求める。そして、肯定的な状況16個のうち、内的に分類した数を肯定的内的得点とした。同様に、否定的内的得点, 肯定的外的他者得点, 否定的外的他者得点, 肯定的外的状況得点, 否定的外的状況得点が算出される。IPSAQではWhite (1991)

の批判をうけ、ASQが1次元で測定していた内的次元を、内的、外的他者、外的状況の3つの次元に細分して測定している。この点が、IPSAQの大きな特徴となっている。

Kinderman & Bentall (1997b) は、IPSAQを妄想患者群と抑うつ患者群および一般対照群に施行した。その結果、妄想患者群と一般対照群は、否定的な出来事に比べて肯定的な出来事を内的に帰属する、自己奉仕バイアスが見られた。また、妄想患者群は抑うつ患者群や一般対照群に比べて、否定的な出来事を外的他者に帰属していた。加えて、妄想患者群は、否定的出来事を肯定的な出来事よりも多く、外的他者に帰属していた。つまり、IPSAQを使用することによって、妄想患者は否定的な出来事を外的に帰属する際、偶然や状況などの外的状況に帰属するよりも、当事者である相手に帰属しやすいことを示した。

妄想患者が抑うつ患者と同様の帰属をする場合

これらのように、妄想患者は、肯定的な出来事を内的に帰属し否定的な出来事を外的に帰属するという、自己奉仕バイアスが一貫して示されている。しかし、これらの自己奉仕バイアスは、明白な顕在的測定法を使用したときにのみあてはまるという指摘がある。つまり、一見して帰属過程を調べていると分からない場合には、妄想患者は抑うつ患者と類似した帰属を行うとの指摘がある(Lyon et al., 1994)。

Kinderman, Kaney, Morley & Bentall (1992) は、Kaney & Bentall (1989) のデータに新たなデータを加えて、結果を再分析した。ASQによって得られた原因帰属の回答文を、独立の評定者がどの程度内的次元にあてはまるか、評定した。そして、評定者の得点と被験者の自己報告の得点を比較した。その結果、一般対照群では、評定者の内的次元得点と自己報告の内的次元得点は一致する傾向にあった。ところが、妄想患者群では、評定者の内的次元得点と自己報告の内的次元得点は一致しない傾向にあった。そして、妄想患者が外的に原因帰属した回答文の多くは、独立の評定者に内的であると評定された。つまり、妄想患者が記述した回答文の多くは、客観的には自己の内的に帰属される文章であったにもかかわらず、妄想患者は主観的には外的に帰属していた。

それでは、意識的な原因帰属ではない場合にも、被害妄想患者に自己奉仕バイアスが見られるのであろうか。Lyon et al. (1994) は、実用推論課題 (The

Pragmatic Inference Task) を使用して、被害妄想患者と抑うつ患者と一般対照群の帰属過程を検討した。実用推論課題は、Winters & Neale (1985) によって作成された課題である。意識的なバイアス反応を防ぐために、被験者には記憶課題と教示されるものの、実際は帰属過程を調べる目的で使用する。被験者には記憶課題と教示されるため、原因帰属を測定していることは分からないとされている。実用推論課題は12の仮想場面から構成され、6つは肯定的な場面であり、残りの6つは否定的な場面である。録音テープで仮想場面が読み上げられた後に、4つの質問がある。そのうちの2問は仮想場面についての記憶を尋ねるものであり、1問は帰属とは関係ない被験者の推測を尋ねるものである。残りの1問が原因帰属を測定する質問であり、被験者に仮想場面での結果の主となる理由を推測するように求める。そして、2つの内的もしくは外的な理由から一つを強制選択させる。Loyon et al. (1994) は、実用推論課題とASQ（正確にはASQの平行版）を妄想患者群と抑うつ患者群と一般対照群に施行した。その結果、ASQでの帰属のパターンは、肯定的な事象を内的に、否定的な事象を外的に帰属していた。これに対し、実用推論課題での帰属のパターンは、肯定的な事象を外的に、否定的な事象を内的に帰属しており、抑うつ患者と同じパターンとなった。

以上のように、妄想患者は明白な責任判断を求められた時には防衛的な帰属を行う一方、潜在的な責任判断の時にはそのような防衛的帰属が働かず、抑うつ患者と同様の帰属を行うことが示されている。一般的に精神障害者においては自尊心が低いけれども、妄想患者は自尊心が高いという報告がある (Havner & Izard, 1962)。一方では、妄想患者は潜在的には否定的な自己概念を持っており、顕在的には否定しているという仮説を支持する研究もある。これは、潜在的な否定的自己表象のもとで、肯定的な自己を保とうとする試みと解釈できる (Bentall, 1994; Kinderman & Bentall, 1998)。これらの帰属スタイルの結果より、妄想は根底にある自尊心の低さから患者を保護する働きを持っていると、Bentall, Kinderman & Kaney (1994) は示唆している。

自己不一致理論による妄想の理解

潜在的には、妄想患者は抑うつ患者と同様な原因帰属を行っており、低い自尊心から肯定的な自己を保つために、否定的出来事を外的に帰属する自己奉仕バイアスがあるとしている。これらの結果から、Bentallらは、Higgins(1987)の自己

不一致仮説 (self-discrepancy theory) を被害妄想患者の妄想の説明に適用している(Bentall, 1994; Kinderman & Bentall, 1996b).

自己不一致仮説は、自己領域の様々な不一致が、様々な感情状態に関連しているという仮説である(Higgins, 1987)。彼は、自己の信念として理想自己 (ideal self)、現実自己 (actual self)、あるべき自己 (ought self) の基本の3つの自己を想定した。そして、現実自己と理想自己との不一致は抑うつに関係しており、現実自己と義務自己との不一致は、不安や心配や動揺などに関係しているとしている。

自己信念の測定方法は、自己質問紙 (The Selves Questionnaire)を用いる。自己質問紙は、自由記述による個性記述的尺度であり、被験者に、理想自己・現実自己・あるべき自己のそれぞれについて、10個の特性記述を求める。そして、それぞれの自己信念間において、内容がほぼ一致しているもの、逆の内容のもの等を評定し、数量化する。

Kinderman & Bentall (1996b) は、自己質問紙を改良した個人素質質問紙 (The Personal Qualities Questionnaire: PQQ) を使用して、被害妄想患者の自己不一致を検討した。個人素質質問紙は、自己質問紙に他者からの視点を導入する際、被験者の親がとらえていると思われる自己信念の特性を記述するように、被験者に求めるよう変更が加えられている。個人素質質問紙を使用した結果、一般対照群と被害妄想患者群は、抑うつ患者群に比べて、現実自己と理想自己との一致度が高かった。また、一般対照群と被害妄想患者群は、現実自己と義務自己との一致度も、抑うつ患者群にくらべて高かった。ところが、親から見た現実自己の領域では、被害妄想患者群と一般対照群では違いがあった。被害妄想患者群は、親から見た現実自己の領域で、否定的な単語を有意に多く使用していた。一方、一般対照群では肯定的な単語を有意に多く使用していた。加えて、現実自己と親から見た現実自己との間における一致のあり方に、被害妄想患者群と抑うつ患者群で違いがあった。被害妄想患者群は、現実自己が肯定的であったために、現実自己と親から見た現実自己との間に不一致が起こっていた。一方、抑うつ患者群では、現実自己が否定的であったために、現実自己と親から見た現実自己との間に不一致が起こっていた(Kinderman & Bentall, 1996b)。このように、妄想患者群と抑うつ患者群および一般健常群との間には、自己不一致のあり方に異

なったパターンがみられている。

また、自己不一致と原因帰属の関連を検討したものもある。Kinderman & Bentall (2000) は、Higgins (1987) の自己質問紙の改訂版 (Selves Questionnaire modified) とIPSAQを一般大学生に施行した。その結果、否定的な出来事を外的他者に帰属を行う人は、現実自己-他者からみた自己との間の不一致が増加していることを示した。

ここで、原因帰属と自己不一致のあり方を整理する。失敗などの否定的出来事を自己に帰属するならば、現実自己は否定的になる。よって、現実自己と理想自己の不一致が活性化される。これとは反対に、否定的な出来事を他者のせいであるとするとするならば、過度に現実自己が否定的になることはない。したがって、現実自己と理想自己の不一致が活性化することはない。

ところが、否定的な出来事の原因が他者にあるとみなすので、現実自己と他者から見た現実自己との間の不一致は大きくなる。自分に起こった否定的な出来事について他者を非難するならば、その他者が自分を非難して、自己を否定的にとらえたと考えると予想できる(Kinderman & Bentall, 2000)。

一方、否定的な出来事を外的状況に帰属するならば、否定的な出来事の原因を誰のせいにもしないということで、比較的無害である。したがって、否定的な出来事を外的状況に帰属する場合は、現実自己と理想自己との不一致と、現実自己と他者から見た現実自己との不一致が共に減少する (Kinderman & Bentall, 1998) 。

以上より、Bentall et al. (1994)は、次の点を示唆している。それは、被害妄想の患者は、自己不一致が起こりそうな脅威的な出来事やネガティブな刺激に直面する時、そのような否定的な出来事を外的他者な要因に帰属させることによって自己不一致を最小化しようと試みる結果、被害念慮が生じると考えられる点である。つまり、妄想患者における被害念慮は、他者が自己を否定的に見ていると認知するという犠牲を払うことによって、現実自己と理想自己の不一致を積極的に軽減しようとしている妄想患者の試みであると考えられる。これに対し、一般健康人は否定的な出来事を外的に帰属する際、当事者の相手ではなく外的状況な要因に帰属させる。よって、誰かに出来事の原因を求めるわけではないので、誰かに害が及ぶことはなく、被害念慮が高まることもない。上述した被害妄想におけ

る自己不一致と帰属スタイルのモデルは、精神分裂病における自尊心の研究の矛盾を説明できるだけでなく、妄想患者における帰属スタイルのバイアスを説明できるとしている(Bentall et al., 1994).

1-3-2 確率推論におけるバイアス

1-3-1で述べた、潜在的な自尊心の低さからくる自己不一致を防衛するための帰属過程におけるバイアスの他に、確率判断のバイアスを指摘する研究がある。それらによると、妄想患者は、確率判断の課題において健常群よりもより少ない情報で判断を下しやすいという、「性急な結論づけ傾向 (jump to conclusion)」があるとされている (Huq, Garety, & Hemsley, 1988 ; Garety, Hemsley, & Wessely, 1991) . これらの研究においては、ベイズモデルにおける確率推論アプローチの有効性を指摘している (Hemsley & Garety, 1986) .

妄想患者における確率判断のバイアスを検討している多くの研究では、Phillips & Edwards (1966) の典型的な実験パラダイムを使用している。典型的な実験では、被験者は2組のA, B, とラベルづけされた壺を見せられる。壺の中には2色のビーズが入っている。例えば、85個の緑のビーズと15個の赤のビーズあわせて100個が入っており、もう一つの壺は逆の割合で入っている。被験者は割合について知らされた後、壺は目の前から移動されて、被験者からは見えなくなる。そして、2つの壺のうちどちらかの壺がランダムに選択されると被験者に告げられる。よって、ベイズ理論における事前確率は50%である。ランダムに選択された壺からビーズが取り出され、被験者に見せられる。その後ビーズは選択された壺に戻される。このやりとりが繰り返される。課題は、実験者がAかBのどちらの壺からビーズを取り出しているか、当てることである。

ところが実際には、被験者に見せられるビーズの色のパターンは、あらかじめ実験者によって決められている。典型的な実験では「結論確定」条件と「確率推測」条件の2つがある。「結論確定」条件では、ビーズを取り出す回数は自由であり、被験者が自分の答えに確信が持てたときにビーズの取り出しを終了する。よって、ビーズを取り出す回数が、判断材料として結論を確定するためにどれだけ情報を集めるかの指標となる。「確率推定」条件では、ビーズを実験者が取り

出す回数はおのづから決まっている。被験者はおのづからの段階で、どの程度自分の答えに自信があるかたずねられる。なお、ベイズ理論によってこれらの課題の最適解は算出される。

上記のアプローチを用いて、妄想患者は「結論確定」条件のビーズの取り出し回数が、一般対照群や臨床対照群よりも有意に少ないことを見出し、妄想患者における性急な結論づけ傾向を指摘している (Huq, Garety, & Hemsley, 1988 ; Garety, Hemsley, & Wessely, 1991) 。

なお、Huq et al. (1988)では、妄想患者は「結論確定」条件において平均2.22回ビーズを取り出した時に結論を出している。これに対し、一般対照群は3.60回であり、臨床対照群は4.58回であった。およそ2回ビーズを取り出しただけで結論を出すのは性急すぎるように考えられよう。ところが、ベイズ理論によって確率を計算すると、ビーズを2回取り出して2個とも緑だった時にAの壺から取り出されている確率は、97%となる。よって、ベイズ理論によって算出される最適解からみると、妄想患者は、「合理的」な判断をしており、むしろ一般対照群は過度に保守的すぎる判断をしているといえる。これらの結果から妄想患者は一般対照群よりも推論がよいと結論するのではなく、一般対照群に存在する保守的なバイアスが妄想患者では弱まっていると考えるべきであろう (Huq et al., 1988) 。

しかし、妄想患者における「性急な結論づけ傾向」が見いだせなかった研究もあり (Young & Bentall, 1997) , 今後さらなる検討が求められる。

1-3-3 情報処理過程におけるバイアス

帰属過程や確率推論におけるバイアスの他に、情報処理におけるバイアスを指摘する研究もある。それらによると、被害妄想患者は脅威に関連した刺激に、選択的に注意が作用しているとの報告が多い。

Bentall & Kaney(1989)は、被害妄想患者・抑うつ患者および一般人に、ストロープ課題を行い、被害妄想患者における情報処理過程を検討している。ストロープ課題は、様々な単語が色つきのインクで印刷されており、被験者は単語の内容には関係なく、単語が印刷されているインクの色をできるだけ早く答えるように教示される。つまり、印刷されている単語の意味や内容は無視して、印刷され

ている単語の色にのみ集中する事が要求される。特定の単語や特定の領域に関連する単語に注意のバイアスがあれば、インクの色を答える際に単語の内容による干渉が起こる。干渉の程度の大きさによって、インクの色を答えるスピードが遅れると考えられている。ストループ課題は、前意識もしくは自動的な認知過程を測定すると考えられており、意識的にコントロールする事は不可能なレベルの、潜在的な注意のバイアスを測定するために広く使用されている。

Bentall & Kaney (1989) は、脅威に関連している単語、抑うつに関連している単語、中立な単語の3種類をストループ課題として使用した。その結果、被害妄想を持つ患者は一般対照群に比べて、脅威に関連している単語の時に、色彩を答えるのが遅れていた。つまり、被害妄想を持つ患者は、脅威に関連している被害的な内容の単語に選択的に注意が作用していることを示した。

Kinderman (1994) は、自己関連づけ効果 (Rogers, Kuiper, & Kirker, 1977) と自己概念との関係を検討している。自己関連づけ効果とは、記銘語に対して自己に関連づける判断処理を行うと、意味的な判断処理や音韻的な判断処理を行った場合よりも、記憶が向上される現象である。Kinderman (1994) は、被害妄想患者と抑うつ患者と一般対照群に、自尊心の高さを表すような肯定的な特性および、自尊心の低さを表すような否定的な特性の形容詞について、自己にどの程度あてはまるか評定を求めた。その後、ストループ課題を行った。その結果、被害妄想患者は、肯定的な特性の形容詞が自己に多くあてはまると評定した。これは抑うつ患者群よりも多く、一般対照群と同程度の割合であった。加えて、否定的な特性の形容詞も自己に多くあてはまると評定した。これは抑うつ患者群と同程度の割合であった。評定後のストループ課題では、肯定的な特性の時に、インクの色を答える時間が抑うつ患者群と一般対照群よりも有意に遅かった。否定的な特性の時は、インクの色を答える時間は被害妄想患者群と抑うつ患者群は一般対照群よりも有意に時間が長くかかっていたが、被害妄想患者群と抑うつ患者群に有意な差は見られなかった。

また妄想を持つ患者は、脅威的な記憶が活性化されやすいことが示されている (Bentall, Kaney, & Bowen-Jones, 1995; Kaney, Wolfenden, Dewey, & Bental, 1992) 。 Bentall, Kaney, & Bowen-Jones (1995) は、妄想患者と抑うつ患者と一般対照群に、単語のリストについて再生を求める課題を行った。教

示された単語のリストは、脅威に関連した単語、抑うつに関連した単語、中性的な単語の3種類から構成されていた。その結果、抑うつ患者は抑うつに関連した語にのみ想起におけるバイアスがあったのに対し、被害妄想の患者は、脅威に関連した語と抑うつに関連した単語両方に、想起におけるバイアスがあった。また、Kaney, Wolfenden, Dewey, & Bentall (1992) は、被害妄想患者と抑うつ患者と一般対照群に、脅威的な主題を含む物語の記憶課題を行った。その結果、被害妄想の患者は、全般的に思い出した情報量は少ないにもかかわらず、脅威に関連した内容に関しては、抑うつ患者や一般人に比べて多く思い出していた。

以上の結果を総合すると、被害妄想患者においては、抑うつ患者にみられるような情報処理におけるバイアスの存在が示唆される。抑うつ患者が否定的な素材に対して選択的に注意が作用するバイアスがあるのに対して、被害妄想患者は、個人の脅威に関連した素材に対して選択的に注意が作用するバイアスがあるといえる(Bentall et al., 1994)。

以上に述べたように、妄想患者は脅威に関連した刺激に選択的に注意が作用しているという指摘は、精神分裂病における妄想の多くが被害的な内容であることと、関連があると思われる。

1-3-4 心の理論における障害

帰属過程におけるバイアス、確率推論におけるバイアス、情報処理過程におけるバイアスの他に、心の理論における障害を指摘する研究がある。精神分裂病では、広範な認知障害および情報処理における障害が存在することはよく知られている。それらの情報処理能力の障害があるために、対人関係を営む際に、他者の心的プロセスを理解することに困難を伴うことが予想される。他者の信念や欲求について理解することや、直接的な言葉の裏にある他者の真の意図に気づくことは、重要な認知的能力であり、対人関係をスムーズに営むためにも必要な能力とされる。ところが、精神分裂病患者においては、これらの他者の意図を理解することに困難が伴うことは以前から注目されていた。また、被害妄想や恋愛妄想などの様々な妄想は、他者の行動や意図の誤った解釈によって特徴づけられる。よって、これらの症状は、他者の心的状態を推論する能力の欠損の結果であると主張

する研究者もいる(Corcoran, Mercer, & Frith, 1995). 他者の心的状態から行動を説明する能力は, 「心の理論 (theory of mind) 」を持つという観点から発達心理学の領域で精力的に検討されている. 近年は, 心の理論を精神分裂病者における被害妄想や関係妄想の理解に適用しようという動きがある.

ここで, 発達心理学領域における心の理論研究を概観する. 心の理論に関する研究は, Premack & Woodruff (1978) のチンパンジーによる検討にさかのぼる. 彼らは, チンパンジーに心を読む課題を行わせた. 課題の一つとして, チンパンジーは, 人が檻の中で手の届かないところにあるバナナを取ろうとして飛び跳ねているビデオを見せられた. ビデオは行為が完了する前に停止され, チンパンジーは登場人物の問題解決を描いた絵を選択するように求められた. その結果, チンパンジーは登場人物がイスに登る絵を選択することができた. よって彼らは, 欲求や目的のように意図が行為者に帰せられるレベルでは, チンパンジーは心を読むことができるとした.

その後, 人において, 他者の欲求や意図を正確に予測できる能力はどのように獲得されるのか, 発達心理学の領域で精力的に調べられるようになった. 特に, 自閉性障害の子どもが, 健常児やダウン症などの精神遅滞児に比べて, 誤った信念課題の通過に困難を示すことが示されて以降 (Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985), 自閉性障害における心の理論についての研究が爆発的に増加した.

代表的な誤った信念課題に, サリー・アン課題がある (Wimmer & Perner, 1983). この課題は, サリーがおはじきを一つの場所に置き, サリーが退出した後で, アンがそれを別の場所に置くのを見るというものである. 被験者は, おはじきが元の場所から動かされた時サリーはすでに退出していて, おはじきが動かされたことを知らないのだから, サリーはまだそれが元の場所にあるに違いないと信じていると認めなければならない. 「サリーは, どこにおはじきを探すでしょうか?」という質問に対して, 正常児では3歳から4歳になるとほとんどが正答することが示された (Wimmer & Perner, 1983). ところが, 自閉性障害の子どもは, 健常児やダウン症児に比べて通過率の低いことが示されている (Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985; Leekham & Perner, 1991).

さて, 発達心理学領域における心の理論研究が爆発的に増加するに伴い, これ

らの影響を受けて精神障害者における心の理論研究が、1990年代になって盛んになされるようになってきた (Corcoran, Cahill, & Frith, 1997; Corcoran, Mercer, & Frith, 1995; Doody, Goetz, Johnstone, Frith, & Cunningham Owens, 1998; Sarfati, Hardy-Bayle, Besche, & Widlocher, 1997) .

Corcoran et al. (1995)は、間接的な会話 (indirect speech) の理解を調べる課題を使用している。彼らは、ヒント課題 (the hinting task) と呼んでいる。使用されたヒント課題の例を以下に挙げる。

「ポールは面接に行かないといけなかったが、遅れそうであった。彼の靴は洗ってあったが、彼は妻に「この青いシャツを着たいのだけれど、とっでもしわくちゃだ」と彼の妻のジェーンに言った。

質問：ポールがこの事を言ったとき、彼は本当はどういう意味で言ったか？

追加情報：ポールは続けて言った。「アイロンのかごに入っているよ」

質問：ポールはジェーンに何をしたいのか？

上の例のように、全ての問題文の最後には、必ず登場人物のあからさまなセリフが書かれている。最初の質問で、被験者は、直接的なセリフの背後にある、登場人物の本当の意図を推論するように求められる。最初の質問に適切に答えられなかった場合、追加情報がヒントとして提示される。最初の質問で正解すると2点、追加情報で正解すると1点、追加情報でも不正解の場合は0点が与えられる。

その結果、妄想型精神分裂病患者（第3者の幻聴を症状として持っている者も含んでいる）は、一般健常群や抑うつ対照群に比べて、有意にヒント課題での成績が悪かった。つまり、妄想型精神分裂病患者は健常者や抑うつ患者よりも、間接的な会話の意図をうまく理解できないことを示した。

また、Corcoran et al. (1997) は、1コママンガのジョークを用いて、精神分裂病患者における他者の心的状態を推論する能力を検討している。彼らは、課題として2種類の1コママンガのジョークを使用した。一つは、ドタバタ劇風で身体的物理的に理解できる種類の1コママンガであった。もう片方のものは、主人公の心的状態を推論する必要があるような1コママンガであった。前者の例としては、パラシュートを背負った人が、何もつけていないパンダと一緒に落下してい

る絵であった。後者の例としては、蟹を釣り上げた主人公と、同時にもう一人の登場人物が逃げ出している絵であり、主人公の後ろには大きな鮫が口を開けているが、主人公はそれに気づいていない絵であった。その結果、精神分裂病の中で妄想を持っている患者は、非臨床群よりも、心的状態のジョークの成績が有意に低い事を示した。

また、Doody, Goetz, Johnstone, Frith, & Cunningham Owens (1998)は、サリー・アン課題 (Wimmer & Perner, 1983; Baron-Cohen, Leslie & Frith, 1985) や、アイスクリーム・バン課題 (Perner & Wimmer, 1985; Baron-Cohen, 1989) などの、心の理論についての誤った信念課題を、精神分裂病群に対して行っている。その結果、精神分裂病の患者は、心の理論の獲得において、二次的信念の課題に困難を示すことを指摘している。

ここで、これらの精神分裂病患者における心の理論研究における問題点をあげる。それは、研究方法として症状別アプローチを取っているものが少ないことである。例えば、Doody et al. (1998)では、対象者の群分けにおいて、精神分裂病群、感情障害群、合併群、精神遅滞群、対照群の5群を設定している。よって、妄想患者独自の結果については明らかにはなっていない。今後は、対象者の群分けを研究間で一致させると共に、症状別アプローチを採用することが望ましいと思われる。

またこれらの他にも、若林 (1997) は精神分裂病の症状について、心の理論の観点から理論的に検討している。彼によると妄想は、他者の信念や意図を読む能力が不適切に働いた結果として説明できるとしている。また、メタ表象化のメカニズムが機能しないという観点から、妄想の生起のプロセスを理解できるとしている。

若林 (1997) は、後者の例として「Yは「Xは理屈っぽい」と考えている」という命題 (叙述) を挙げている。この叙述の内容が行為者である他者 (Y) から切り離されてしまうと、「Xは理屈っぽい」という独立した表象が、Xの外部から明らかに発せられたもののように浮かんでくるとしている。そして、このような‘突発性’の表象が、異常体験の正体ではないかとしている。これらの突発性の表象について実証的に検討しているものは見あたらないため、今後さらなる検討が期待される。

1-4 全体的目的

前節まで、一般青年の妄想的観念を対象として社会心理学的アプローチによる研究や、精神障害者の妄想を対象とした心理学的アプローチによる研究を概観してきた。1-4では、先行研究をふまえた上で、一般青年の被害妄想的思考と精神障害者の妄想との連続性の問題について述べる。最後に、本論文における問題意識を述べ、本論文における全体的な目的を示す。

1-4-1 一般青年における妄想的観念と精神障害者の妄想との連続性

1-2において、一般青年の妄想的観念を対象とした社会心理学的アプローチについて概観した。また、1-3において、精神障害者の妄想を対象とした心理学的アプローチについて概観した。それでは、これらの一般青年における妄想的観念と、精神障害者における妄想は、質的に全く異なるのであろうか。それとも、これらの間には、ある程度の連続性が認められるのであろうか。

精神障害者における妄想の定義

一般に、妄想は以下のように定義される。①その考えに並々ならぬ確信をいただいていること（並々ならぬ主観的確信）②経験や人の説得によっても訂正されないこと（訂正不能性）③その内容が非現実的で不可能であること（内容の不可能性）の3点である。そして、精神障害者に見られる妄想は健常者との非連続性が強調されてきた。たとえばJaspers (1913) は、信念の形態を、正常の信念、支配観念、妄想様観念、一次妄想の4つに分類した。そして、正常の信念と支配観念は、正常な精神状態で生じるものとした。一般に妄想というのは、妄想様観念と一次妄想をさす。妄想的観念は、その発生が心理学的に了解可能なものとされる。これに対し、一次妄想は、他の精神病理的症状から導き出せない「了解不能」なものとされており、精神分裂病に特異的なものとされている（阿部・宮本, 1994）。すなわち、一次的病的体験が源となっているような妄想、あるいはそれを説明するに人格変化を前提とする必要があるような妄想をさす。よって、精神分裂病における一次妄想は、心理学的に了解不可能であるとされてきた。

一般の人が妄想を発生しやすい条件

前述したように、幻視や妄想などの幻覚は、精神障害者のみにおこるものであり、一般の人には発生しないという考えが通説である。ところが、一般の人でも、幻視や妄想を発達させやすい条件が知られている。一つは、睡眠不足を伴う限界状況での心身疲労である。もう一つは、周囲とのコミュニケーションが妨げられる状態である。

断食を伴う武者修行や雪山での遭難時など、生命生存の極限状態においては、幻視を伴う幻覚状態になりやすい事がよく知られている。荻野（1968）は、雪山遭難時に一般青年が体験した幻覚を報告している。そして、幻覚発生に關与する第1の要因として、睡眠不足、飢餓、心身の疲労などの身体的条件をあげている。

また、笠原・藤縄（1978）は、正常人の短期の妄想形成の事例を紹介している。大学の教員であり、不眠不休で学園紛争の団交を積極的に行った結果、地下鉄の中で過激派学生に追跡されているという妄想が発生し、2日の休眠のみで回復したケースである。笠原・藤縄（1978）においても、妄想形成の背景要因として、睡眠不足を伴う心身疲労があげられている。これらのように、極度の睡眠不足を伴い、限界状況における心身疲労状態では、一般的な人においても、短期的な幻覚や妄想を発生しやすい。ただしごく一過的であり、完全に回復するとされている（笠原・藤縄，1978）。

また、周囲の人とコミュニケーションがとれない状態では、妄想が発達しやすい事も知られている。Zimbardo, Andersen, & Kabat (1981) は、男子大学生を対象にして、聴覚障害を催眠によって引き起こす実験を行った。その結果、催眠によって聴覚障害を引き起こされていると教示がなかった群は、パラノイア的になっていることを示した。催眠によって自分が聴力障害になったことには気がつかず、自分が混乱している理由を説明しようとして、妄想的な解釈を取り入れていたという。また、難聴者に被害妄想が生じやすいことはよく知られている。この他にも、知覚遮断や拘禁、留学などの周囲とコミュニケーションがうまく取れない状態では、妄想を発達させやすいことが知られている。上記のように、一般健常人においても、過度に極端なストレス状態に陥った場合には、多くの者が幻覚妄想状態になりやすいことが知られている。

病状の進行に伴って変動する精神障害者の妄想

一方、精神障害者における妄想についても、確信度や内容の広がりや病状の進行に伴って変動することは、よく知られている（Brett-Jones, Garaty, & Hemsley, 1987；笠原・藤縄, 1978；高橋, 1984；1987）。臨床現場においては、背景化していた妄想の内容がストレスの増加をきっかけとして拡大したり、強固だった妄想が精神障害の回復期に「どうしてあんなことを考えたのだろう」と、自ら疑問に思ったり（昼田, 1989）することなどが頻繁に観察される。加えて、高橋（1984；1987）は、中年後期発症の妄想病態を経過型により次の3タイプに分類している。Aタイプは、病相期の終了とともに、その時期が終われば妄想の訂正がなされるタイプである。Bタイプは、妄想が背景化して一見すると病前と変わらないが、妄想の訂正がみられないタイプである。Cタイプは、妄想が数年程度の経過では背景化しないタイプである。これらのように、精神障害者の妄想においては、病状の進行によって変動する場合も多くみられる。

境界性人格障害にみられる一過性の妄想的観念

また、境界性人格障害の患者には、一過性に妄想様観念などの精神病様体験がストレス下において見られる事が指摘されている（APA, 1994； Gunderson, 1984）。境界性人格障害とは、DSM-IVの第2軸の人格障害の一つで、極めて不安定な対人関係、行動、感情、自己イメージを示すパーソナリティー傾向をさす（大野, 1993）。DSM-IV（1994）では、次の9つの診断基準のうち、5つを満たすことが必要である。(1)現実に、または想像の中で見捨てられることを避けようとする気違いじみた努力。(2)理想化とこきおろしとの両極端を揺れ動くことによって特徴づけられる不安定で激しい対人関係様式。(3)同一性障害：著名で持続的な不安定な自己像または自己観。(4)自己を傷つける可能性のある衝動性で、少なくとも2つの領域にわたるもの、たとえば浪費、性行為、物質乱用、無謀な運転、無茶食い。(5)自殺の行動、そぶり、脅し、または自傷行為の繰り返し。(6)顕著な気分反応性による感情不安定性（例えば、通常は2、3時間持続し、2、3日以上持続することはまれな、エピソード的におこる強い不快気分、いらいら、または不安）。(7)慢性的な空虚感。(8)不適切で激しい怒り、または怒りの制御の困難（例えば、しばしばかんしゃくを起こす、いつも怒っている、取っ組み合いの喧嘩を繰り返す）。(9)一過性のストレス関連性の妄想様観念または重

篤な解離症状.

以上あげた9つある境界性人格障害の診断基準のうち一つに「一過性のストレス関連性の妄想様観念または重篤な解離性症状」が含まれている。これらのエピソードは、現実のあるいは想像上の見捨てられる事への反応としてしばしば起こり、症状は一過性で、数分から数時間持続する。世話をしてくれる人が現実には様々なことをしてくれるか、またはそうだと思ったときに、これらの症状は完解するとされている (APA, 1994) .

またGunderson (1984) は、境界性人格障害患者に見られる軽度の精神病体験として、感情障害、解離性障害、知覚障害、妄想的信念、自我境界の混乱の5つを指摘している。これらの5つの精神病体験の4番目に妄想的信念をあげている。境界性人格障害の患者は、治療者や治療施設などの一次対象を必要だと感じており、それらの一次対象がなければ、耐え難い孤独を感じてしまう。境界性人格障害患者が前述の精神病体験をもつのは、治療者や治療施設などの一次対象の喪失に苦しんでいる場合か、一次対象が患者を抱え込みすぎたり、あまりにも侵襲的と感じられる場合であるとしている。そして、これらの妄想的観念は可逆性のものであり、一次対象の喪失に苦しんでいる場合によって精神病体験を起こしている場合には、一次対象を引き続き利用できるという具体的な再保証によって、減少させる事ができるとしている (Gunderson, 1984) .

これらをまとめると、境界性人格障害では、治療者や治療スタッフなどとの治療関係の影響を受けて一過性の妄想的観念を持つ場合がある。そして、適切な治療関係への介入を行うことにより、これらの妄想的観念は完解する。

パラノイアスペクトラム

以上のように、一般健常人でも幻覚妄想状態に陥りやすい要因が知られていること、および精神障害者における妄想は内容および確信度が変動するものも存在することなどから、妄想において「ある」か「ない」かの2分法では実体にそぐわないという指摘がある。ゆえに、一般健常人に見られる妄想的観念から精神障害者に見られる妄想までの間について、ある程度の連続性を認める研究者も存在する。(石垣, 2001 ; 笠原・藤縄, 1978) . 本研究では以上のような観点から、パラノイアスペクトラム説の立場に立って、一般青年における妄想的観念を検討することを目的とする。

1-4-2 アナログ研究

人における正常と異常の区分のあり方については、古くから議論されてきている。しかし近年、臨床心理学の分野においても再び関心が高まっている（坂本，1995）。そのような中で、正常と異常の連続性が主張されつつある。（坂本，1997；丹野・坂本，2001）。また、近年のうつ病や精神分裂病の軽症化の影響から、それだけ精神分裂病と神経症の境界例が増加しており、精神病理はむしろ広がっている点を指摘している。そして、抑うつや不安などを扱う「ソフトな精神病理学」の必要性を強調している（丹野・坂本，2001）。本論文で扱う自己関係づけは、一般青年の軽い被害妄想的思考である。

また、近年アナログ研究が注目を集めている。アナログ研究とは、非臨床サンプル（多くは大学生）に精神障害の症状を測定する自己記入式質問紙を使用して行った研究である。非臨床サンプルに行った結果から、臨床群における精神障害の心理的過程を類推（アナログ）する手法をとる。

アナログ研究の利点としては、以下の点が指摘されている。第1に、多変量解析が適用可能になる点である。一般に多変量解析を行う場合は、100例以上のデータが必要といわれている。ところが、臨床現場において、100例以上のデータを収集するのは困難が大きい。ましてや、妄想のみを持っていて抑うつ症状はない妄想性障害を集めるなどのように、合併症のないケースで100例以上集めるとなると、単独研究では不可能に近い。ところが、非臨床サンプルであれば、データ収集のコストは格段に低い。よって、多変量解析を使用するなどの実証的な研究において、アナログ研究の利点は大きいといえる。

第2に、非臨床サンプルにおける軽度な精神障害の症状それ自体が、臨床的介入として重要になる点である。重症の精神障害よりも、軽度な精神的不調の方がより多く体験されていると予想される点では、重症の精神障害と同様に臨床的介入の対象として重要といえる。ましてや、軽度の精神的不調が重症の精神障害の始まりである場合もあり、軽度な精神的不調であるからといって、見過ごすことはできない（丹野・坂本，2001）。

第3に、アナログ研究自体に、重要な意義が見いだせる点である。例えば、本研究で取り扱う自己関係づけは、一般青年にみられる軽い被害妄想的な思考をさ

す。これまで、妄想は主に精神医学分野で研究が蓄積されてきた。精神医学の妄想研究では、精神分裂病や妄想性障害などの診断基準（APA, 1994）を満たす精神障害者を対象とすることが多い。ところが、一般青年であっても、軽い被害妄想的な思考を高頻度で体験している。これらを考慮すると、一般青年の妄想的観念について検討することは、一般青年が妄想的観念を持っていても妄想状態に陥らずに生活できるのはなぜかという問いに、新たな示唆を与える可能性がある。

1-4-3 本論文における全体的目的

1-4-1および1-4-2で述べた点を考慮し、本研究は、パラノイアスペクトラムの立場に立って、一般青年の妄想的観念を検討する。同時に、アナログ研究の手法を採用する。一般青年における妄想的観念を検討することによって、精神障害者の妄想の理解に新たな視点を提供することが本研究の大きな目的である。

以下、第2章では一般青年の妄想的観念を測定するための新たな尺度を作成し、その尺度の信頼性と妥当性を検討する。第3章では、新たに作成した尺度を用いて、一般大学生および一般高校生を対象とした調査を実施する。それらの結果をもとに、青年期心性の視点から妄想的観念を検討する。第4章では、精神科外来を受診した児童思春期の臨床群に妄想的観念を測定する尺度を施行して、臨床群における妄想的観念の実体を検討する。そして第5章では、これまでに得られた結果から、妄想的観念について総合的に考察する。

第2章 自己関係づけを測定する尺度の作成

2-1 自己関係づけ尺度の作成 [研究1]^{註2}

2-1-1 問題と目的

本節の目的は、一般青年に見られる被害妄想的な思考を自己関係づけとしてとらえるために、自己関係づけ尺度を作成することである。一般青年における被害妄想的な思考を測定するために作成された尺度は、Fenigstein & Vanable (1992)のパラノイア尺度、滝村(1991)のパラノイド質問紙がある。ところが、Fenigstein & Vanable (1992)のパラノイア尺度項目には、明らかに精神分裂病の症状をさすものがいくつも含まれており、日本の一般青年には重篤で、内容的にふさわしくないとと思われる項目も含まれている。一方、日常的な疑心暗鬼の意識を示す項目は少ない。このため、彼らのパラノイア尺度のみでは、誰にでも見られる自己関係づけを十分にとらえることはできない問題がある。一方、滝村(1991)のパラノイド傾向は、他者の行動の背後に悪意を感じるという点を協調しており、本研究の自己関係づけ概念にはふさわしくない。よって、本研究では、自己には関係ないかもしれない他者の言動を、自己に被害的に関係づける傾向である自己関係づけを測定するために、新たな尺度を作成することとした。

2-1-2 方法

調査対象者 中部地方の大学生85名、および専門学校生176名、合計261名(男性70名、女性190名、不明1名)。

調査実施時期 1996年11月下旬。

測定尺度 (1)自己関係づけ尺度 自己関係づけを測定する為に、新たに尺度を作成することにした。その際、Fenigstein & Vanable (1992)のパラノイア尺

^{註2} [研究1]は、金子一史 1999 被害妄想的心性と他者意識および自己意識との関連について性格心理学研究, 8, 12-22. を加筆・修正したものである。

度の翻訳版を作成した。パラノイア尺度の翻訳版をもとに、日常的な妄想的観念を表していると考えられる項目を5つ加え、新たに尺度を構成した。各項目について、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の5段階で評定を求めた。

(2)他者意識尺度(付録3) 他者意識を測定する尺度として、辻(1993)による他者意識尺度を使用した。これは①内的他者意識②外的他者意識③空想的他者意識の3つの下位尺度から構成され全22項目からなる。各項目について、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の5段階で評定を求めた。

(3)自己意識尺度(付録4) 自己意識を測定する尺度として、辻(1993)による自己意識尺度を使用した。これはFenigstein, Scheier & Buss (1975)のSelf Consciousness Scaleを翻訳したものであり、それに辻が独自に作成した項目を含め、全27項目からなる。内容は①公的自己意識②私的自己意識③社会的不安の3因子からなる。各項目について、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の5段階で評定を求めた。

2-1-3 結果

1.各尺度の検討

まず、自己関係づけ尺度の各項目について、各項目の平均点と標準偏差との加減が得点範囲(1-5)を越えた項目を、天井効果またはフロアー効果があらわれたものと判断した。25項目中5項目においてフロアー効果が認められたため、この5項目を削除した。以下残りの20項目について因子分析(主成分分解・プロマックス回転)を行った。固有値は第1固有値から5.90, 1.96, 1.32, 1.11・・・と変動していた。第1固有値と第2固有値の差が他に比べて比較的大きかった。しかし、1因子による説明率は30.0%とかなり低かったので、次に固有値の差が大きい2因子を抽出した(Table 2-1)。2因子による累積説明率は39.3%であった。

Table 2-1 自己関係づけ尺度の因子分析結果

	F1	F2
自己関係づけ		
1 人が自分の方を見てしゃべっていると、自分のことを言っているのではないかと思う時がある。	.83	-.27
2 知人が挨拶をしてくれなかった時に、無視されたと思うことがある。	.73	.01
3 陰で噂されていると思う。	.70	.09
4 教室に入って急に静かになると、自分のことを話題にしていたのではないかと思うことがある。	.67	-.02
5 隣に座っている人が他の席へ移動すると、自分を避けたのではないかと思うことがある。	.67	-.03
6 しばしば知らない人が私を批判的に見ている様に見えるときがある。	.58	.27
7 戸外で、車や店の中から私を見ている人が苦になる。	.54	.06
8 誰かが、私の心に影響を与えようとしている。	.31	.24
猜疑心		
9 私は、自分が期待しているよりも親しげに接してくる人には警戒する傾向がある。	-.13	.62
10 誰も信用しない方が無難だ。	.16	.60
11 大抵の人は、自分の役に立ちそうだという理由で友達を作る。	.05	.60
12 たびたび訳もなく罰せられてきたと思う。	.22	.63
13 私の身に起こったことについて、本当に興味を持っている人は誰もいない。	.14	.53
14 両親や家族は、必要以上に私の欠点を見つけだす。	.11	.59
15 しばしば、周りの人に失望させられる。	.27	.57
16 人々は私について無礼で冷酷なことをいう。	.25	.57
17 大抵の人は、他人のために骨を折って助けることを、内心ではいやがっている。	.17	.45
18 大抵の人は、利益や利点を失うよりはむしろそれを得ようとして、少し不正な手段を使う。	.09	.44
19 私は日々の生活の中で、不公平な扱いをされていると思う。	.35	.43
20 私に恨みをもっている人がいる。	.37	.38
	因子間相関	F1
		F2
		.41

第1因子は、「人が自分の方を見てしゃべっていると、自分のことをいっているのではないかと思う時がある」「知人が挨拶をしてくれなかったときに、無視されたと思うことがある」などの項目が高く負荷している。これらの項目は本研究の、他者の関係ないかもしれない出来事を自己に被害的に関連づける傾向である、自己関係づけを表していると考えられる。よって第1因子は「自己関係づけ因子」と命名した。第2因子は、「たびたび訳もなく罰せられてきたと思う」「私は、自分が期待しているよりも親しげに接してくる人には警戒する傾向がある」など8項目からなる「猜疑心因子」と命名した。

下位尺度ごとの素点の合計をもって、下位尺度得点とした。その際、当該因子の因子負荷量が.50に満たない5項目は除外した。「自己関係づけ因子」の α 係数は.82であった。「猜疑心因子」の α 係数は.76であった。「自己関係づけ因子」は平均20.3 (SD=5.6)、「猜疑心因子」は平均18.9 (SD=5.3)であった。男子の「自己関係づけ因子」は平均21.2 (SD=5.39)、女子の「自己関係づけ因子」は平均20.0 (SD=5.64)であった。男子の「猜疑心因子」は平均19.9 (SD=5.42)、女子の「猜疑心因子」は平均18.6 (SD=5.16)であった。「自己関係づけ因子」と「猜疑心因子」それぞれについて男女差を検討したところ、男子と女子の平均値の差は有意ではなかった(それぞれ $t(258)=1.55, n.s.$; $t(258)=1.83, n.s.$)。

他者意識尺度と自己意識尺度については、フロアー効果及び天井効果と判断される尺度項目は見られなかった。そこで、両尺度共に全項目について因子分析を行った。他者意識尺度22項目について因子分析(主成分分解)を行った。固有値は第1固有値から8.48, 2.04, 1.39, 1.11, 0.95・・・と変動していた。先行研究の理論的仮説では3因子としているが、第2固有値と第3固有値の差は他に比べて比較的小さかった。そこで、22項目のうち辻(1993)によって明確化された15項目を対象として因子分析(主成分分解・プロマックス回転)を行った。固有値は第1固有値から5.86, 1.86, 1.26, 0.94, 0.73・・・と変動していた。理論的想定及びガットマン・カイザーの基準から3因子解を採用した。その結果、先行研究と一致した「内的他者意識」「空想的他者意識」「外的他者意識」の3因子を抽出した。3因子による累積説明率は59.8%であった。各尺度の α 係数は

それぞれ.85, .84, .79であった。

自己意識尺度27項目について因子分析（主成分分解・プロマックス回転）を行った。固有値は第1固有値から7.77, 2.96, 2.36, 1.34, 1.07・・・と変動し、明確な3因子性が認められた。そしてそれらの因子は、想定していた「私的自己意識」「公的自己意識」「社会的不安」に一致していた。3因子による累積説明率は48.5%であった。当該因子の因子負荷量が.45に満たない3項目は除外した。各尺度の α 係数はそれぞれ.88, .87, .73であった。

2.各尺度得点の相関

各尺度得点の相関をTable 2-2に示す。「自己関係づけ因子」と他者意識の下位尺度との間には、いずれも有意な正の相関が見られた ($r=.49\sim.53$, $p<.001$)。また、「猜疑心因子」と他者意識の下位尺度との間にも、いずれも有意な正の相関が見られた ($r=.23\sim.40$, $p<.001$)。他者意識と「自己関係づけ因子」との相関係数が、「猜疑心因子」と他者意識との相関係数に比べていずれも高い。この結果から、「自己関係づけ因子」と他者意識との間には、「猜疑心因子」と他者意識との間に比べて、より深い関わりがあることが示唆される。

Table 2-2 構成概念間の相関係数

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
①自己関係づけ							
②猜疑心	.43***						
他者意識							
③内的他者意識	.49***	.40***					
④空想的他者意識	.52***	.30***	.57***				
⑤外的他者意識	.53***	.23***	.36***	.46***			
自己意識							
⑥公的自己意識	.56***	.09	.51***	.51***	.68***		
⑦私的自己意識	.39***	.43***	.71***	.54***	.23***	.37***	
⑧社会的不安	.40***	.31***	.27***	.24***	.28***	.24***	.29***

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

「自己関係づけ因子」と自己意識の下位尺度との間には、有意な正の相関が見られた ($r=.39\sim.56$, $p<.001$)。また、「猜疑心因子」と私的自己意識、社会的不安との間に有意な正の相関が見られた (それぞれ $r=.43$, $p<.001$; $r=.31$,

$p<.001$) . しかし、「猜疑心因子」と公的自己意識との間には、有意な相関が見られなかった ($r=.09, n.s.$) .

3.重回帰分析

自己関係づけの下位尺度である「自己関係づけ因子」および「猜疑心因子」を予測変数、他者意識と自己意識の下位尺度を説明変数とした重回帰分析を行った.

説明変数の選択には、AICが最小となるときの説明変数の組み合わせを採用することとした. その結果「自己関係づけ因子」では、他者意識の下位尺度すべてと公的自己意識、社会的不安を説明変数として採用したときに、もっとも適切であると判断した. その結果をTable 2-3 に示す. 「自己関係づけ因子」では内的他者意識、空想的他者意識、外的他者意識の標準偏回帰係数が正の有意な値を示した (それぞれ $\beta=.16, p<.01$; $\beta=.19, p<.01$; $\beta=.19, p<.01$) . また、公的自己意識及び社会的不安の標準偏回帰係数も有意な正の値となった (それぞれ $\beta=.20, p<.01$; $\beta=.20, p<.001$) . 「自己関係づけ因子」に対する決定係数 (R^2) は.46であった. このことは、他者意識と自己意識がある程度「自己関係づけ因子」を説明していることを示唆していると考えられ、他者意識と自己意識が「自己関係づけ因子」に影響していることを示唆しているものと思われる.

Table 2-3 自己関係づけを目的変数とした標準偏回帰係数と決定係数

目的変数	説明変数					R^2
	内的他者意識	空想的他者意識	外的他者意識	公的自己意識	社会的不安	
自己関係づけ	.16**	.19**	.19**	.20**	.20**	.46**

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

一方「猜疑心因子」では、内的他者意識、外的他者意識、自己意識の下位尺度すべてを説明変数としたときにAICが最小になった. その結果、私的自己意識及び社会的不安の標準偏回帰係数が正の有意な値を示した (それぞれ $\beta=.29, p<.001$; $\beta=.18, p<.001$) . また、外的他者意識の標準偏回帰係数が正の有意な値を示した. しかし、公的自己意識については、負の有意な標準偏回帰係数が認

められた ($\beta = -.34, p < .001$) . ところで, Table 2-2 の尺度間の相関を見てみると, 公的自己意識と「猜疑心因子」との間には相関が見られない ($r = .09, n.s.$) . ここで, 公的自己意識と外的他者意識との間に比較的高い相関 ($r = .68, p < .001$) がみられることを考えあわせると, この重回帰分析の結果には, 多重共変性による影響が現れている可能性が高い. 従って, この結果を元に, 内容的な考察を行うことは適切ではないと考えられた. そこで, 説明変数から公的自己意識を除外して再び重回帰分析を行った. その際, 私的自己意識, 社会的不安, 内的他者意識を従属変数としたときにAICが最小となった.

その結果をTable 2-4 に示す. 私的自己意識と社会的不安の標準偏回帰係数は正の値を示した (それぞれ $\beta = .27, \beta = .20$, いずれも $p < .001$) . 内的他者意識の標準偏回帰係数は有意とはならなかった ($\beta = .15, n.s.$) . 「猜疑心因子」に対する決定係数 (R^2) は, .23であった.

Table 2-4 猜疑心を目的変数とした標準偏回帰計数と決定係数

目的変数	説明変数			R^2
	私的自己意識	社会的不安	内的他者意識	
猜疑心	.27**	.20**	.15	.23***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

2-1-4 考察

1. 自己関係づけ尺度の尺度構成について

本研究では自己関係づけを測定する尺度として, 自己関係づけ尺度を新たに作成した. その際, 自己関係づけの特徴として被害的な自己関係づけを考えていた. しかし, 今回の結果では自己関係づけ因子の他に「猜疑心因子」が抽出され, Fenigstein & Venable (1992)の因子構造とは異なった結果になった. その理由として, 本研究でフローア効果が見られた項目は削除したことで, 予備調査の結果から新たな項目を追加したことが考えられる.

フローア効果が見られたことは, Fenigstein & Venable (1992)のパラノイア尺度には, 項目としての弁別性の低いものが含まれていたことを示していると考え

えられる。彼らのパラノイア尺度はMMPI (Dahlstorm, Welsh, & Dahlstorm, 1975) からの抜粋で構成されている。このため、精神分裂病の症状をかなり直接的に表現した項目も含まれている。本研究でフロアー効果を示した項目は、精神分裂病の症状を直接的に表現したものであった。彼らも尺度を作成する過程で分布の歪んだ項目は削除しているが、それでも本研究での被験者には適さなかった項目が含まれていたと考えられる。

なお、本研究では自己関係づけの下位尺度として、自己関係づけ因子の他に「猜疑心因子」が抽出された。大淵(1993)や滝村(1991)は、悪意や敵意を他人に見いだしやすいことをパラノイド傾向の特徴として強調しており、これらは本研究での「猜疑心因子」にほぼ相当している。そして、尺度得点の相関及び重回帰分析の結果から、「自己関係づけ因子」と「猜疑心因子」とでは他者意識及び自己意識との関連パターンが異なるという結果を得た。つまり、「自己関係づけ因子」は他者意識および公的自己意識との関連が示されたのに対し、「猜疑心因子」は公的自己意識との関連が見られず、かわりに私的自己意識との関連が示された。「自己関係づけ因子」と「猜疑心因子」との間には中程度の相関が見られたが、その一方で「自己関係づけ因子」と「猜疑心因子」では、他者意識及び自己意識との関連の仕方が異なるパターンを示していた。このことは、「自己関係づけ因子」と「猜疑心因子」はある程度独立した心性としてとらえることが可能であることを示唆していると考えられる。以下では、「自己関係づけ因子」と「猜疑心因子」のそれぞれについて考察を行う。

2. 「自己関係づけ因子」について

重回帰分析の結果、「自己関係づけ因子」と他者意識の関連性が強いことが示された。他者意識が高い人は、他者への意識や関心が強く、多くの注意を他者に向ける人である(辻, 1989)。つまり他者に敏感な人である。また他者意識と共感性には正の相関が報告されている(三原, 1998; 辻, 1993)ことから、他者意識が高いと他者の視点を取得しやすく、他者を共感的に理解しやすい側面があると考えられる。しかし今回の結果は、他者に敏感な人は、被害的な自己関係づけが起りやすいことを示唆している。被害的な自己関係づけが起こっているときは、相手が自分をどう思っているか、推測し理解しようとしていると考えられる。他者に向ける注意の量が多いならば、他者のささいな行動が気になって、

他者の何気ない行動が自己にとって被害的に受け取られやすいと考えられる。

自己関係づけは、その程度がひどくなると一般生活をおくるにも不適應を起こしかねない。精神障害者に見られる被害妄想や関係妄想には、自己関係づけが広く認められる。今回の結果を被害妄想に適用することができれば、一つの視点を得ることができると思われる。つまり精神障害者に見られる被害妄想は、他者に並々ならぬ関心を示していることの表れであるといえるのではないだろうか。この点は、多くの心理療法家や精神療法家によって指摘されてきたが（例えば荻野，1978；宮本，1982など），今回は新たに、一般青年を対象とした調査からもそのことが示唆された。もちろん本研究では一般青年に見られる自己関係づけに限定しており、そのような限界があることを汲んでおかななくてはならないだろう。

また重回帰分析の結果では、公的自己意識と社会的不安及び他者意識の下位尺度すべてを説明変数としたときに、もっとも重回帰式のあてはまりがよいと判断した。自己意識に関しては、自己の社会的側面に注意を向ける公的自己意識が「自己関係づけ因子」に関係していると考えられる。それに対し、「猜疑心因子」と公的自己意識との関連は見いだすことができなかった。公的自己意識は、「自己関係づけ因子」により関連のあることが本研究で新たに示唆された。

3. 「猜疑心因子」について

「猜疑心因子」を予測変数とした重回帰分析の結果では、私的自己意識の標準偏回帰係数が有意になった。私的自己意識が高い人は、自己の感情に注意を向けやすく、認知した感情をより強く意識すると考えられている。このような感情の強化は、私的自己意識の高い被験者は怒りを経験した際、報復としてより強い攻撃行動をとりやすいこと（Scheier, 1976；大平, 1989）などのように、否定的な感情について支持する研究結果が多く報告されている（Gibbons, 1990）。一般に、他者に対して猜疑心を持つことは、社会的には望ましくないと考えられることから、猜疑心は否定的な感情であるといえる。私的自己意識が高いならば、自己の感情に敏感であるため猜疑心のような否定的な感情も認知しやすいと思われる。しかし重回帰分析での「猜疑心因子」の決定係数は、「自己関係づけ因子」に比べ低い値を示した。これは「猜疑心因子」が他者意識及び自己意識では、十分に説明されていないことを示している。これらの結果から、「猜疑心因子」に

については他者意識及び自己意識以外の他の要因を考慮する必要性があると思われる。

2-2 改訂版自己関係づけ尺度の作成 [研究2]^{註3}

2-2-1 問題と目的

本節の目的は、改訂版自己関係づけ尺度を作成することである。[研究1]で使用した自己関係づけ尺度は、自己関係づけ因子と猜疑心因子の2因子構造となった。自己関係づけ因子の項目内容には、「戸外で、車や店の中から私を見ている人が苦になる。」などの、被注察感を測っていると思われる項目が含まれており、自己関係づけを測定する上で、内容的に妥当ではない項目が含まれているという問題がある。また、自己関係づけ尺度の構成概念妥当性および再検査信頼性については、十分に検討されていない。よって、本研究では、前節で作成された自己関係づけ尺度について項目の改訂を行い、改訂版自己関係づけ尺度を作成する。その上で、改訂版自己関係づけ尺度の妥当性および再検査信頼性を検討する。

2-2-2 方法

予備調査

本研究で使用する尺度を作成するために、自由記述方式による予備調査を行った。調査対象者は愛知県の専門学校生41名であった。調査実施時期は1998年4月下旬であった。次にあげる教示文に従って、用紙に記入を求めた。「現在私は、・・・自分とは無関係かもしれない出来事を、自分に結びつけて考えてしまう人の思考過程を研究しています。このような現象の例としては、知人が挨拶をせずに通り過ぎたことが気になったり、周囲の何でもない笑い声が、自分の事を笑っているのではないかと気になったりする事などが挙げられます。・・・・あなたが被害妄想的に感じるときは、どんな時ですか？できるだけ詳しくお書き下さい」自由記述の結果および[研究1]の項目を参考にして、16項目を自己関係づけ原尺度とした。

本調査

^{註3}[研究2]は、金子一史 2000 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, 48, 473-480. の一部を加筆・修正したものである。

予備調査で作成した自己関係づけ尺度の信頼性，構成概念妥当性について検討する．構成概念妥当性の検討の際の仮説は以下の通りである．自己関係づけは自己を社会的対象として認知し，他者の評価に敏感になっているほど高まると考えられる．よって，他者から観察される自己の側面に注意を向けやすい傾向である公的自己意識と，正の相関をもつと予測される．また，公的自己意識は対人不安意識との関連性が示されているのに対し，私的自己意識は対人不安意識との関連は見いだされていない（菅原，1984）．以上のことから，自己関係づけは公的自己意識とは正の相関を持つものの，私的自己意識とは無相関であることが予測される．さらに，自分に自信が持てない人ほど他者のささいな行動が気になり，他者の行動を自己に被害的に結びつけやすいと考えられる．よって，自己関係づけは自尊心とは負の相関をもつと予測される．また，他者を信頼していれば，他者の言動に被害的になることはないと考えられるため，自己関係づけは不信とは正の相関をもつと予測される．

調査対象者 愛知県の大学生212名（男性94名，女性116名，不明2名）．

調査実施時期 1998年7月および10月．

測定尺度 (a)自己関係づけ尺度 予備調査により収集された16項目に加えて，ダミー項目として5項目を追加し，全21項目から構成された．(b)自己意識尺度（付録4） 辻(1993)による自己意識尺度21項目を使用した．①公的自己意識②私的自己意識③社会的不安の下位尺度から構成される．(c)自尊心尺度（付録5） 山本・松井・山成(1982)による自尊心尺度10項目を使用した．(d)不信尺度（付録6） 天貝(1995)による信頼感尺度の下位尺度である不信の中から10項目を使用した．自己関係づけ尺度，自己意識尺度および自尊心尺度の各尺度については「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で評定を求めた．不信尺度については「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の6件法で評定を求めた．

2-2-3 結果

1.各尺度の検討

自己関係づけ尺度16項目について“あてはまる”を5点，“あてはまらな

い”を1点として得点化し、因子分析を行った（主成分解）。固有値は第1固有値から6.89, 1.38, 0.97, 0.92・・・と変動し、明確な1因子性が認められた。なお、十分な因子負荷量のえられなかった2項目および、被注察感を測定していると考えられ内容的に適切ではないと判断した2項目を削除した。その結果をTable 2-5に示す。1因子による説明率は48.9%であった。男女別に因子分析を行ったところ、因子負荷量行列は男女で大きな違いは見られなかった。

Table 2-5 改訂版自己関係づけ尺度の因子分析結果

項目	F1
1 友達が内緒話をしていると、自分の悪口を言われているのではないかと気になる.	.80
2 話している集団と目が合うと、自分の事を言われているのではないかと気になる.	.77
3 友人が悪口を言っているのを聞くと、自分の事を言っているのではないかと思う時がある.	.77
4 周囲の笑い声が、自分を笑っている様に思える時がある.	.76
5 隣に座っている人が他の席へ移動すると、自分を避けたのではないかと思うことがある.	.72
6 自分の近くにしゃべっている集団がいて、自分の事を言われているのではないかと思う時がある.	.71
7 知人が挨拶をしてくれなかった時に、無視されたと思うことがある.	.69
8 恥ずかしいことをした後、自分のことが陰で噂されているに違いないと思う.	.69
9 人が自分の方を見てしゃべっていると、自分の事を言っているのではないかと思う時がある.	.62
10 部屋に入って急に静かになると、自分の事を話題にしていたのではないかと思うことがある.	.61
11 会話や電話で沈黙が続くと、相手に嫌われているのではないかと気になる.	.61
12 いつも行動を共にしている友人が自分を誘わなかった時、自分は嫌われているのではないかと思うことがある.	.61
二乗和	5.87
寄与率	48.9

自己意識尺度（公的自己意識・私的自己意識・社会的不安）の α 係数はそれぞれ .87, .84, .77 であった。自尊心尺度は、項目 8 「もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい。」の項目得点と、尺度合計得点との相関が $r=.16$ と極端に低かったため削除した。9項目による自尊心尺度の α 係数は .83 であった。不信感尺度の α 係数は .89 であった。

2. 構成概念妥当性の検討

各尺度得点の相関を算出した。自己関係づけと公的自己意識、社会的不安の間には、それぞれ有意な正の相関が見られた ($r=.49, p<.001$; $r=.43, p<.001$)。また、自己関係づけと自尊心との間には、有意な負の相関が見られた ($r=-.38, p<.001$)。そして、自己関係づけと不信感との間には、有意な正の相関が見られた ($r=.39, p<.001$)。自己関係づけと私的自己意識との相関は有意とはならなかった。 ($r=.13, n.s.$)。

3. 信頼性の検討

自己関係づけ尺度12項目の α 係数は .90 であった。なお、自己関係づけ尺度について専門学校生77名を対象に3週間の間隔で再検査を実施したところ、再検査信頼性係数は .76 であった。

4. 自己関係づけと公的自己意識および私的自己意識との関係

私的自己意識得点を統計的に統制した後の、自己関係づけ尺度得点と公的自己意識得点との偏相関を算出した。その結果、自己関係づけと公的自己意識の間には、有意な正の偏相関が見られた ($r=.48, p<.001$)。しかし、公的自己意識得点を統計的に統制した後の、自己関係づけ尺度得点と私的自己意識得点の間には、有意な偏相関が見られなかった ($r=-.06, n.s.$)。

2-2-4 考察

本研究では、[研究1]の自己関係づけ尺度についての改訂を行った。その結果、改訂版自己関係づけ尺度が構造的には安定した1次元的な尺度で、またすべての項目が一定以上の因子負荷量をもつことから、因子的妥当性も高い尺度であることが示された。また、 α 係数を算出した結果、この尺度が高い内的整合性を

有していることが示された。加えて、十分な再検査信頼性が示された。内的整合性及び再検査信頼性の検討の結果から、改訂版自己関係づけ尺度は一定の信頼性を有していることが示された。

構成概念妥当性の検討についてはすべての仮説が支持された。これらのことから、自己関係づけ尺度の構成概念妥当性はおおむね認められたと考えられる。

次に、自己関係づけと自己意識との関連について述べる。本研究において公的自己意識は、私的自己意識に比べて自己関係づけとの間に高い相関が見られた。また、私的自己意識を統制したときの自己関係づけと公的自己意識との間に有意な正の偏相関が見られたのに対し、公的自己意識を統制したときの自己関係づけと私的自己意識との偏相関係数は有意とはならなかった。これらのことから、公的自己意識は、私的自己意識に比べて自己関係づけに与える影響がより大きいと考えられる。これは、Fenigstein & Vanable(1992)の結果と一致している。

自己関係づけは、他者のなんでもないしぐさを自己に被害的に関連づける傾向である。公的自己意識の高い人は、自己を他者からの観察可能な社会的対象として見がちであり、他人からどのように見られ、どのように評価されているのかを気にする傾向にある。そして、他者からの目を気にして、実際以上に他者が自分に関心を持っているのではないかと考えがちである。結果として、公的自己意識の高い人は他者の行動が自分に向けられているのではと推測しがちであると考えられる。本研究の結果から、自己が他者にどう見られているか気にするほど自己関係づけが高まりやすくなることが示唆された。

第3章 青年期心性としての自己関係づけ

3-1 発達の視点からみた自己関係づけ [研究3]^{注4}

3-1-1 本節の問題と目的

本節の目的は以下の2点である。第1に、自己関係づけを発達の視点から検討することである。第2に、自己関係づけと他者意識、自尊心、個人志向性・社会志向性との関連を検討することである。

第1点については、大学生に加えて高校生に自己関係づけ尺度への回答を求め、発達段階による変化を比較検討する。大学生と高校生では、友人関係のあり方に違いがあるという報告が多い。例えば、長沼・落合（1998）は、高校生は大学生に比べて、自分と気があわない人とも交友をもとうとすることを指摘している。また、落合・佐藤（1996）によると、高校生は大学生に比べて、誰とでも仲良くしていきたいと望み、皆と同じようにいたいと望んでいると指摘している。さらに、榎本（1999）によると、高校生は大学生に比べて、互いの相違点を認めあい、価値観や将来の生き方などを語り合う「相互理解活動」が低く、親密的で友人との行動や趣味の類似点に重点を置き、仲がよいことを確認するような「親密確認行動」が高く、友人と遊ぶことを中心としたつきあい方である「共有活動」が高い。感情的側面では、高校生は大学生に比べて、友人との関係を意識するがゆえに友人に対して不安を感じている「不安・懸念」が高く、友人に自分の言いたいことはきちんと伝え、友人と一緒にいるときも自分を確立している「独立」が低く、友人に対してライバル意識を感じている「ライバル意識」が高い。加えて、（榎本淳子，2000）では、高校生は大学生に比べて友人と互いの個性を尊重する「相互尊重欲求」が低く、友人との同じ行動や同じ趣味を望む「同調欲求」が高いことが示されている。これらのように、青年期前期である高校生は、友人に対して同調的になり、気の合わない人とも関係を維持しようと望み、

^{注4} [研究3]は、金子一史 2000 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, 48, 473-480. の一部を加筆・修正したものである。

広く浅いつきあいをしている。ところが、青年期後期である大学生の年代になると、友人を自分とは異なった対象であると認めつつも、お互いの自己の内面について話し合ったりするような、狭く深いつきあいをするようになる。

また、友人関係の他にも、対人関係上での不適応傾向のあり方に、高校生と大学生で違いがあるとする報告がある。永井（1998）や岡田・永井（1990）によると、高校生は大学生に比べて、集団に溶け込めない、対人場面で気恥ずかしく感じるなど、対人状況における行動・態度の問題が高いと指摘している。一方で高校生は大学生に比べて、不安や劣等感などの内省的自己意識が低いことを指摘している。以上の点から、（永井徹，1998）は、高校生から大学生において行動レベルにおいて対人場面での問題意識を自覚することがあっても、それについて他者からいかに評価されているかを表す関係的自己はほぼ横ばいを示し、自己を責めたり、不安や劣等感はむしろ減少傾向にあると指摘している。

以上のように、友人関係や対人関係上での不適応傾向のあり方が、高校生から大学生にかけて発達的に変化する。これらの点を考慮すると、他者の言動を自己に被害的に関連づける自己関係づけにおいて、高校生と大学生では異なっている可能性がある。ところが、2-1における[研究1]および2-2における[研究2]の被調査者は専門学校生もしくは大学生であり、青年期前期の年代である高校生の実体については、明らかではない。よって本研究では、大学生に加えて高校生に改訂版自己関係づけ尺度への記入を求め、発達の視点から検討する。

第2点については、自己関係づけに関連が深いと考えられる性格特性として、他者意識（辻，1989，1993）及び個人志向性・社会志向性（伊藤，1993a，1993b，1995）を取り上げる。自己関係づけに関しては、公的自己意識との関連が指摘されてきた（Fenigstein，1984；Fenigstein & Vanable，1992）。一方で、他者の言動や行動を自己に関連づける際には、その場に存在している他者に注意を向けている状態であるとも考えられる。被害的な自己関係づけを検討するにあたって、他者への注目という視点はこれまであまり重視されてこなかった。他者意識との関連は、改訂前の自己関係づけ尺度について[研究1]において示されている。今回新たに、改訂後の自己関係づけ尺度についても関連が認められるか確認的に検討する。加えて、自己関係づけと他者意識との関連の仕方に発達段階による差異があるのかについて検討する。

本研究では、他者意識に加えて自尊心も取り上げる。自己関係づけは他者意識と関連があることが予想される。しかし、他者意識が高くても、適度な自己評価を保っていれば、自己関係づけが高まりにくいと考えられる。他者に敏感であることは、気配りができたり、他者の立場に立つことができるとも考えられ、必ずしも不適応の指標となるわけではない。しかし、自己評価が低く自分に自信がもてない状況で他者のことが気になるなら、他者のささいな言動を自己に被害的に関係づけやすいことが予想される。逆に、適度な自己評価を保つことができるならば、他者が気になっても、自己関係づけは高まりにくいと思われる。よって、[研究3]では、他者意識に加えて自尊心も同時に検討する。

また、自己関係づけに関連があると思われるものとして、個人志向性・社会志向性（伊藤，1993）を取り上げる。個人志向性とは、個性や独自性を尊重しつつ自分自身の内的な基準に従った生き方への志向性であり、社会志向性とは、他者との強調を大切に社会規範に適応した生き方への志向性を意味する（伊藤，1995）。自分が避けられたのではないかと推測するときは、相手のことを思い悩んで気にしている状態である。つまり、他者の存在が自己に大きく影響していると思われる。そのような状況では、自分自身の内的な基準に志向して行動しようとするのは、難しいと考えられる。よって、自己関係づけが高まれば、個人志向性に基づいて行動するのは困難であると思われる。また、自己関係づけが高まるときは、他者や社会との関係性に意識が向かっている状態といえる。これらことから、個人志向性・社会志向性は自己関係づけと関連のあることが推測される。

3-1-2 方法

調査対象者 大学生は、中部地方の大学生205名（男子85名，女子117名，不明3名）。高校生は中部地方の高校生465名（1年男子83名，女子76名，2年男子74名，女子75名，不明3名，3年男子80名，女子73名，不明1名）であった。大学生男子の平均年齢は21.22歳（標準偏差1.3），大学生女子の平均年齢は20.41歳（標準偏差1.4）であった。高校生男子の平均年齢は16.27歳（標準偏差0.9），高校生女子の平均年齢は16.11歳（標準偏差1.0）であった。

調査実施時期 大学生は1998年11月．高校生は1999年6月．

測定尺度 (a)改訂版自己関係づけ尺度 [研究2]によって構成された12項目に加えて、ダミー項目を含む、全19項目から構成された．(b)他者意識尺度（付録3） 他者意識を測定する尺度として、辻(1993)による他者意識尺度を使用した．これは①内的他者意識②外的他者意識③空想的他者意識の3つの下位尺度から構成される．大学生に対しては全22項目を、高校生に対しては辻（1993）によって明確化された15項目を使用した．(c)自尊心尺度（付録5） 研究1と同様の山本・松井・山成(1982)による自尊心尺度を使用した．(d)個人志向性・社会志向性尺度（付録7） 伊藤（1993a）による個人志向性・社会志向性尺度を使用した．各尺度項目について「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で評定を求めた．

3-1-3 結果

1. 各尺度の検討

自己関係づけ尺度12項目について“あてはまる”を5点－“あてはまらない”を1点として得点化し、因子分析を行った（主成分分解）．固有値は第1固有値から6.36, 0.89, 0.81, 0.68・・・と変動し、第1調査と同様に明確な1因子性が認められた． α 係数は.92であった．1因子による累積説明率は53.0%であった．男女別及び発達段階別に因子分析を行ったが、それぞれ明確な1因子性が認められた．

Table 3-1 改訂版自己関係づけ尺度の因子分析結果

項目	F1
1 友達が内緒話をしていると、自分の悪口を言われているのではないかと気になる.	.85
2 話している集団と目が合うと、自分の事を言われているのではないかと気になる.	.78
3 友人が悪口を言っているのを聞くと、自分の事を言っているのではないかと思う時がある.	.75
4 周囲の笑い声が、自分を笑っている様に思える時がある.	.75
5 隣に座っている人が他の席へ移動すると、自分を避けたのではないかと思うことがある.	.73
6 自分の近くにしゃべっている集団がいて、自分の事を言われているのではないかと思う時がある.	.75
7 知人が挨拶をしてくれなかった時に、無視されたと思うことがある.	.68
8 恥ずかしいことをした後、自分のことが陰で噂されているに違いないと思う.	.69
9 人が自分の方を見てしゃべっていると、自分の事を言っているのではないかと思う時がある.	.67
10 部屋に入って急に静かになると、自分の事を話題にしていたのではないかと思うことがある.	.71
11 会話や電話で沈黙が続くと、相手に嫌われているのではないかと気になる.	.64
12 いつも行動を共にしている友人が自分を誘わなかった時、自分は嫌われているのではないかと思うことがある.	.70
二乗和	6.36
寄与率	.53

次に、他者意識尺度について因子分析（主成分解・バリマックス回転）を行った。他者意識尺度は大学生と高校生で施行した項目数が異なっていたが、ここでは両方に施行した15項目を分析対象とした。固有値は第1固有値から6.05, 2.00, 1.21, 1.03, 0.75・・・と変動していた。先行研究から推定される3因子解でバリマックス回転を行ったところ、先行研究と一致した内的他者意識・外的他者意識・空想的他者意識の3因子を抽出した。よって本研究では3因子解を採用した。各尺度の α 係数はそれぞれ.87, .85, .77であった。自尊心尺度については、[研究2]と同様に項目8を削除した。自尊心尺度の α 係数は.83, 個人志向性・社会志向性尺度の α 係数はそれぞれ.74, .77であった。

2. 自己関係づけ得点の男女差及び発達段階差

自己関係づけ尺度得点の性別・発達段階別の平均値と標準偏差をTable 3-2に示す。自己関係づけ得点を従属変数として、性別(2)×発達段階(2)の分散分析を行った。その結果、性別の主効果及び発達段階の主効果がともに有意であった($F(1,644)=12.43, p<.001$; $F(1,644)=20.76, p<.001$)。性別では、女子の方が有意に高い得点を示した。発達段階では、大学生の方が有意に高い得点を示した。交互作用は有意ではなかった($F(1,644)=2.58, n.s.$)。

Table 3-2 自己関係づけ得点の性別・発達段階別の平均値と標準偏差

	男子	女子
高校	28.44 (11.0)	32.39 (11.1)
	N=231	N=217
大学	34.36 (10.9)	35.30 (10.5)
	N=83	N=117

3. 各尺度得点の相関

各尺度得点の基礎統計量をTable 3-3に示す。また、全被調査者を対象とした尺度間相関をTable 3-4に、男子における尺度間相関をTable 3-5に、女子における尺度間相関をTable 3-6に示す。自己関係づけと他者意識との間には、い

れも有意な中程度の正の相関が見られた（すべて $r=.39$, $p<.001$ ）．自己関係づけと自尊心との間には有意なやや弱い負の相関が見られた（ $r=-.25$, $p<.001$ ）．自己関係づけと個人志向性との間には有意な中程度の負の相関が見られた（ $r=-.33$, $p<.001$ ）．自己関係づけと社会志向性との間には、弱い正の相関が見られた（ $r=.13$, $p<.001$ ）．

Table 3-3 各尺度の平均と標準偏差

	全体	男子	女子
自己関係づけ	31.72 (11.2)	30.01 (11.2)	33.41 (11.0)
他者意識	46.81 (11.6)	45.52 (12.1)	48.04 (11.1)
内的他者意識	22.35 (6.5)	21.99 (6.8)	22.72 (6.1)
外的他者意識	12.69 (3.9)	12.04 (3.9)	13.28 (3.7)
空想的他者意識	11.72 (4.0)	11.46 (4.1)	11.97 (4.0)
自尊心	28.70 (6.8)	29.21 (7.0)	28.28 (6.5)
個人志向性	22.42 (5.3)	22.88 (5.5)	22.01 (5.2)
社会志向性	32.31 (5.7)	31.34 (6.3)	33.18 (5.1)

Table 3-4 尺度間相関（全体）

	自己関係づけ	他者意識全体	内的他者	外的他者	空想的他者	自尊心	個人志向性
他者意識全体	.48 ***						
内的他者意識	.39 ***	.86 ***					
外的他者意識	.39 ***	.72 ***	.37 ***				
空想的他者意識	.39 ***	.81 ***	.52 ***	.53 ***			
自尊心	-.25 ***	-.07	-.04	-.03	-.11 **		
個人志向性	-.33 ***	-.13 **	-.01	-.18 ***	-.18 ***	.55 ***	
社会志向性	.13 ***	.35 ***	.37 ***	.21 ***	.23 ***	.30 ***	.16 ***

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

Table 3-5 尺度間相関（男子）

	自己関係づけ	他者意識全体	内的他者	外的他者	空想的他者	自尊心	個人志向性
他者意識全体	.45 ***						
内的他者意識	.38 ***	.86 ***					
外的他者意識	.33 ***	.74 ***	.41 ***				
空想的他者意識	.35 ***	.79 ***	.48 ***	.54 ***			
自尊心	-.24 ***	-.01	.01	-.01	-.03		
個人志向性	-.29 ***	-.05	.05	-.13 *	-.11 *	.52 ***	
社会志向性	.09	.37 ***	.37 ***	.21 ***	.26 ***	.31 ***	.17 ***

***p<.001 **p<.01 *p<.05

Table 3-6 尺度間相関（女子）

	自己関係づけ	他者意識全体	内的他者	外的他者	空想的他者	自尊心	個人志向性
他者意識全体	.51 ***						
内的他者意識	.39 ***	.86 ***					
外的他者意識	.43 ***	.69 ***	.32 ***				
空想的他者意識	.42 ***	.84 ***	.56 ***	.50 ***			
自尊心	-.24 ***	-.13 *	-.10	-.01	-.19 ***		
個人志向性	-.36 ***	-.19 ***	-.06	-.22 ***	-.23 ***	.58 ***	
社会志向性	.15 **	.31 ***	.36 ***	.15 **	.19 ***	.34 ***	.21 ***

***p<.001 **p<.01 *p<.05

4. 重回帰分析

自己関係づけを予測変数，その他の変数を説明変数とした重回帰分析を行った。その際，他者意識については下位尺度間で中程度の相関が見られたため，3下位尺度の合計得点を用いることにした。結果をTable 3-7 に示す。

まず，全体を対象とした重回帰分析の結果では，他者意識の標準偏回帰係数が正の有意な値を示した（ $\beta=.43$ ， $p<.001$ ）。また，自尊心と個人志向性の標準偏回帰係数が負の有意な値を示した（それぞれ $\beta=-.12$ ， $p<.01$ ； $\beta=-.21$ ， $p<.001$ ）。社会志向性の標準偏回帰係数は有意とはならなかった（ $\beta=.05$ ， $n.s.$ ）。決定係数(R^2)は，.31であった。

男女別発達段階別に重回帰分析を行ったところ，一貫して他者意識の標準偏回帰係数は有意な正の値を示した（ $\beta=.32\sim.49$ ）。ただし，自尊心及び個人志向性については，高校生と大学生で違いが見られた。自尊心については，大学生男

子の自尊心の標準偏回帰係数が有意な負の値を示した ($\beta = -.33, p < .01$)。これに対し、高校生男子、高校生女子及び大学生女子の自尊心の標準偏回帰係数は、有意とはならなかった (それぞれ $\beta = -.08, \beta = -.13, \beta = -.11$, いずれも *n.s.*)。個人志向性については、高校生男子、高校生女子及び大学生女子の標準偏回帰係数が有意となった (それぞれ $\beta = -.27, p < .01; \beta = -.22, p < .01; \beta = -.25, p < .05$)。これに対し、大学生男子の標準偏回帰係数は有意とはならなかった ($\beta = -.14, n.s.$)。なお、社会志向性の標準偏回帰係数はいずれも有意とはならなかった ($\beta = -.05 \sim .08$, いずれも *n.s.*)。決定係数は大学生女子において最大となり、その時の値は.41であった。また、大学生男子において最小となり、その時の決定係数は.26であった。

Table 3-7 自己関係づけを予測変数とした標準偏回帰係数と決定係数

	説明変数				R^2
	他者意識	自尊心	個人志向性	社会志向性	
全体	.43***	-.12**	-.21***	.05	.31***
男子全体	.43***	-.16**	-.17***	.01	.27***
女子全体	.43***	-.08	-.24***	.08	.33***
高校全体	.44***	-.12*	-.24***	.03	.33***
高校男子	.46***	-.08	-.27***	-.05	.32***
高校女子	.40***	-.13	-.22**	.09	.31***
大学全体	.40***	-.21**	-.20**	.01	.34***
大学男子	.32**	-.33**	-.14	-.01	.26***
大学女子	.49***	-.11	-.25*	.04	.41***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

3-1-4 考察

1. 自己関係づけ尺度得点の発達の検討

分散分析の結果から、自己関係づけは大学生の方が高校生よりも高い傾向にあることが示された。これは、青年期後期といわれる大学生の年代に、他者の行動を自己に被害的に関連づける傾向が高いことを示唆している。

一般に、青年期後期になると、自己への関心が高まるにつれ、他者から自己がどう見られているかを気にするようになる。その際、他者のちょっとしたしぐさや言動を自己に被害的に結びつけることは十分あり得る。大学生の方が高校生に比べ自己関係づけが高かったことは、自己関係づけには発達の要因が関与していることを示唆している。

ところで、本研究の自己関係づけに類似するものとして、対人恐怖的心性（永井，1998）をあげることができる。永井（1998）の対人恐怖的心性の下位尺度である関係的自己意識は、自分が見知られる不安や、自分が相手に嫌な思いをさせているのではないかという不安を含む多面的なものと考えられ、本研究で取り上げた自己関係づけに相当する部分も含まれている。そして、対人恐怖症の症状は、精神障害者に限らず一般青年における思春期に一過性に見られると多くの臨床家が述べている（たとえば、鍋田，1997；笠原，1972など）。ただし対人恐怖的心性は、青年期における自分自身の関心の高まりの結果であり、健全な発達の一側面としてみることができ（岡田，1993）。本研究における自己関係づけも、青年期心性の一つとして捉えることができると考えられる。そして、高校生に比べ青年期後期にあたる大学生により多く体験されていることが今回新たに示された。

2. 自己関係づけと関連する特性について

尺度間の相関および重回帰分析の結果から、発達段階および男女に関わらず自己関係づけと他者意識との間に関連のあることが示された。つまり、他者に注目しやすい傾向にある人は、自己関係づけが高い傾向にあることが示された。この結果は、示唆に富むものであると考えられる。他者のちょっとした行動を自己に被害的に受け取る時は、自己が脅かされている状態と考えられる。そのような状態は心理的な不適応状態と考えられる。ところが、今回の結果を考慮すれば、そのような被害的となっている不適応状態にも肯定的な意味が見いだせると思われる。つまり、被害的になって不適応状態に陥っている人は、他者に敏感である側面を持っているために、それだけ被害的になってしまうとも考えられることが示唆される。

自己関係づけを従属変数とした分散分析の結果から、性別の主効果が有意となり、女子において男子よりも自己関係づけは高い得点を示した。また、自己関係

づけと他者意識以外の他の性格特性との関連のあり方には、発達段階および男女によって違いが見られた。重回帰分析の結果では、高校生においては男女ともに他者意識と個人志向性の標準偏回帰係数 (β) が有意となった。つまり、高校生においては他者に注意を向けやすく、かつ主体的に行動できない人ほど自己関係づけが起こりやすいと考えられる。この高校生の関連パターンに男女差は見られなかった。しかし、大学生になると男女によって自己関係づけと他の尺度との間に関連の違いが見られた。男子は自尊心と他者意識が自己関係づけを説明していた。つまり、大学生男子の場合は他者に注意を向けやすく、かつ自尊心が低い人ほど自己関係づけが起こりやすいと考えられる。これに対し、女子は他者意識と個人志向性が自己関係づけを説明していた。このように、青年期後期になると男子の場合は個人志向性よりも自尊心がより自己関係づけに関連することが示され、女子の場合とは異なることが示唆された。加えて、決定係数 (R^2) は大学生女子において.41と大学生男子の.26と比べて比較的大きな値となっており、大学生女子では他者意識と個人志向性により自己関係づけを説明できる割合が大学生男子より大きいことを示している。

女子は、男子に比べて周囲との関係性を保持しながら発達していくとされている(加藤・高木, 1980)。加えて、梶田(1980)によると、女子の場合の自己評価的意識は、「人のうわさ」や「他の人の反対」などのような、他者のまなざしに大きく依存していることを指摘している。これらのことから、女子は男子に比べて、周囲との関係性が自己を規定する上で重要な役割をもち、周囲との関係性を重視するために対人関係において周囲に気を配る傾向が高いと考えられる。そして、周囲に注意を払っているほど、自己関係づけが高まりやすいことが考えられる。男子においては、高校生では女子と同様に他者意識と個人志向性が自己関係づけに影響しているが、青年期後期になるにしたがって、自己に対する肯定的評価である自尊心が自己関係づけにより影響を与えるようになることが示唆された。このように、青年期後期になると男女によって自己関係づけに関連する要因に違いのあることが示唆された。

3. 臨床的示唆

[研究3]において、他者に注意を向けやすい傾向にある人は、自己関係づけが高い傾向にあることが示された。他者意識と自己関係づけとの関連は、[研究1]

における改訂前の自己関係づけ尺度においても見られており、[研究3]において再び確認された。他者意識と自己関係づけとの間に正の関連があることから、他者のことを気にしやすい人は、他者の行動を自己にとって被害的に受け取る側面のあることが示唆される。そこで、一般健常者に見られる妄想的観念と精神障害者に見られる妄想との間に連続性を仮定するパラノイアスペクトラムの立場に立つならば、本研究の結果から以下のことが推論されよう。つまり、一見事実無根で荒唐無稽に思える被害妄想や関係妄想であっても、他者への並々ならぬ関心の表れであることが示唆される。この点は、2-1-4においても述べた通り、多くの臨床家によって指摘されてきた（例えば荻野，1978；宮本，1982など）。今回再び、一般青年を対象とした調査からもそのことが示唆された。しかし、本研究が一般青年を対象とした調査であることを考慮すると、本研究の結果には一定の限界があると思われる。

3-2 自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連 [研究4]^{註5}

3-2-1 本節の問題と目的

本研究では、一般健常群を対象として、自己関係づけとその他の臨床的不適応がどのような関係にあるか検討する。前節3-1の[研究3]においては、改訂版自己関係づけ尺度と、他者意識、自尊心、個人志向性・社会志向性との関連を検討した。その結果、自己関係づけと他者意識が深い関連にあることが示された。ところが、[研究3]においては、自己関係づけと関連があると思われる性格特性を検討する際に、不適応の指標となる性格特性は取り扱われていない。自己関係づけが高い人は、対人状況において他者の目を気にしすぎたり、他者から自己がどう思われているかを気にしたりしやすいと考えられる。よって、自己関係づけが極端に高い人は、多くの人が心理的不適応に陥っていると考えられる。よって、自己関係づけと心理的不適応とは密接な関連があると考えられる。ところが、自己関係づけとそれに関連すると思われる心理的不適応特性との関連は、明らかとはなっていない。そこで本研究では、自己関係づけとそれに関連すると思われる心理的不適応との関連を検討することを目的とする。

本研究では、自己関係づけに関連すると思われる心理的不適応特性として、以下の3つをあげる。

第1に、対人恐怖心性を取り扱う。対人恐怖症とは、対人的状況において著しい不安が生じる障害である。対人恐怖症者は、人前に出ると緊張したり、人の視線を気にしたりする。山下（1970）は、対人恐怖症の患者に見られる対人的構えの一つに、親しさへの熱望を指摘している。そして、“人があっても話しかけてくれなかったりすると、ひどく気になって、どうしてだろうと一日中気になる”という、患者の言葉をあげている。この例のように、対人恐怖の特徴の一つとして、他者の言動を自己に被害的に関係づけやすいことが指摘されており、自己関係づけと対人恐怖は密接な関係のあることが考えられる。ところが、自己関係づけと対人恐怖がどのような関係にあるか検討した研究は見あたらない。そこで本研究では、自己関係づけと対人恐怖心性との関係を検討する。

^{註5} [研究4]は、金子一史・本城秀次・高村咲子 自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連（未発表論文）を加筆・修正したものである。

第2に、抑うつを取り扱う。抑うつ的な人には、対人関係場面での出来事を、自己に関連づけて推論する傾向が指摘されている。Beck(1976)は、抑うつ患者に見られる体系的な推論の誤りとして、恣意的推論、選択的抽出、過度の一般化、分極化した考え、自己関連づけを指摘している。Beck(1976)の指摘する自己関連づけは、自己の個人的に意味に基づいて出来事を解釈する傾向のことである。そして、他人が眉をひそめているのをみた人が、自分が嫌われていると判断した人を、自己関連づけの例としてあげている。このように、抑うつ的な人は、個人的な意味に基づいて対人場面での出来事を解釈する傾向が高いために、自己関係づけ傾向も高いことが予測される。

第3に、登校拒否傾向を取り扱う。登校拒否に見られる一般的な性格傾向として、内向的で非社交的、神経質な傾向があるとされている(若林, 1983)。また、引っ込み思案で消極的な級友関係であったり(鑑, 1963)、笑われたり恥をかいたりすることを恐れている(高木・川端・藤沢・加藤, 1965)などの指摘がある。このように、登校拒否ではさまざまな対人関係での障害が報告されている。よって、他者の言動を自己に被害的に関係づける自己関係づけと関連のあることが予想される。

また本研究では、対象として青年期前期に相当する高校生を取り上げる。青年期は、生物学的および心理社会的に著しい変化を遂げる時期である。加えて、様々な対人関係上の葛藤や不安を体験し、それに対処する心理社会的な適応機能を獲得していく時期でもある。そのような中で、他者から自分がどう見られているかを気にするあまり、自己意識過剰や対人過敏になりやすい(鍋田, 1997)。よって、自己についての内省を行うようになり、自己意識が高まり始める、青年期前期の高校生を対象とする。

3-2-2 方法

調査対象者 愛知県の高中生487名(男性257名, 女性225名, 不明5名)。

調査実施時期 1999年6月。

測定尺度 (a)自己関係づけ尺度 [研究2]で作成した改訂版自己関係づけ尺度を使用した。全12項目からなる。5件法で回答を求めた。(b)抑うつ尺度(付

録 8) Kovacs (1981) による Children's Depression Inventory (CDI) の日本語版 (村田・堤・皿田・中庭・小林, 1989) を用いた。27項目から構成されており、最近 2 週間の抑うつ状態を 3 段階で評定するようになっている。(c) 対人恐怖心性尺度 (付録 9) 堀井・小川 (1997) による対人恐怖心性尺度の下位尺度の中から、自分や他人が気になる悩み、集団に溶け込めない悩み、社会的場面で当惑する悩みの 3 尺度を使用した。それぞれ 5 項目からなる。「全然あてはまらない」から「非常にあてはまる」までの 7 件法で回答を求めた。(d) 登校回避感情尺度 (付録 10) 古市 (1991) による学校嫌い感情測定尺度をもとに藤垣 (1996) によって作成された、11 項目からなる登校回避感情尺度を用いた。「はい・どちらでもない・いいえ」の 3 件法で回答を求めた。(e) 登校拒否関連性格尺度 (付録 11) 本城・高村・数田・佐々木・橘・西出・西出 (1999) による登校拒否関連性格尺度を使用した。強迫性因子 (「やらないといけないことは完ぺきにやりたい方です」「何事もきちんとやらないときがすまない方です」など 11 項目)、消極・非社会的因子 (「どちらかという、友だちの後からついていく方です」「自己主張するよりは、人の意見に従う方です」など 6 項目)、内弁慶因子 (「外ではおとなしいのに、家ではわがままなところがある」「家では言い出したら聞かないところがあります」など 5 項目) からなる。「はい・どちらでもない・いいえ」の 3 件法で回答を求めた。

3-2-3 結果

自己関係づけ尺度 12 項目について“あてはまる”を 5 点—“あてはまらない”を 1 点として得点化し、因子分析を行った (主成分分解)。固有値は第 1 固有値から 6.28, 0.94, 0.80, 0.67・・・と変動し明確な 1 因子性が認められた。1 因子による説明率は 52.4%であった。 α 係数は .92 であった。CDI については、もっとも抑うつ傾向の低いものから高いものへと順に 0 点, 1 点, 2 点を与えるようにして、因子分析を行った (主成分分解)。固有値は第 1 固有値から 5.65, 1.61, 1.56, 1.36・・・と変動していた。よって 1 因子と判断した。1 因子による説明率は 20.9%であった。 α 係数は .84 であった。対人恐怖心性尺度 (自分や他人が気になる悩み、集団に溶け込めない悩み、社会的場面で当惑する悩み) の α 係数はそれぞれ .83, .92, .88 であった。登校回避感情尺度の α 係数は .88 で

あった。登校拒否関連性格尺度については、内弁慶因子である「聞きわけの良い子だと思う」の項目得点と、内弁慶因子合計得点との相関が極端に低かったため削除した。強迫性因子、消極・非社会的因子、内弁慶因子の α 係数はそれぞれ.79, .72, .64であった。登校拒否関連性格尺度の内弁慶因子は十分な α 係数が得られなかった。しかし、参考尺度として分析に使用した。

各尺度の平均値と標準偏差をTable 3-8に示す。自己関係づけ尺度合計得点の平均は34.5、標準偏差は10.5であった。自己関係づけ尺度12項目のうちいずれかに、“あてはまる”もしくは“ややあてはまる”と答えた人の割合は81%であり、12項目のうちいずれか1項目にでも“あてはまる”と答えた人の割合は33%であった。なお、自己関係づけ尺度について性差が見られるかどうか検討したところ、女子の得点が男子に比べて有意に高かった ($t(470)=-3.89, p<.001$)。

Table 3-8 各尺度の平均と標準偏差

	全体	男子	女子
自己関係づけ	34.55(10.5)	32.72 (10.3)	36.42 (10.3)
CDI	18.92(7.0)	19.06 (7.3)	18.68 (6.5)
登校回避感情	20.24(5.6)	20.67 (6.0)	19.62 (5.1)
自他が気になる	20.84(6.6)	20.25 (6.6)	21.43 (6.5)
集団に溶け込めない	17.76(7.6)	18.06 (7.7)	17.36 (7.3)
社会場面で当惑する	19.36(7.2)	19.97 (7.1)	18.67 (7.1)
強迫	19.38(4.0)	19.33 (4.0)	19.52 (4.0)
消極・非社会的	11.98(2.8)	12.13 (2.8)	11.77 (2.8)
内弁慶	7.14(2.1)	6.81 (2.0)	7.48 (2.1)

各尺度において、性差が見られるかどうか検討した。その他性差が見られたものは、登校回避感情、集団に溶け込めない悩み、内弁慶因子の3つであった（それぞれ $t(473)=2.09, p<.05$; $t(474)=1.98, p<.05$; $t(472)=-3.54, p<.001$ ）。これらはいずれも男子のほうが女子より有意に高かった。その他の尺度については、いずれも性差は見られなかった。

CDIの日本におけるcut-off scoreは22点以上である（村田ら, 1989）。CDIにおいて22点以上はCDI陽性であり、抑うつ疑いの疑いありと判断される。今回CDIにおいて22点以上を示した者は138名であり、全体の31.2%を占めていた。辻

井・本城（1998）による平均点プラス1.5標準偏差以上の基準では、本研究のデータからは30点以上を示した者となるが、29名であり全体の6.5%を占めていた。

各尺度得点の相関をTable 3-9 に示す。自己関係づけと抑うつとの間には有意な中程度の正の相関が見られた ($r=.41, p<.001$)。また、自己関係づけと対人恐怖心性の下位尺度である自分や他人が気になる悩みとの間には、有意なやや強い正の相関が見られた ($r=.69, p<.001$)。自己関係づけと集団に溶け込めない悩み、および自己関係づけと社会場面で当惑する悩みとの間には、有意な中程度の正の相関が見られた（それぞれ、 $r=.38, p<.001$ ； $r=.34, p<.001$ ）。自己関係づけと登校回避感情との間には、有意な弱い正の相関が見られた ($r=.23, p<.001$)。自己関係づけと登校拒否関連性格尺度の下位尺度である強迫性因子、消極・非社会的因子、内弁慶因子との間には、有意な弱い正の相関が見られた（それぞれ、 $r=.15, p<.001$ ； $r=.21, p<.001$ ； $r=.26, p<.001$ ）。

なお、対人恐怖心性は、登校拒否関連性格尺度の消極・非社会的因子との間に強い正の相関が見られた ($r=.60, p<.001$)。これは、自己関係づけと消極・非社会的因子との間の相関係数 ($r=.21, p<.001$) よりも大きかった。対人恐怖心性の下位尺度では、集団に溶け込めない悩みと消極・非社会的因子との間、および、社会場面で当惑する悩みと消極非社会的因子との間に、強い正の相関が見られた（それぞれ、 $r=.62$ ； $r=.56$ 、いずれも $p<.001$ ）。自分や他人が気になる悩みと消極・非社会的因子との間には、中程度の正の相関が見られた ($r=.34, p<.001$)。

Table 3-9 尺度間相関 (全体)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
①自己関係づけ									
②CDI	.41 ***								
③登校回避感情	.23 ***	.55 ***							
④対人恐怖的心性全体	.54 ***	.50 ***	.26 ***						
⑤自分や他人が気になる	.69 ***	.47 ***	.22 ***	.81 ***					
⑥集団に溶け込めない	.38 ***	.51 ***	.28 ***	.89 ***	.57 **				
⑦社会的場面で当惑する	.34 ***	.28 ***	.14 ***	.87 ***	.55 ***	.67 ***			
⑧強迫性	.15 ***	-.06	-.18 ***	.12 **	.09	.09	.12 *		
⑨消極・非社交的	.21 ***	.29 ***	.13 ***	.60 ***	.34 ***	.62 ***	.56 ***	.08	
⑩内弁慶	.26 ***	.16 ***	.14 ***	.21 ***	.28 ***	.13 ***	.13 ***	.02	.09

登校回避感情の上位20%を登校回避感情高群，下位20%を登校回避感情低群とした (Table 3-10)。登校回避感情の高低と性別のそれぞれを要因として，自己関係づけ得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果，交互作用が有意となった ($F(1, 169)=5.10, p<.05$)。単純主効果の検定を行ったところ，登校回避感情高群における性別の単純主効果 ($F(1, 169)=7.47, p<.01$)，女子における登校回避感情の単純主効果 ($F(1, 169)=25.15, p<.01$) が有意であった。Figure 1に4群別の平均を図示する。

Table 3-10 自己関係づけ得点の4群別の平均と標準偏差

	登校回避低群	登校回避高群
男子	31.30(9.97) n=46	36.11(13.1) n=54
女子	30.13(11.7) n=45	43.07(10.0) n=28

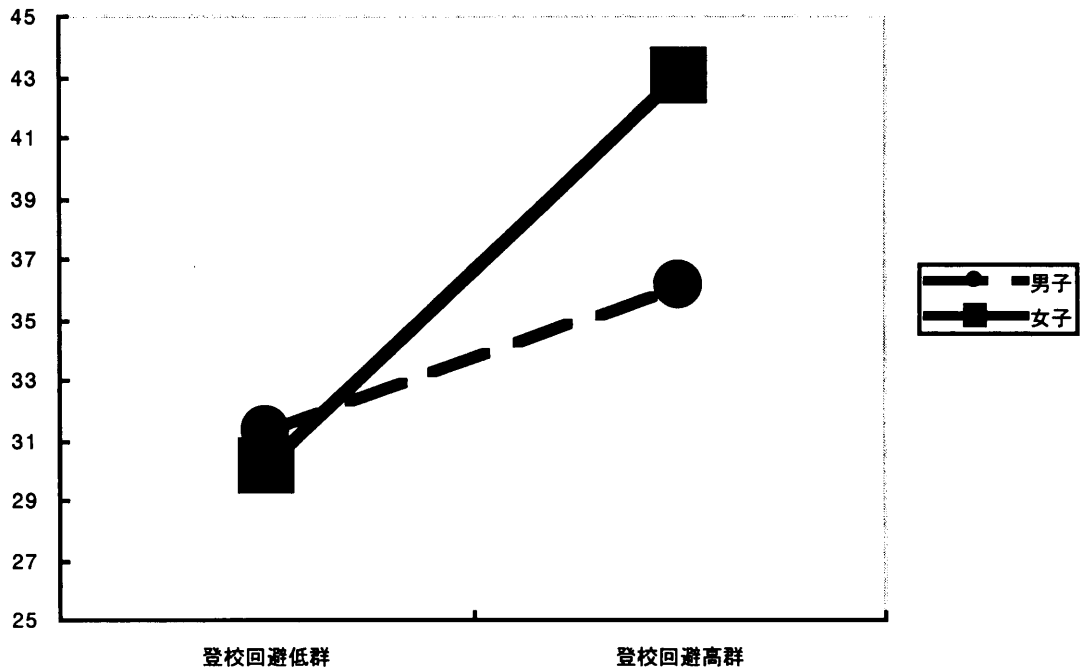


Figure 3 - 1 4群別の自己関係づけ得点

3-2-4 考察

自己関係づけ尺度の得点の分析

自己関係づけ尺度12項目のうち、いずれかの体験を認めた者の割合は81%であった。これは、一般高校生において妄想的観念が高頻度で体験されていることを示している。丹野ら（2000）の一般大学生を対象とした調査においても、妄想的観念は高頻度で体験されていることが示されている。本研究の結果から、一般高校生においても妄想的観念は、高頻度で体験されていることが示された。

青年期では、自己への関心が高まると共に内省的になり、自己のあり方について思い悩むと従来から指摘されてきた。また、友人との同調性が高い青年は、他者との比較を頻繁に行い、他者からの評価に敏感になりやすい（上野・上瀬・松井・福富，1994）。そのような中で、他者のちょっとしたしぐさや言葉を自己に被害的に関係づけることは、青年期では頻繁に起こっていることが考えられる。

ただし、本研究における改訂版自己関係づけ尺度の高校生群の平均得点は、

[研究2]の高校生群の結果に比べて、平均得点で男女共に4点高い。この点についての理由は不明であり、さらなる検討が必要と思われる。

また、女子の自己関係づけ得点は男子の自己関係づけ得点に比べて有意に高かった。これは、[研究2]の結果と一致している。女子は男子に比べて友人への欲求が高く（榎本，2000），社会志向性得点が男子よりも高い（伊藤，1993，1995）など、周囲との関係性が女子において重視されるとの指摘が多くなされている。本研究における自己関係づけは、他者の言動を自己に被害的に関係づける傾向である。そして、周囲との関係性が重要となる女子において、これらの他者の言動は、重要な意味を持つと考えられる。ゆえに、他者の言動を自己に被害的に関係づける傾向は、女子が男子よりも高くなると考えられる。

自己関係づけと対人恐怖心性との関係

自己関係づけは、対人恐怖心性と有意な正の相関が見られた ($r=.54$, $p<.001$)。特に、自己関係づけと自分や他人が気になる悩みとの相関係数は $r=.69$ と大きな値となった。このことから、自己関係づけは対人恐怖心性と深い関連性を有することが示された。しかし、自己関係づけと対人恐怖心性は、深い関連はあるものの、異なった概念であると考えられる。理由として、以下の2点が挙げられる。

第1点は、自他の方向性の違いである。自己関係づけは、自己には関係ないかもしれない出来事を自己に被害的に関係づける傾向である。自己関係づけにおいて、自己には関係ないかもしれない出来事は、他者の言動である事が多い。よって、関係の方向性は他者から自己への一方向のみである。これに対し、対人恐怖では、自己が見透かされてしまうのではないかという不安（鍋田，1997）と共に、自己の視線や表情などが相手に不快感を与えているのではないかという不安を持っている。つまり、対人恐怖では、自己から他者への方向も含んでおり、双方向性の概念である。また、対人恐怖においては、悪循環に陥っていることが指摘されている。つまり、人前で緊張して赤面したり自己の視線が自然ではない事を、相手に気づかれ笑われはしないかと恐れ、そうならないように意識すればするほど、よけいに緊張してしまう（笠原，1977）。今回、使用した対人恐怖心性の下位尺度である自分や他人が気になる悩みの中にも、「自分のことが他の人に知られているのではと気にする」や「自分が相手の人にいやな感じを与えてい

るように思う」など、自己から他者への方向性を表現した項目が含まれている。よって、自己関係づけと対人恐怖心性の下位尺度である自分や他人が気になる悩みとは、自他の方向性に違いがある。

第2点は、登校拒否関連性格尺度の消極・非社会的因子との相関のあり方の違いである。対人恐怖心性は登校拒否関連性格尺度の消極・非社会的因子との間に大きな相関を示した ($r=.60, p<.001$)。これは、自己関係づけと消極・非社会的因子との間の相関よりも大きかった ($r=.21, p<.001$)。つまり、対人恐怖心性は、消極・非社会的因子で測定される、相手の気持ちを先取りしたり、自分から進んで行動するよりも相手にあわせて行動する傾向とより関連しており、対人恐怖心性が高い場合は、他者の意向を必要以上に気にしていると考えられる。いいかえると、他者の意向を必要以上に取り入れようとしていると考えられる。それに対し、自己関係づけは、相手にあわせて行動する傾向である消極・非社会的因子とは関連が弱く、自己関係づけが高くても、他者の意向を取り入れるかどうかとはやや独立しており、必ずしも他者の意向を取り入ようとしているわけではないと考えられる。よって、自己関係づけと対人恐怖心性とは、他者の意向を取り入れるかどうかについて違いがある。

以上の2点から、自己関係づけと対人恐怖心性は深く関連しているけれども、ある程度異なった概念であると考えられる。

自己関係づけは、対人恐怖心性に比べて他者の意向を先取りする傾向とは関連が小さかった。ただし、自己関係づけは、[研究1]および[研究2]において、他者への関心のあらわれであることを示唆した。今回の結果と[研究1]および[研究2]の結果から考慮すると、自己関係づけは、他者を気にはするけれども、必ずしも他者の意向を取り入れているとは限らないことが考えられる。

自己関係づけと抑うつとの関連

自己関係づけは、抑うつ感情と有意な正の相関が見られた ($r=.41, p<.001$)。このことから、抑うつ的な状態では自己関係づけ傾向が高まると考えられる。

なお、CDIのcut-off scoreでは、全体の31.2%の者がCDI陽性となった。CDIを一般群に施行した先行研究（塩川・宮本・柳沢，1991；辻井・本城・幸，1994；辻井・幸・本城，1990）では、CDI陽性の割合はそれぞれ21.6%，16.8%，17.4%である。本研究の結果は、先行研究と比べてかなり多くの者が抑

うつ状態にあることが推測される。ただし、先行研究の多くが小中学生を対象としているのに対し、本研究では対象者が全て高校生である点、および、CDIの平均得点は年齢の上昇に伴って増加する傾向にある点（辻井・本城・幸，1996；辻井ら，1990）を考慮する必要がある。

また、CDIは抑うつ状態というよりはむしろ一般的な精神的健康の尺度としての側面をもつという指摘もある（辻井・本城，1998）。この点から、抑うつ状態の時のみに自己関係づけ傾向が高まるのか、それとも、より一般的に精神的不健康状態にある時に、自己関係づけ傾向が高まるのか、検討する必要がある。

登校拒否傾向と自己関係づけについて

分散分析の結果から、女子においては登校回避感情高群は低群よりも有意に自己関係づけ傾向の高いことが示された。女子においては男子よりも自己関係づけ傾向の高いことは先に述べた。それに加えて、学校に回避的な感情を持っている場合、女子において自己関係づけ傾向はより高まりやすいことが示された。学校嫌いの要因として、友人との間によい人間関係が形成できないことがあげられる（古市，1991）。それゆえ、女子において登校に回避的な者は、友人関係でのつまずきに敏感になりやすく、それだけ自己関係づけ傾向が高まりやすいと考えられる。

[研究4] のまとめおよび今後の課題

本研究では、一般高校生における自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向との関連を検討した。自己関係づけ尺度12項目のうち、いずれかの体験を認めた者の割合は、81%と高かった。このことから、妄想的観念は一般高校生において高頻度で体験されていることが明らかになった。また、自己関係づけは、対人恐怖心性と正の有意な相関が見られ、両者は深い関連性を有していることが示された。考察では、自己関係づけと対人恐怖心性との概念の異同について検討した。

今後の課題として、臨床診断との関連の問題があげられる。本研究では、一般高校生の対人恐怖心性・抑うつ・登校拒否傾向を扱った。しかし、いずれも自己記入式尺度を使用しており、これらの尺度のみで診断はできない。本研究の結果が臨床群にどの程度あてはまるか検討する際には、臨床家による臨床診断面接や、診断を目的とした構造化面接などを併用し、慎重に検討する必要がある。

第4章 臨床群における自己関係づけ

4-1 本章の問題と目的

妄想や妄想的観念は、分裂病や妄想性障害のみにみられるものではなく、実際には様々な精神障害にみられる。ところが、精神障害別に、妄想や妄想的観念の実態について実証的に検討した研究は少ない。そこで、本研究の第1の目的は、精神障害別における妄想的観念の実態について検討することである。

4-2 臨床群を対象とした自己関係づけに関する調査 [研究5]^{注6}

4-2-1 方法

被調査者 中部地方の大学附属病院児童精神科外来および中部地方の神経科・心療内科クリニック児童思春期外来を1999年5月から2001年8月までに受診した者であった。質問紙に回答したのは、223名（男子133名、女子93名、不明5名）であった。平均年齢は12.51歳（S.D.=3.4）であった。初診時に、外来での待合室で質問紙に回答を求めた。

測定尺度 (a)自己関係づけ尺度 [研究2]において作成した改訂版自己関係づけ尺度を使用した。全12項目からなる。5件法で回答を求めた。(b)抑うつ尺度（付録8） Kovacs (1981)によるChildren's Depression Inventory (CDI)の日本語版（村田・堤・皿田・中庭・小林, 1989）を用いた。27項目から構成されており、最近2週間の抑うつ状態を3段階で評定するようになっている。

臨床診断 初診時に、児童精神科医が診断を行った。

初診時の児童精神科医による診断を検討したところ、多岐に渡っていた。一定人数に達していた診断名は、分裂病（20名）躁鬱病（18名）登校拒否（20名）強迫神経症（11名）注意欠陥多動性障害（以下ADHDと略、24名）ヒステリー（13名）自閉症（14名）であった。これらの対象者の属性をTable 4-1に示す。

対象者の年齢について、精神障害別に差があるか、1要因の分散分析を行った

^{注6} [研究5]は、金子一史・本城秀次・猪子香代・菅原ますみ 2001 児童青年期の精神障害における自己関係づけと抑うつ-児童精神科外来の調査結果- 日本心理学会第65回大会発表論文集, 1030. を加筆・修正したものである。

(Table 4-1) . その結果, 主効果が有意となった ($F(6, 113)=12.21$, $p<.001$) . テューキー法による多重比較の結果, ADHD群は, 分裂病群・躁鬱病群・登校拒否群・強迫神経症群・ヒステリー群に比べて, 有意に年齢が低かった. また自閉症群は, 分裂病群・躁鬱病群・登校拒否群・ヒステリー群に比べて, 有意に年齢が低かった. ($MSe=7.16$, $p<.05$) . その他の群間には, 有意な差は見られなかった.

Table 4-1 対象者の属性

	人数 (男子:女子)	平均年齢 (標準偏差)	最小値	最大値
分裂病	20(9:11)	14.6(1.6)	11	17
躁鬱病	18(6:12)	14.2(1.6)	8	18
登校拒否	20(10:10)	14.2(2.9)	7	17
強迫神経症	11(4:7)	14.1(2.9)	9	18
ADHD	24(22:2)	13.3(3.1)	6	12
ヒステリー	13(2:11)	13.5(3.1)	8	17
自閉症	14(11:3)	10.3(3.5)	6	17

4-2-2 結果

全被調査者を対象として, 改訂版自己関係づけ尺度について因子分析を実行した (主成分分解) . 固有値は, 第1固有値から7.54, 0.72, 0.61, 0.57, 0.45, 0.41 . . . と変動し, 明確な1因子性が認められた. その結果をTable 4-2に示す. 1因子による説明率は, 62.8%であった. なお, 男女別に因子分析を行ったところ, 因子負荷量行列は男女で大きな違いは見られなかった. α 係数は.95であった.

Table 4-2 臨床群における改訂版自己関係づけ尺度の因子分析結果

項目	F1
1 友達が内緒話をしていると、自分の悪口を言われているのではないかと気になる.	.80
2 話している集団と目が合うと、自分の事を言われているのではないかと気になる.	.82
3 友人が悪口を言っているのを聞くと、自分の事を言っているのではないかと思う時がある.	.82
4 周囲の笑い声が、自分を笑っている様に思える時がある.	.83
5 隣に座っている人が他の席へ移動すると、自分を避けたのではないかと思うことがある.	.79
6 自分の近くにしゃべっている集団がいると、自分の事を言われているのではないかと思う時がある.	.81
7 知人が挨拶をしてくれなかった時に、無視されたと思うことがある.	.77
8 恥ずかしいことをした後、自分のことが陰で噂されているに違いないと思う.	.82
9 人が自分の方を見てしゃべっていると、自分の事を言っているのではないかと思う時がある.	.81
10 部屋に入って急に静かになると、自分の事を話題にしていたのではないかと思うことがある.	.71
11 会話や電話で沈黙が続くと、相手に嫌われているのではないかと気になる.	.74
12 いつも行動を共にしている友人が自分を誘わなかった時、自分は嫌われているのではないかと思うことがある.	.77
二乗和	7.54
寄与率	62.8%

自己関係づけ得点の平均値を産出した (Table 4-3). 自己関係づけ得点は、分裂病群において46.37点と、最も高い値となっていた。これは [研究2] における一般大学生の平均得点より、約10点高い値となっていた。分裂病群について得点が高かったのは、登校拒否群の41.67点と躁鬱病群および強迫神経症群の39.67点であった。最も自己関係づけ得点が低かったのは、自閉症群の31.50点であっ

た。自己関係づけ得点を従属変数とした，1 要因の分散分析を行った。その結果，主効果が有意となった ($F(6, 95)=2.58, p<.05$)。テューキー法による多重比較の結果，分裂病群はADHD群よりも有意に自己関係づけ得点が高かった ($MSe=163.2, p<.05$)。

Table 4-3 改訂版 自己関係づけ尺度の基本統計量

	平均	標準偏差	最小値	最大値	人数
分裂病	46.37	13.2	12	59	19
躁鬱病	39.67	10.9	13	60	18
登校拒否	41.67	14.1	12	60	18
強迫神経症	39.67	15.3	12	60	9
ADHD	32.75	13.3	12	50	16
ヒステリー	35.25	7.6	26	47	12
自閉症	31.50	14.1	12	53	10

CDIの日本におけるcut-off scoreは22点以上である(村田ら, 1989)。今回のデータにおいて，CDI得点が22点以上を示したものは有効回答者137人中68人であり，有効回答者のうち49.6%を占めていた。

抑うつ得点の平均値を産出した(Table 4-4)。分裂病，躁鬱病，登校拒否，強迫神経症，ADHD，自閉症のそれぞれにおいて，CDI得点は高い値となっていた。CDI得点を従属変数とした，1 要因の分散分析を行った。その結果，主効果は有意とはならなかった ($F(6, 66)=0.88, n.s.$)。また，診断別にCDI陽性者の割合を算出したところ，分裂病，躁鬱病，登校拒否，強迫神経症のそれぞれにおいて，60%以上の値を示した。

Table 4-4 CDIの基本統計量

	平均	標準偏差	最小値	最大値	人数	CDI陽性者人数(%)
分裂病	26.00	8.9	10	38	14	9(64.3%)
躁鬱病	23.54	7.4	9	34	13	8(62.4%)
登校拒否	24.00	6.3	13	32	15	10(66.7%)
強迫神経症	21.33	3.5	14	26	9	5(65.6%)
ADHD	19.67	11.7	3	44	9	3(33.3%)
ヒステリー	19.71	13.8	4	44	7	3(42.9%)
自閉症	19.50	10.1	7	38	6	1(16.7%)

改訂版自己関係づけ尺度とCDIの相関係数を算出した。その結果をTable 4-5に示す。

Table 4-5 改訂版自己関係づけとCDIとの相関係数

	相関係数	人数	有意水準
臨床群全体	.41	126	$p < .001$
臨床群男子全体	.36	68	$p < .01$
臨床群女子全体	.34	57	$p < .01$
分裂病	.39	14	<i>n.s.</i>
躁鬱病	.54	13	$p < .10$
登校拒否	.35	13	<i>n.s.</i>
強迫神経症	.07	7	<i>n.s.</i>
ADHD	.64	8	$p < .10$
ヒステリー	.34	7	<i>n.s.</i>
自閉症	.40	5	<i>n.s.</i>

4-3 考察

[研究5]では、大学附属病院児童精神科外来および神経科・心療内科クリニック児童思春期外来を受診した臨床群に、改訂版自己関係づけ尺度への回答を求めた。[研究2]における一般青年を対象とした調査の結果では、改訂版自己関係づけ尺度の信頼性について一定の信頼性が示された。一方、臨床群における信頼性は検討されていなかった。今回新たに臨床群を対象とした調査の結果、改訂版自己関係づけ尺度は、臨床群においても、構造的に安定した1次元的な尺度であ

り、全ての項目が一定以上の因子負荷量を持つことから、因子的妥当性が高い尺度であることが示された。また、 α 係数を算出した結果、高い内的整合性を有していることが示された。

本章の結果では、臨床群全体における改訂版自己関係づけ尺度の平均得点は、35.81であり、[研究2]における大学生群の平均得点とほぼ同レベルの値となっている。これから、自己関係づけ傾向は、臨床群が大学生群よりも高いといえないと考えるのは、慎重であらねばならないと思われる。なぜなら、本章の臨床群における平均年齢は12.51歳と大学生群に比べて低いためである。平均年齢が低いにも関わらず、自己関係づけ得点が高得点になったと考えるべきであろう。今回、実施上の制約から、年齢の低い臨床群を調査対象とすることになった。これらの点を検討するためには、小学校高学年から中学生にかけての児童思春期の一般生徒を対象とした調査を実施する必要があるだろう。加えて、青年期以降における臨床群を対象とした調査も必要である。児童思春期の一般生徒を対象としたデータと、青年期および成人期における臨床群のデータを総合して、検討する必要があると思われる。

診断名の多かった障害別に自己関係づけ得点を算出したところ、分裂病群における自己関係づけ得点は46.37点であった。これは、[研究2]における一般大学生の平均点より約10点高く、注目すべき点であると思われる。精神分裂病では、対人関係上の障害が多々報告されている。その中には、本研究で取り扱った他者の言動を自己に被害的に関連づける自己関係づけ傾向も含まれる。本研究の結果から、自己関係づけは分裂病において高頻度で体験されていることが実証的方法により新たに示された。

なお、自己関係づけ得点を従属変数とした分散分析の結果では、精神分裂病群はADHD群よりも有意に自己関係づけ得点が高かった。この点は、精神分裂病とADHDにおける自己のあり方の違いを反映している可能性があると思われる。

一般に、精神分裂病では社会的活動が低下し、対人関係から退却していく場合が多い。その過程で、対人関係に全く関心がないかというとはそうではなく、むしろ逆であることが多く指摘されている。対人交流に乏しく、一見無表情であるのに、その内には人への激しいまでの過敏性が存在しているとされている。一方、注意欠陥多動性障害では、衝動性の問題から、他者にちょっかいを出したり、い

つも人の邪魔をしたりする場合が多く、他者に不適切なやり方で介入していく場合が多い。その結果、他者から疎まれたり、他者から非難されたりしがちである。注意欠陥多動性障害においては、対人関係の困難さは中核症状から派生する二次的な障害と考えられている（白瀧，2000）。このように、対人関係に表れる不適応のあり方が、精神分裂病と注意欠陥多動障害では異なっていると考えられる。これらの点が、双方の自己関係づけ得点の差となって表れた可能性がある。

なお、その他の群間には有意な差は見られなかったものの、注目すべき点として登校拒否群をあげることができる。登校拒否群の自己関係づけ得点は、41.67点で、分裂病群の次に高い得点となっていた。[研究3][研究4]における一般高校生大学生の平均得点よりも高い値となっていた。登校拒否に見られる一般的な性格傾向としては、内向的で非社会的であり神経質（若林，1983），引っ込み思案で消極的な交友関係（鑑，1963），笑われたり恥をかいたりすることを恐れている（高木ら，1965）などの指摘がある。今回新たに本研究の結果から、登校拒否に陥っている者は対人関係において過敏になっており、他者の言動を自己に被害的に関係づけやすいことが示唆された。

なおCDIについては、CDI陽性となったものの割合は49.6%と、[研究4]の31.2%よりも多い結果となった。これは、不適応状態に陥った者が医療機関を受診すると考えられることから、妥当な結果であると思われる。ただし、精神障害別にCDIを検討した結果では、精神障害の違いで、CDI得点に有意な差は見られなかった。CDIは抑うつ感情を特異的に測定しているよりも、より一般的な精神的健康を測定しているという指摘もある（辻井・本城，1998）。本研究の結果からは、辻井・本城（1998）の指摘が支持される。しかし、被調査者が少ないこともあるので、CDIにおける抑うつ感情の感度については、被調査者を増やした検討が望まれる。

なお、自己関係づけ得点とCDI得点との相関を算出した結果、躁鬱病群においては、正の有意な相関が見られた。つまり、躁鬱病群においては、抑うつ感情が高いほど、自己関係づけ傾向も高いことが示された。

Beck（1976）は、抑うつ患者における推論の誤りを取り上げている。その中の一つに、自己関連づけ（personalization）をあげている。Beck（1976）の自己関連づけは、“自分の個人的に意味に基づいて出来事を解釈する傾向

(p.73)”とされており、他人が眉をひそめているのを見ると「あの人は私のことがひどく嫌いなんだ」と考える例をあげている。このように、Beck (1976)の自己関連づけは、本研究における自己関係づけとよく似た概念であるものの、若干異なった概念であると思われる。具体的には、Beck (1976)の自己関連づけは、遠く離れた場所で流行した伝染病の原因が自分であると思ひこむ例や、道ですれ違う全ての人々が自分を愛していると信じるといったような例などのように、現実離れした自己への関係づけを含んでいる。この点において、Beck (1976)の自己関連づけは、本研究で取り扱っている自己関係づけよりも幅広い概念であるといえる。

以上のように、Beck (1976)の自己関連づけと、本研究における自己関係づけは若干異なった概念であると考えられるものの、躁鬱病群については、抑うつ感情が高いと自己関係づけ傾向も高まることが実証的に示された。ただし、躁鬱病群以外では、ADHD群において同様の関連がみられるのみであり、その他の障害群では有意な相関が見られなかった。この点についても、被調査者を増やして今後検討する必要がある。

今回、一般青年の自己関係づけ傾向を測定する目的で作成した自己関係づけ尺度を臨床群に施行し、考察を加えた。その結果、臨床群のなかでも精神分裂病群や登校拒否群においては、一般青年よりも自己関係づけを多く体験していることが示唆された。ところが、一般青年と臨床群では、自己関係づけ傾向の表現のあり方に違いがあることも考えられる。例えば、精神病理学領域においては、精神分裂病には一般健常人には見られない特有な症状が多くあることを指摘している。それらの中でも、本研究の自己関係づけに関連が深い症状として、妄想知覚があげられる。妄想知覚とは、正常な知覚に直接的に一定の誤った意味が付与されるものである。例えば、「一匹の犬が直立した姿勢で自分に向かって前足を高くあげた。これは天の啓示に違いない」などと体験することがあげられる(小見山, 1993)。この場合、犬が前足を高くあげたと知覚すること自体は正しい。ところが、その知覚に異常な意味づけがなされている。一方、本研究で使用している改訂版自己関係づけ尺度項目には、このような異常な意味づけまでは捉えておらず、疑惑の段階を測定していると考えられる。つまり、本研究における自己関係づけは、妄想知覚などの精神病圏に特有の認知傾向までは測定していない限界

があると思われる。これらの限界はあるものの、一般健常人と臨床群の双方における自己関係づけをあわせて検討するという、本論文の利点は何ら損なわれるものではない。

なお、[研究5]における限界として、以下の2点をあげる。第1点は、改訂版自己関係づけ尺度の臨床群における妥当性が、十分には確認されていない点である。今後さらなる検討を加える必要がある。第2点は、臨床診断の問題である。児童青年期は成長発達期にあり、精神障害の診断においては成人期とは異なった困難を伴う。今回は児童精神科医による初診時の診断をもとに検討を加えた。ところが、初診時の診断が後になって別の診断に変更されることは多い。今後は、確定診断をもとにして検討することや、DSM-IVなどの操作的診断基準を用いた検討を行う必要もあろう。

第5章 総括的討論

第2章から第4章にかけて、青年期の自己関係づけに関する研究を報告した。本章の第1の目的は、それらの研究の知見をまとめ、総合的に討論することである。また本章の第2の目的は、総合的な討論をふまえた上で、今後の課題を述べることである。

5-1 本論文で得られた結果のまとめ

本論文によって実証的に行われた研究の結果は、以下の通りである。

第2章では、一般青年に見られる妄想的観念を測定するため、自己関係づけ尺度と、その改良版である改訂版自己関係づけ尺度を作成した。

2-1では、Fenigstein & Venable (1992)のパラノイア尺度を参考にして、新たな自己関係づけ尺度を作成した。85名の大学生と176名の専門学校生に、自己関係づけ尺度への記入を求めた。自己関係づけ尺度に因子分析を行った結果、自己関係づけ因子と猜疑心因子の2因子を抽出した。重回帰分析を行った結果、自己関係づけ因子は、他者意識および公的自己意識と正の関連のあることを示した。

2-2では、改訂版自己関係づけ尺度を作成した。予備調査の結果および、2-1で作成した自己関係づけ尺度の自己関係づけ因子の項目を参考にして、改訂版自己関係づけ原尺度を作成した。大学生212名に改訂版自己関係づけ原尺度への回答を求めた。改訂版自己関係づけ原尺度に因子分析を行った結果、12項目からなる改訂版自己関係づけ尺度を作成した。内的整合性の指標である α 係数は.90と十分な値を示した。加えて、安定性の指標である再検査信頼性は、.76と十分な値を示した。また、自己意識尺度（辻，1993）、自尊心尺度（山本・松井・山成，1982）、不信尺度（天貝，1995）の各変数を使用して構成概念妥当性について検討した。その結果、全て予測と一致する結果を得た。このことから、改訂版自己関係づけ尺度の構成概念妥当性について、おおむね確認した。

第3章では、自己関係づけについて、発達の視点から検討した。

3-1では、高校生465名と大学生205名に改訂版自己関係づけ尺度への回答を

求めた。その結果、大学生は高校生に比べて、改訂版自己関係づけ尺度の得点が高かった。よって、大学生は高校生に比べて自己関係づけ傾向の高いことを示唆した。重回帰分析の結果、高校生は男女共に、自己関係づけに他者意識と個人志向性が関連していた。一方、大学生では、男女で自己関係づけへの関連のあり方に異なる傾向があった。つまり、大学生女子では、高校生と同様の結果であったのに対し、大学生男子では、自己関係づけに他者意識と自尊心が関連していた。

3-2では、高校生487名に改訂版自己関係づけ尺度への回答を求めた。その結果、自己関係づけは、対人恐怖心性および抑うつ感情と正の関連があった。また、女子において学校に回避的な者ほど、自己関係づけ傾向は高まることを示した。

第4章では、臨床群における自己関係づけを検討した。

4-1では、精神科外来を受診した223名を対象に、改訂版自己関係づけ尺度への回答を求めた。その結果、内的整合性の指標である α 係数は.95と十分な値を示し、臨床群における改訂版自己関係づけ尺度の内的整合性が示された。精神障害別に自己関係づけ得点を算出した結果、精神分裂病群の平均得点は、第3章における大学生群の平均得点よりも、約10点高いことが示された。分散分析の結果では、分裂病群はADHD群よりも自己関係づけ得点が高かった。また、自己関係づけ尺度と抑うつ尺度との相関を算出した結果、躁鬱病群とADHD群においては、自己関係づけと抑うつとの間に正の相関が見られた。ところが、精神分裂病群においては、自己関係づけと抑うつとの間には、有意な相関が見られなかった。これらの結果から、精神分裂病とADHDとの自己概念のあり方について、考察を加えた。

5-2 本論文の成果と討論

本論文の目的は、第1に一般青年における自己関係づけの実態を明らかにすることであった。第2に、臨床群における自己関係づけの実態を明らかにすることであった。そして第3に、一般青年と臨床群との自己関係づけを比較検討することであった。上記の目的のために、[研究1]から[研究5]までを通して、5-1にまとめたような結果を得た。ここでは、それらをもとに本論文で得られた成果を検討し、あわせて本論文の問題点や今後の課題について述べる。

一般青年における自己関係づけと内省力

本研究の結果から、一般青年においても他者の行動を自己に被害的に関連づける自己関係づけは頻繁に体験されていることが明らかになった。[研究4]の結果では、改訂版自己関係づけ尺度12項目のうち、いずれかの項目を肯定している人の割合は81%と高い割合になっている。丹野ら（2000）の妄想観念チェックリスト（DICL）を使用した結果においても、一般青年が高頻度で妄想的観念を体験していることが示されている。また、Fenigstein & Venable (1992)のパラノイア尺度を使用した結果においても、多くの青年がパラノイア思考を経験していることが示されている。

一般に、青年期は自己への関心が高まる時期であるとされる。自己のあり方などについて思い悩み、時には劣等感を何とか克服しようとして焦ったり、自分らしさを獲得するためにもがいたりする。そのような状況で、他者から自己がどう見られているかなどを気にするようになるといえよう。その際、他者のちょっとしたしぐさや言動を自己に被害的に結びつけることは珍しいことではないと考えられる。一般的にも自意識過剰などとして捉えられてきた。青年期において、これらの被害妄想的な観念が体験されていることを実証的な方法によって示したことは、本論文の大きな成果の一つといえる。

また、自己関係づけは、[研究3]において、高校生に比べて大学生に多く体験されていることが明らかとなった。この点については3-1-4において述べたが、自己関係づけには発達の要因が関連していることが考えられる。そして、発達要因の一つとして、内省力をあげるができると思われる。

青年期後期にあたる大学生の年代においては、自己を客観視しようとする内省力が備わってくる。また、自我同一性の確立をめぐる葛藤することになり、深刻な危機に直面する青年も多くなる。そのような中で、他者の行動を自己との間に結びつけて被害的に認知するということは、それだけ自己に対する内省力が存在しないと不可能であるといえる。児童期においては、本論文においてデータがないので明白な討論ができないものの、自己関係づけは低いと想定される。これは、自己に対する内省力が未成熟と考えられることと関連していると思われる。自己に対する内省力は、青年期中期にあたる高校生においても備わっていると考えられるものの、青年期後期の大学生においてより確立されてくるといえよ

う。

なお、内省力はあくまでも要因の一つと考えられる。自己関係づけが起こるためには、一定の自己に対する内省力が必要ではあるものの、内省力がある全ての人が自己関係づけを起こすわけではない。物事を自己に関係づける際に、なぜ被害的に関連づけるのかについては、非常に興味深い点である。ところが、本研究ではこの点について十分に取り扱うことができなかった。今後は、より詳細に検討する必要がある。

自己関係づけと他者意識

[研究1]と[研究3]の結果から、自己関係づけは他者意識と関連があることを示した。妄想的観念については、自己意識の視点から検討されてきた。これらの研究では、妄想的観念と公的自己意識との関連を指摘している (Fenigstein & Vanable, 1992 ; Fenigstein, 1984) 。ところが、妄想的観念に他者意識からアプローチした研究は見あたらなかった。これは、欧米圏では“他者のことを意識したり気にかけたりする他者意識は、他者にどう見られているかを気にする公的自己意識に吸収され、それ自身は不問に付されるという結果になった (辻, 1993, p.151) ” ためであると考えられる。つまり、欧米圏では他者への意識を公的自己意識から区別して検討する機会は、ほとんど存在しなかったと思われる。

ところが、自己関係づけが起こる時には、紛れもなく他者に注意を向けていることになる。他者のことを全く気にしないのなら、自己関係づけは起こり得ないともいえる。つまり、他者のことを気にしているからこそ、自己関係づけが成り立つといえよう。一般青年に見られる妄想的観念が、他者への関心と深い関連にあることを示した点は、本研究の重要な成果である。

自己関係づけの男女差

[研究3]と[研究4]の結果から、女子は男子よりも自己関係づけ傾向の高いことが示された。女子においては、男子に比べて周囲との関係性を重視しているという指摘は多い。3-1-4でも述べたように、女子は男子に比べて、周囲との関係性を保持しながら発達し (加藤・高木, 1980) , 社会志向性が高く (伊藤, 1993 ; 1995) , 友人への欲求が高い (榎本, 2000) 。よって、女子においては周囲との関係性を重視するために、他者の言動を自己に被害的に関連づけやすい

ことが示唆される。

ただし、Fenigstein & Venable (1992)のパラノイア尺度においては、男子の得点が女子よりも高い傾向にあった。このように、本研究における自己関係づけ尺度とパラノイア尺度では、男女差のあり方に違いがある。その要因として2点あげることができる。一つは、尺度の特徴の違いである。Fenigstein & Venable (1992)のパラノイアは、自己関係づけの他に、不信感や猜疑心、被注察感を含む幅広いものである。一方本研究における自己関係づけは、他者の言動を自己に被害的に関連づける傾向のみをさしており、被注察感などは概念に含めていない。これらの尺度における特徴の差異が、男女差のあり方の違いに影響した可能性がある。

二つ目は、文化的要因を挙げることができる。Fenigstein & Venable (1992)の被調査者はアメリカの大学生であった。一方、本研究の被調査者は日本の高校生および大学生であった。ここで、欧米圏の自己と日本におけるの自己のあり方には違いがあることも指摘されていることを考慮すると（北山・唐沢，1995；高田，1999），今回の矛盾した知見には、自己のあり方における文化差が表れていることを示唆しているとも考えられる。

Markus & Kitayama (1991)は、文化的自己観として相互独立的自己観と相互協調的自己観の区分を提唱している。前者は、自己は他者や周りのことごととは区別され、切り離された実体として捉えられ、西洋文化、特に北米中流階級に典型的とされる。後者は、自己は他者や周りのことごとと結びついて、関係志向的実体として捉えられ、日本を含む東洋文化で優勢である。Markus & Kitayamaの他にも、自己と他者との関係性に注目した概念は多くある（例えば、伊藤，1993など）。そして、日本の成人では、女子が男子に比べて相互協調性が高く（高田，1999），社会志向性が高い（伊藤，1993；1995）という報告がある。加えて木内（1995）は、大学生と成人のデータにおいて、女子は男子よりも相互依存的自己理解が優勢であることを報告している。これらのように、女子においては、他者および周囲とのつながりが重要な基準となりやすいことが、実証的な方法により報告されている。したがって、相互協調的自己観が優勢となる日本のなかでも、女子はとりわけ周囲とのつながりを重要視するために、日本における自己関係づけ得点は、女子が男子よりも高くなることが考えられる。

ただし、高校生においては相互協調性に性差はないとの指摘もある（高田，1999）。ちなみに、自己関係づけについて、高校生を対象とした[研究4]の結果では、自己関係づけは男子に比べて女子の方が高かった。したがって、女子高校生年代における、自己関係づけと自己と他者と関係性との関連については、より慎重な検討が必要である。

パラノイアスペクトラムからみた精神障害者の妄想

本論文では、1-4で述べたように、一般健常人に見られる妄想的観念から精神障害者に見られる妄想までの間について、一定の連続性を認めるパラノイアスペクトラム説の立場を採用した。ここでは、本論文におけるデータをパラノイアスペクトラム説から検討する。

[研究1]および[研究3]の結果から、一般青年において、自己関係づけと他者意識に正の関連があることを示した。つまり、他者に敏感な者ほど、他者の言動を自己に被害的に関連づけやすいことが示唆される。[研究1]および[研究3]の結果は、一般青年を対象にしたものである。そこで、[研究1]および[研究3]の結果から、精神障害者の妄想を類推すると、以下のことが示唆される。つまり、精神障害者の被害妄想や関係妄想は、他者への並々ならぬ関心のあらわれではないのだろうか。実際に、臨床場面で見られる精神障害者の被害妄想や関係妄想は、ほとんどが人に関する内容である。「CIAに追いかけている」「テレビにカメラが入っており、自分は監視されている」などという現実離れした被害妄想であっても、その内容の多くが人に関係した主題である。よって、荒唐無稽な被害妄想や関係妄想でも、他者への並々ならぬ関心のあらわれと見ることも可能であると考えられる。この視点を持つことは、実際の臨床場面において対象者を理解する際に、大変有益であると考えられる。

5-3 今後の課題

多次元アプローチ

妄想に対して、多次元的なアプローチが試みられている。妄想の有無のみを検討するのではなく、確信度や占有度や干渉度などを測定尺度に加えて、多次元で

妄想を検討している研究が増えつつある (Brett-Jones, Garety, & Hemsley, 1987 ; Chadwick & Lowe, 1990, 1994, ; Garety & Hemsly, 1987 ; Sharp, Fear, Williams, Healy, Lowe, Yeadon, & Holden, 1996) . 自己関係づけの現れ方については、一般健常群と臨床群とでは異なっている可能性がある。これらの多次元的な測定方法を用いることで、一般健常群と臨床群とでは、どの部分まで連続性が想定できるのか、明らかになる可能性がある。

状況要因-曖昧な状況

第2に、状況要因が自己関係づけに与える影響を検討することがあげられる。本研究では、自己関係づけを個人の比較的安定した性格特性としてとらえて検討を行った。しかし、自己関係づけを状況から捉える視点も有用であると思われる。つまり、自己関係づけが高まりやすい状況というのも考えられる。本研究で取り扱った被害自己関係づけも、状況依存性のあることが予想される。なかでも、曖昧な状況においては、自己関係づけが高まることが考えられる。例えば、「友達が内緒話をしていると、自分の悪口を言われているのではないかと気になる」という状況では、友達の内緒話の内容が明らかになっている場合よりも、明らかになっていない場合において、自己関係づけが起りやすいと予想できる。

また、他者の社会的地位が自己に比べて上位にある場合では、自己関係づけが起りやすいことも考えられる。つまり、自分の後輩や部下よりも、上司や先輩との間において、自己関係づけが起りやすいと考えられる。本研究では他者の要因の重要性が示唆されたが、他者というのは状況によって自己に与える影響が異なっていると考えられる。よって、他者の心理社会的地位が自己関係づけに影響を与えていることが考えられる。

これらのように、おかれている状況の曖昧さや、他者の心理社会的地位を考慮することによって、より多面的に自己関係づけを検討することが可能になると思われる。

認知行動療法による妄想への臨床的介入

第3に、精神障害者における妄想への認知行動療法による介入があげられる。元来、精神病は異常であり、妄想などの陽性症状には心理的治療が積極的に行われることはなかった。ところが、幻聴や妄想などの陽性症状に対して認知行動療法を適用した報告が、近年になってなされるようになってきた。その結果、症状

の改善をもたらしたという報告が増えてきている(Chadwick & Lowe, 1994; Kinderman & Bentall, 1997a; 町沢静夫, 1999). また, 妄想への認知行動療法による具体的な介入法についても, 体系化したテキストが出版されている (Chadwick, Birchwood, & Trower, 1996) . 今後は, 一般健常人における妄想的観念や, 精神障害者における妄想の研究知見を積み重ねながら, これらの問題への積極的な介入が望まれる.

引用文献

- 阿部隆明・宮本忠雄 1994 妄想研究の現状 精神医学, 36, 340-352.
- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- アメリカ精神医学会 1996 DSM-IV精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院 (American Psychiatric Association 1994 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Forth Edition ; DSM-IV. Washington, DC: Author.
- ベック A. T. 1990 大野裕 (訳) 認知療法 岩崎学術出版社 (Beck A.T. 1976 Cognitive Therapy and the Emotional Disorders. International Universities Press: New York.)
- Bentall, R. P. 1994 Cognitive biases and abnormal beliefs: Towards a model of persecutory delusions. In David, A. S., & Cutting, J. C. (Eds.), *The neuropsychology of schizophrenia*. Brain damage, behaviour and cognition series. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 337-360.
- Bentall, R. P., Kaney, S., & Bowen-Jones, K. 1995 Persecutory delusions and recall of threat-related, depression-related, and neutral words. *Cognitive Therapy & Research*, 19, 445-457.
- Bentall, R. P., Kaney, S., & Dewey, M. E. 1991 Paranoia and social reasoning: An attribution theory analysis. *British Journal of Clinical Psychology*, 30, 13-23.
- Bentall, R. P., Kinderman, P., & Kaney, S. 1994 The self, attributional processes and abnormal beliefs: Towards a model of persecutory delusions. *Behaviour Research & Therapy*, 32, 331-341.
- Brett-Jones, J. R., Garety, P. A., & Hemsley, D. R. 1987 Measuring delusional experiences: A method and its application. *British Journal of Clinical Psychology*, 26, 257-265.

- Buss, A. H. & Durkee, A. 1957 An Inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 343–348.
- Candido, C. L., & Romney, D. M. 1990 Attributional style in paranoid vs. depressed patients. *British Journal of Medical Psychology*, **63**, 355–363.
- Carver, C. S. 1975 Physical aggression as a function of objective self-awareness and attitudes toward punishment. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 510–519.
- Chadwick, P. D., Birchwood, M. J., & Trower, P. 1996 *Cognitive therapy for delusions, voices and paranoia*. Chichester: John Wiley & Sons.
- Chadwick, P. D., & Lowe, C. F. 1990 Measurement and modification of delusional beliefs. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, **58**, 225–232.
- Chadwick, P. D. J., & Lowe, C. F. 1994 A cognitive approach to measuring and modifying delusions. *Behaviour Research & Therapy*, **32**, 355–367.
- Corcoran, R., Cahill, C., & Frith, C. D. 1997 The appreciation of visual jokes in people with schizophrenia: A study of 'mentalizing' ability. *Schizophrenia Research*, **24**, 319–327.
- Corcoran, R., Mercer, G., & Frith, C. D. 1995 Schizophrenia, symptomatology and social influence: Investigating "theory of mind" in people with schizophrenia. *Schizophrenia Research*, **17**, 5–13.
- Dahlstorm, W. G., Welsh, G. S., & Dahlstorm, L. F. 1975 *An MMPI handbook: Vol. 2. Research applications*. Minneapolis, MN: University of Minnesota.
- Doody, G. A., Goetz, M., Johnstone, E. C., Frith, C. D., & Cunningham Owens, D. G. 1998 Theory of mind and psychoses. *Psychological Medicine*, **28**, 397–405.
- Duval, S. 1976 Conformity on a visual task as a function of personal novelty

- on attitudinal dimensions and being reminded of the object status of self. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 87-98.
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の變化
教育心理学研究, **47**, 180-190.
- 榎本淳子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453.
- Fenigstein, A. 1984 Self-consciousness and the overperception of self as a target. *Journal of Personality & Social Psychology*, **47**, 860-870.
- Fenigstein, A. 1995 Paranoia and self-focused attention. In Oosterwegel, A., & Wicklund, R. A. (Eds.), *The self in European and North American culture: Development and processes*. Boston: Kluwer Academic Publishers Pp. 183-192.
- Fenigstein, A., & Levine, M. P. 1984 Self-attention, concept activation, and the causal self. *Journal of Experimental Social Psychology*, **20**, 231-245.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Fenigstein, A., & Venable, P. A. 1992 Paranoia and self-consciousness. *Journal of Personality & Social Psychology*, **62**, 129-138.
- Garety, P. A., & Freeman, D. 1999 Cognitive approaches to delusions: A critical review of theories and evidence. *British Journal of Clinical Psychology*, **38**, 113-154.
- Garety, P. A., & Hemsley, D. R. 1987 Characteristics of delusional experience. *European Archives of Psychiatry & Neurological Sciences*, **236**, 294-298.
- Gibbons, F. X. 1990 Self-attention and behavior: a review and theoretical update. In Zanna, M. P. (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 23. New York : Academic Press. Pp. 249-303.

- ガンダーソン J. G. 松本雅彦・石坂好樹・金吉晴（訳）1988 境界パーソナリティー障害 -その臨床病理と治療- 岩崎学術出版社 (Gunderson, J. G. 1984 *Borderline personality disorder*. Washington DC; American Psychiatric Press.)
- Huq, S. F., Garety, P. A., & Hemsley, D. R. 1988 Probabilistic judgements in deluded and non-deluded subjects. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, **40A**, 801-812.
- Havener, P. H., & Izard, C. E. 1962 Unrealistic self-enhancement in paranoid schizophrenics. *Journal of Consulting Psychology*, **26**, 65-58.
- Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.
- 昼田源四郎 1989 分裂病者の行動特性 金剛出版
- 本城秀次・高村咲子・数田早智子・佐々木靖子・橘浩太・西出隆紀・西出弓枝
1999 不登校症例における抑うつと登校回避感情について 厚生省「精神・神経疾患研究委託費」8公-3乳幼児期から思春期の行動・情緒および心理的発達障害の病態と治療に関する研究. 平成10年度研究報告書, 119-125.
- 堀井俊章・小川捷之 1997 対人恐怖心性尺度の作成（続報） 上智大学心理学年報, **21**, 43-51.
- 藤垣由実 1996 登校回避感情と友人関係ストレスとの関連について-自己概念と対処方略の視点から- 名古屋大学大学院教育学研究科修士論文, 未公刊
- 古市裕一 1991 小・中学校の学校嫌い感情とその規定要因 カウンセリング研究, **24**, 123-127.
- 池田善英 1997 「自意識過剰」現象の研究（1）：パラノイアが及ぼす効果 立教大学心理学科研究年報, **39**, 43-51.
- 石垣琢磨 2001 幻聴と妄想の認知臨床心理学 東京大学出版会
- 伊藤美奈子 1993a 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **64**, 115-122.

- 伊藤美奈子 1993b 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学研究, **41**, 293-301.
- 伊藤美奈子 1995a 孤独感類型の変化から見た個人志向性・社会志向性の発達過程 心理学研究, **66**, 10-15.
- 伊藤美奈子 1995b 個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討 心理臨床学研究, **13**, 39-47.
- ヤスパース K. 1971 西丸四方 (訳) 精神病理学原論 みすず書房 (Jaspers, K. 1913 *Allgemeine Psychopathologie*. Berlin: Springer.)
- 梶田叡一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
- Kaney, S., & Bentall, R. P. 1989 Persecutory delusions and attributional style. *British Journal of Medical Psychology*, **62**, 191-198.
- Kaney, S., & Bentall, R. P. 1992 Persecutory delusions and the self-serving bias: Evidence from a contingency judgment task. *Journal of Nervous & Mental Disease*, **180**, 773-380.
- Kaney, S., Bowen-Jones, K., & Bentall, R. P. 1999 Persecutory delusions and autobiographical memory. *British Journal of Clinical Psychology*, **38**, 97-102.
- Kaney, S., Wolfenden, M., Dewey, M. E., & Bentall, R. P. 1992 Persecutory delusions and recall of threatening propositions. *British Journal of Clinical Psychology*, **31**, 85-87.
- 笠原嘉 (編) 1972 正視恐怖・体臭恐怖—主として精神医学との境界例について 医学書院
- 笠原嘉 1977 青年期 中央公論社
- 笠原嘉 1993 対人恐怖 加藤正明 (編) 新版精神医学事典 弘文堂
- 笠原嘉・藤縄昭 1978 妄想 大橋博司・保崎秀夫 (編) 現代精神医学大系3A 精神症候学 I 中山書店 Pp. 233-338.
- 金子一史 1999 被害妄想的心性と他者意識および自己意識との関連について 性格心理学研究, **8**, 12-22.
- 金子一史 2000 青年期心性としての自己関連づけ 教育心理学研究, **48**,

473-480.

- 金子一史 2001 妄想的観念および妄想に関する研究の概観 名古屋大学大学院
教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **48**, 163-174.
- 金子一史・本城秀次・猪子香代・菅原ますみ 2001 児童青年期の精神障害にお
ける自己関係づけと抑うつ-児童精神科外来の調査結果- 日本心理学会
第65回大会発表論文集, 1030.
- 加藤隆・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念のとの関係
教育心理学研究, **28**, 72-76.
- Kessler, R. C., McGonagle, K. A., Zhao, S., Nelson, C. B., Hughes, M.,
Eshleman, S., Wittchen, H.-U., & Kendler, K. S. 1994 Lifetime
and 12-month prevalence of DSM-III-R psychiatric disorders in
the United States: Results from the National Comorbidity Study.
Archives of General Psychiatry, **51**, 8-19.
- Kinderman, P. 1994 Attentional bias, persecutory delusions and the self-
concept. *British Journal of Medical Psychology*, **67**, 53-66.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 1996a A new measure of causal locus: The
Internal, Personal and Situational Attributions Questionnaire.
Personality & Individual Differences, **20**, 261-264.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 1996b Self-discrepancies and persecutory
delusions: Evidence for a model of paranoid ideation. *Journal of
Abnormal Psychology*, **105**, 106-113.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 1997a Attribution therapy for paranoid
delusions: A case study. *Behavioural & Cognitive Psychotherapy*,
25, 269-280.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 1997b Causal attributions in paranoia and
depression: Internal, personal, and situational attributions for
negative events. *Journal of Abnormal Psychology*, **106**, 341-345.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 1998 The clinical implications of a psy-
chological model of paranoia. In Sanavio, E. (Ed.), *Behavior and cog*

- nitive therapy today: Essays in honor of Hans J. Eysenck*. Oxford: Elsevier Science. Pp. 131-162.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 2000 Self-discrepancies and causal attributions: Studies of hypothesized relationships. *British Journal of Clinical Psychology*, **39**, 255-273.
- Kinderman, P., Kaney, S., Morley, S., & Bentall, R. P. 1992 Paranoia and the defensive attributional style: Deluded and depressed patients' attributions about their own attributions. *British Journal of Medical Psychology*, **65**, 371-383.
- 北村俊則 2000 精神・心理症状学ハンドブック 日本評論社
- 北山忍・唐澤真弓 1995 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究, 35, 133-163.
- 小見山実 1993 妄想気分 加藤正明（編）新版精神医学事典 弘文堂
- 小見山実 1993 妄想知覚 加藤正明（編）新版精神医学事典 弘文堂
- Kovacs, M. 1983 Children's Depression Inventory: A self-rated depression scale for school-aged youngsters. Unpublished manuscript, University of Pittsburg School of Medicine.
- Lyon, H. M., Kaney, S., & Bentall, R. P. 1994 The defensive function of persecutory delusions: Evidence from attribution tasks. *British Journal of Psychiatry*, **164**, 637-646.
- 町沢静夫 1999 分裂病者の妄想に対する認知療法的試み 精神療法, **25**, 225-231.
- Maher, B. A. 1974 Delusional thinking and perceptual disorder. *Journal of Individual Psychology*, **30**, 98-113.
- Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-153.
- 三原亘 1998 共感性尺度の認知的側面に関する一研究 性格心理学研究, **6**, 152-153.

- 長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 宮本忠雄 1982 妄想研究とその周辺 弘文堂
- 村田豊久・堤龍喜・皿田陽子・中庭洋一・小林隆児 1989 児童・思春期の抑うつ状態に関する臨床的研究-II. CDIを用いての検討. 厚生省「精神・神経疾患研究委託費」63公-3 児童・思春期精神障害の成因および治療に関する研究. 昭和63年研究報告書, 69-76.
- 鍋田恭隆 1997 対人恐怖・醜貌恐怖 金剛出版
- 永井徹 1998 対人不安における心理的・認知的アセスメント 精神科診断学, 9, 479-488.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- Ohbuchi, K. 1982 Negativity bias: Its effects in attribution, hostility, and attack-instigated aggression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 49-53.
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心 サイエンス社
- 大平英樹 1989 怒りの動機と反応に対する自己意識の影響 社会心理学研究, 4, 30-37
- 大野裕 1993 境界型人格障害 加藤正明(編) 新版精神医学事典 弘文堂
- 岡田努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.
- 岡田努・永井徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連 心理学研究, 60, 386-389.
- 荻野恒一 1968 限界状況における集団的幻覚体験について-冬山遭難時の幻覚の現象学的記述と精神医学的考察 精神医学, 10, 79-84.
- 荻野恒一 1978 「状況」の精神病理 弘文堂
- Phillips, L. D., & Edwards, W. 1966 Conservatism in a simple probability inference task. *Journal of Experimental Psychology*, 72, 346-354.
- Rogers, T. B., Kuiper, N. A. & Kirker, W. S. 1977 Self-reference and the

- encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 677-688.
- 坂本真士 1995 抑うつと不安における正常と異常 精神科診断学, **6**, 131-142.
- 坂本真士 1997 抑うつと自己注目の社会心理学 東京大学出版会
- 坂本真士 2000 アナログ研究 下山晴彦(編) 臨床心理学研究の技法 福村出版 Pp. 119-125.
- Sarfati, Y., Hardy-Bayle, M. C., Besche, C. & Widlocher, D. 1997 Attribution of intentions to others in people with schizophrenia: A non-verbal exploration with comic strips. *Schizophrenia Research*, **25**, 199-209.
- Scheier, M.F., Buss, A. H., & Buss, D. M. 1978 Self-consciousness, self-report of aggressiveness and aggression. *Journal of Research in Personality*, **12**, 133-140.
- Scheier, M. F. & Carber, C. S. 1983 Self-directed attention and the comparison of self with standards. *Journal of Experimental Social Psychology*, **19**, 205-222.
- 関根義夫(編著) 1992 精神医学レビュー No.5 妄想 ライフ・サイエンス
- 塩川宏郷・宮本信也・柳沢正義 1991 小児における抑うつ of 発達性因子-年長小学生および中学生を対象とした自己評価尺度 Children's Depression Inventory(CDI)による検討- 小児の精神と神経, **31**, 107-111.
- 白瀧貞昭 2000 ADHDの精神療法的アプローチ 精神療法, **26**, 246-252.
- Smari, J., Stefansson, S., & Thorgilsson, H. 1994 Paranoia, self-consciousness, and social cognition in schizophrenics. *Cognitive Therapy and Research*, **18**, 387-399.
- Strauss, J. S. 1969 Hallucinations and delusions as points on continua function. *Archives of General Psychiatry*, **20**, 581-586.
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (Self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.

- 高木隆郎・川端つね・藤沢惇子・加藤典子 1965 学校恐怖症の典型像(I) 児童
青年精神医学とその近接領域, 6, 146-156.
- 高橋俊彦 1995 妄想症例の研究 金剛出版
- 高橋俊彦 1999 妄想の精神病理学-パラノイア性患者への精神療法的接近- 精
神療法, 25, 196-204.
- 高田利武 1999 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程-比較文
化的・横断的資料による実証的検討- 教育心理学研究, 47, 480-489.
- 滝村美保子 1991 パラノイド傾向と攻撃行動 応用社会学研究 東京国際大学
大学院社会学研究科, 1, 62-79.
- 丹野義彦 2001 妄想と幻覚の認知モデル 精神科診断学, 12, 131-147.
- 丹野義彦・石垣琢磨 1997 妄想症状の構造化の試み 日本心理学会第61回大
会発表論文集, 162.
- 丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典 2000 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成
心理学研究, 71, 379-386.
- 丹野義彦・坂本真士 2001 自分の心から読む臨床心理学入門 東京大学出版会
- 鐘幹八郎 1963 学校恐怖症の研究(I)-症状形成にかんする分析的考察- 児童青
年精神医学とその近接領域, 4, 221-235.
- Tennen, H., & Herzberger, S. 1987 Depression, self-esteem, and the ab-
sence of self-protective attributional biases. *Journal of Personality
& Social Psychology*, 52, 72-80.
- 辻平治郎 1989 他者の内面への関心, 外面への関心, および空想的関心-他者
意識概念の明確化とその測定- 甲南女子大学人間科学年報, 14, 31-
48.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 辻井正次・本城秀次 1998 不適応現象の実際とその評価-児童期の抑うつ- 精
神科診断学, 9, 189-199.
- 辻井正次・本城秀次・幸順子 1994 CDIの構成概念妥当性の検討と教育相談へ
の適用 名古屋大学教育学部紀要-教育心理学科-, 41, 103-112.

- 辻井正次・本城秀次・幸順子 1996 母親からみた児童・思春期の子どもの抑うつ状態-子どもの自己評価尺度との関連から- 小児の精神と神経, **36**, 345-351.
- 辻井正次・幸順子・本城秀次 1990 児童・思春期の抑うつ状態に関する研究-健全児童を対象として- 名古屋大学教育学部紀要-教育心理学科-, **37**, 129-139.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21-28.
- White, P. A. 1991 Ambiguity in the internal/external distinction in causal attribution. *Journal of Experimental Social Psychology*, **27**, 259-270.
- 若林明雄 1997 認知機能障害としての精神分裂病 心の理論仮説からみたメタ表象機能障害としての分裂病症状の理解 上越教育大学研究紀要, **17**, 13-29.
- 若林慎一郎 1983 登校拒否の現況と背景 臨床精神医学, **12**, 815-823.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- 山下格 1970 対人恐怖について 精神医学, **12**, 365-374.
- Zimbardo, P. G., Andersen, S. M., & Kabat, L. G. 1981 Induced hearing deficit generates experimental paranoia. *Science*, **212**, 1529-1531.

付録 本研究で使用した質問項目一覧

①自己関係づけ尺度

自己関係づけ因子

1. 人が自分の方を見てしゃべっていると、自分のことを言っているのではないかと思う時がある。
2. 知人が挨拶をしてくれなかった時に、無視されたと思うことがある。
3. 陰で噂されていると思う。
4. 教室に入って急に静かになると、自分のことを話題にしていたのではないかと思うことがある。
5. 隣に座っている人が他の席へ移動すると、自分を避けたのではないかと思うことがある。
6. しばしば知らない人が私を批判的に見ている様子が気になる。
7. 戸外で、車や店の中から私を見ている人が苦になる。
8. 誰かが、私の心に影響を与えようとしている。

猜疑心因子

9. 私は、自分が期待しているよりも親しげに接してくる人には警戒する傾向がある。
10. 誰も信用しない方が無難だ。
11. 大抵の人は、自分の役に立ちそうだという理由で友達を作る。
12. たびたび訳もなく罰せられてきたと思う。
13. 私の身に起こったことについて、本当に興味を持っている人は誰もいない。
14. 両親や家族は、必要以上に私の欠点を見つけだす。
15. しばしば、周りの人に失望させられる。
16. 人々は私について無礼で冷酷なことをいう。
17. 大抵の人は、他人のために骨を折って助けることを、内心ではいやがっている。
18. 大抵の人は、利益や利点を失うよりはむしろそれを得ようとして、少し不正な手段を使う。
19. 私は日々の生活の中で、不公平な扱いをされていると思う。
20. 私に恨みをもっている人がいる。

②改訂版自己関係づけ尺度

1. 友達が内緒話をしていると、自分の悪口を言われているのではないかと気になる。
2. 話している集団と目が合うと、自分の事を言われているのではないかと気になる。
3. 友人が悪口を言っているのを聞くと、自分の事を言っているのではないかと思う時がある。
4. 周囲の笑い声が、自分を笑っている様に思える時がある。
5. 隣に座っている人が他の席へ移動すると、自分を避けたのではないかと思うことがある。
6. 自分の近くにしゃべっている集団がいて、自分の事を言われているのではないかと思う時がある。
7. 知人が挨拶をしてくれなかった時に、無視されたと思うことがある。
8. 恥ずかしいことをした後、自分のことが陰で噂されているに違いないと思う。
9. 人が自分の方を見てしゃべっていると、自分の事を言っているのではないかと思う時がある。
10. 部屋に入って急に静かになると、自分の事を話題にしていたのではないかと思うことがある。

11. 会話や電話で沈黙が続くと、相手に嫌われているのではないかと気になる。
12. いつも行動を共にしている友人が自分を誘わなかった時、自分は嫌われているのではないかとすることがある。

③他者意識尺度（辻，1993）

内的他者意識

1. 他者の心の動きをいつも分析している。
2. 人の考えを絶えず読みとろうとしている。
3. 人のちょっとした気分の変化でも 敏感に感じてしまう。
4. 他者の態度や表情を気をつけてみるようにしている。
5. 人の気持ちを理解するように常に心がけている。
6. 人の言動には絶えず注意を払っている。
7. 他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない。

外的他者意識

8. 人の外見に気をとられやすい。
9. 表面的な他者の印象に心を奪われやすい。
10. 他者の服装や化粧などが気になる。
11. 人の体形やスタイルなどに関心がある。

空想的他者意識

12. 人のことをよく空想する。
13. 人のことをあれこれと考えていることが多い。
14. 人のことにしばしば思いをめぐらす。
15. 人のことがいろいろと心に浮ぶ。

削除項目

16. いつも人のことを意識したり考えたりしている。
17. 人のことが気になる。
18. 人の気持ちを知りたい。
19. 人の態度やふるまいが気になる。
20. 人がどのように自己表現するかが気になる。
21. 人のマナーやふるまいに目が向きやすい。
22. 人がどんなことを感じたり
23. 考えたりしているのかが気になる。

（注）項目16～項目23は分析に使用していない

④自己意識尺度（辻，1993）

私的自己意識

1. 常に自分自身を理解しようと心がけている。
2. 自分の感情や気持ちに注意を払っていることが多い。
3. 自分の動機や気持ちをいつも分析している。
4. 何かの課題に取り組んでいるときでも、心の動きを意識している。
5. 自分についてよく考え込む。
6. 知らぬ間に自分の感情や心の動きに注意を向けている。
7. 自分の心の動きを、他人の目で眺めているような気がすることがある。

公的自己意識

8. 自分をどのように見せるかに関心がある。
9. 自分が人にどのように見えるかを意識している。
10. 人によい印象を与えたかどうか気になる。
11. 出かける前には必ず鏡を見る。
12. 自分が他の人にどう思われているかが気になる。

13. 自分の外見には気を配っている。
 14. 自分の性格が人にどう思われているかに関心がある。
 15. 自分の体型やスタイルを常に意識している。
- 社会的不安
16. 新しい場面に慣れるのに時間がかかる。
 17. すぐに当惑してしまう。
 18. 人に見られていると動作がぎこちなくなる。
 19. 知らない人にでも平気で話しかけることができる。
 20. 人前で話すのは不安である。
 21. 大勢の集団の中に入ると、神経質になる。

⑤自尊心尺度（山本ら，1982）

1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である。
 2. 色々な良い素質をもっている。
 3. 敗北者だと思ふことがよくある。
 4. 物事を人並みには、うまくやれる。
 5. 自分には、自慢できるところがあまりない。
 6. 自分に対して肯定的である。
 7. だいたいにおいて、自分に満足している。
 8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。
 9. 自分は全くだめな人間だと思ふことがある。
 10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ。
- （注）項目9は分析に使用していない

⑥不信尺度（天貝，1995）

1. 今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思ふ。
2. 私の地位や立場が変われば、私自身も今とは全く違う人間になるだろう。
3. しょせん、周りは敵ばかりだと感じる。
4. 相手が自分を大事にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるときだ。
5. 人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう。
6. 今は何かと話せても、他人など全く当てにならないものである。
7. 気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。
8. 私はなぜか人に対して疑り深くなってしまふ。
9. 自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする。
10. 過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが恐くなっている。

⑦個人志向性・社会志向性尺度（伊藤，1993a）

個人志向性

1. 自分の個性を活かそうと努めている。
2. 自分の心に正直に生きている。
3. 小さなことも自分ひとりでは決められない。
4. 自分の生きるべき道が見つからない。
5. 自分が満足していれば人が何を言おうと気にならない。
6. 自分の信念に基づいて生きている。
7. 周りとは反対でも、自分が正しいと思ふことは主張できる。
8. 自分が本当に何をやりたいのかわからない。

社会志向性

9. 人に対しては、誠実であるよう心掛けています。
10. 他の人から尊敬される人間になりたい。
11. 他の人の気持ちになることができる。
12. 他人に恥ずかしくないように生きている。
13. 周りとの調和を重んじています。
14. 社会のルールに従って生きていると思う。
15. 社会（周りの人）のために役に立つ人間になりたい。
16. 人とのつながりを大切にしている。
17. 社会（周りの人）の中で自分が果たすべき役割がある。

⑧Children's Depression Inventory (CDI) 日本語版（村田ら，1989）

-
1. [] わたしは悲しいことがちょっとだけあった
 [] わたしは悲しいことが多かった
 [] わたしはずっと悲しかった

 2. [] 何にもうまくいかないような気がする
 [] うまくいくかどうかわからない
 [] たぶん何でもうまくいくような気がする

 3. [] わたしはほとんどのことがうまくやれている
 [] わたしはまちがうことが多い
 [] わたしはいつもまちがってばかりいる

 4. [] わたしはなにをやっても楽しい
 [] わたしは楽しいことがときどきある
 [] わたしはなにをやっても楽しくない

 5. [] わたしはいつも悪い子だった
 [] わたしは悪い子の時が多かった
 [] わたしはときどき悪い子だった

 6. [] わたしに悪いことが起こらないかとちょっと気になった
 [] わたしに悪いことが起こらないかと心配だった
 [] わたしに悪いことが必ず起こりそうな気がする

 7. [] わたしは自分が嫌いだ
 [] わたしは自分があまり好きではない
 [] わたしは自分が好きだ

 8. [] 悪いことはみんな自分のせいだと思う
 [] 悪いことの多くが自分のせいだと思う
 [] 悪いことのほとんどは自分のせいではない

 9. [] わたしは死にたいと考えたことはない
 [] わたしは死にたいと考えたことはあるが、死のうとは思わない
 [] わたしは死にたいと思う

10. [] わたしは毎日泣きたくなる
[] わたしは泣きたくなる日が多い
[] わたしはちょっと泣きたくなることがある
-
11. [] あることがわたしをいつも苦しめる
[] あることがわたしを苦しめることが多い
[] あることがちょっとだけわたしを苦しめる
-
12. [] わたしは他の人と一緒にいることが好きだ
[] わたしは他の人と一緒にいたくないと思うことが多い
[] わたしは絶対他の人と一緒にいたくない
-
13. [] わたしは一人で物事を決められない
[] わたしは一人で物事を決めるのがむずかしい
[] わたしは一人で物事を簡単に決められる
-
14. [] わたしの顔は良い
[] わたしの顔にはちょっと気に入らないことがある
[] わたしの顔はみにくい
-
15. [] わたしは学校の勉強をするのにいつもがんばってやらなくてはならない
[] わたしは学校の勉強をするのにがんばってやらなくてはならないことが多い
[] わたしは学校の勉強をするのにそう問題はない
-
16. [] わたしは眠れなくていつも困っている
[] 私はよく眠れないことがある
[] 私はよく眠れている
-
17. [] わたしはちょっとだけ疲れることがあった
[] わたしは疲れた日が多かった
[] わたしはほとんど疲れていた
-
18. [] わたしはほとんど毎日食欲がなかった
[] わたしは食欲がない日が多かった
[] わたしはほとんど疲れていた
-
19. [] わたしはほとんど毎日食欲がなかった
[] わたしは食欲がない日が多かった
[] わたしはおいしく食べている
-
20. [] わたしはひとりぼっちであると思わない
[] わたしはひとりぼっちだと思うことが多い
[] わたしはひとりぼっちだと思っている
-
21. [] わたしは学校を楽しいと思ったことがまったくない
[] わたしは学校を楽しいと思うことはちょっとしかない
[] わたしは学校がいつも楽しい
-
22. [] わたしは友達がたくさんいる

- [] わたしは友達何人かいるが、もっと欲しい
[] わたしは友達がいらない
-

23. [] 学校の勉強がうまくいっている
[] 学校の勉強が前ほどうまくいかない
[] 以前は良かった科目がたいへん悪くなった
-

24. [] わたしは他の子どものようにどうしても良い子になれない
[] わたしはやろうとしたら他の子どものようによい子になれる
[] わたしは他の子どもと同じように良い子である
-

25. [] わたしは誰からも本当には好かれていない
[] わたしは誰かに好かれているかどうかわからない
[] わたしはきっと誰かに好かれていると思う
-

26. [] わたしは言われたことはいつもする
[] わたしは言われたことをしないことが多い
[] わたしは言われたことは絶対しない
-

27. [] わたしは他の人とうまくやれている
[] わたしは他の人とよくけんかする
[] わたしは他の人とけんかばかりしている
-

⑨対人恐怖心性尺度（堀井・小川，1997）

自分や他人が気になる悩み

1. 他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる
2. 自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう
3. 自分が相手の人に嫌な感じを与えているように思ってしまう
4. 自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする
5. 人と会うとき、自分の顔つきが気になる

集団に溶け込めない悩み

6. 集団の中にとけこめない
7. グループでのつき合いが苦手である
8. 仲間のなかにとけこめない
9. 人との交際が苦手である
10. 人が大勢いると、うまく会話の中に入っていけない

社会場面で当惑する悩み

11. 人前に出るとおどおどしてしまう
12. 会議などの発言が困難である
13. 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない
14. 大勢の人のなかで向かい合って話すのが苦手である
15. 人が大勢いると、うまく会話の中に入っていけない

⑩登校回避感情尺度（藤垣，1996）

1. 学校に来てものなにも楽しいことがない。
2. 朝、何となく学校に行きたくないときがある。

3. 学校さえなければ、毎日が楽しいだろうと思う。
4. わたしはこの学校が好きである。
5. 学校では嫌なことばかりある。
6. 日曜の朝、明日から学校かと思うと気が重くなる。
7. 学校をやめたくなることがある。
8. 授業が終わったらすぐ学校を出たいと思う。
9. 今の学校がいやで転校したいと思うことがある。
10. できれば学校なんかなくなればいいと思う。
11. 学校にいるとゆううつになる。

⑪登校拒否関連性各尺度（本城ら，1999）

強迫性因子

1. 何事もきちんとやらないと気がすまない方です。
2. 先生や親に言われたことはその通りに従う方です。
3. 時間などの約束事はきちんと守りたい方です。
4. 宿題はきちんとやらないと気になる方です。
5. 学校の規則などはきちんと守る方です。
6. やらないといけないことは完ぺきにやりたい方です。
7. きちようめんな方です。
8. 何事も完ぺきにできたかどうか気になる方です。
9. 何事も完ぺきにできたかどうか気になる方です。

消極・非社会的因子

10. どちらかというと友達が少ない方です。
11. どちらかというと、友だちの後からついていく方です。
12. 自分から友達を誘うより、誘われれば遊ぶ方です。
13. 自己主張するよりは、人の意見に従う方です。
14. 自分から友達の家遊びに行くことはありません。
15. 自分から友達を引っ張っていく方です。

内弁慶因子

16. 自分の欲しいものがあると、親に買ってもらうまで、だだをこねる方です。
17. 家では、自分の思い通りにならないと気がすまないところがあります。
18. 家では言い出したら聞かないところがあります。
19. 外ではおとなしいのに、家ではわがままなところがある。
20. 聞きわけのよい子だと思う。

（注）項目20は分析に使用していない

あとがき

大学4年生で卒業論文のテーマを探している時、たまたま一般青年における妄想的観念の研究があることを知った。当時は、何となく卒業論文のテーマに選んだ。まさかそれが博士論文のテーマになるとは全く思いもしなかった。何となく選んだテーマではあったけれども、関心を持ち続けることができ、それなりに形とすることができた。共同研究をいくつか同時に行っていたにもかかわらず、このテーマから離れていくことはなかった。不思議なものである。なぜだろうと考えてみると、やはり自分には、他者のことを気にしすぎる心性が、若干あるのであらうか。そう考えると、少し妙な気持ちになるけれども、そのような心性を今後も忘れずにおきたいものだと思う。

ところで、本論文には不完全な部分が多々残されている。けれども、大学院を修了するにあたり、これまでの研究報告書として提出することとなった。今後は、残された不完全な部分を修正しながら、さらに研究を進めていくことになるだろう。

これまで多くの方々のお世話になりました。名古屋大学発達心理精神科学教育研究センターの本城秀次先生には大変お世話になりました。論文指導をはじめ、日々の研究臨床活動において様々な御指導を賜りました。こころより深く感謝申し上げます。本城先生とは、指導教官として何かと接する機会が多く、そのようなちょっとしたさりげない接触の機会に、論文指導では学べないような、いろいろなことを数多く学ぶことができました。

名古屋大学発達心理精神科学教育研究センターの村瀬聡美先生、名古屋大学大学院教育発達科学研究科の吉田俊和先生には、お忙しい中、拙論に対して的確なコメントを数多く頂きました。こころよりお礼申し上げます。

教育発達科学研究科心理学系の諸先生方には、授業や臨床活動などを通して様々なご指導を賜りました。深く感謝申し上げます。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科の中谷素之先生には、私が初めて書き上げた投稿論文の草稿に丁寧に目を通していただきました。それ以後、公私に渡りさまざまなご配慮を頂きました。謹んでお礼申し上げます。

名古屋大学医学部精神医学教室児童グループの諸先生方には、研究実施にあたり様々なご配慮をいただきました。特に、猪子香代先生（現：東京都精神医学総合研究所）には多大なご配慮を賜り、共同研究者としての的確なコメントを頂きました。謹んでお礼申し上げます。

国立精神・神経センターの菅原ますみ先生には、共同研究者としてご指導ご鞭撻を賜りました。こころよりお礼申し上げます。

名古屋大学発達心理精神科学教育研究センターの荒井紫織さんには、データ整理にご協力いただきました。有松クリニックの高村咲子さんには、共同研究者として、的確なコメントを頂きました。

妊産婦研究会・CAS研究会・レジリエンス研究会の皆様には、メンバーとして関わることを通して、私の研学生活を支えていただきました。研究会において様々な議論を通して得たことが、本論文にも間接的に影響しています。

最後に、青年期に長く大学院にとどまることになっても私を信頼して見守ってくれた両親と、本論文の様々な段階で有益なコメントを与え、私がくじけそうになった時にはいつも明るく叱咤激励し続けてくれた妻の咲代に、深く感謝します。